

5 4 3

2 1



始



543
27





然丈艸

草記紙

全全全

大正

15. 9. 16

内交

3
541-21

緒言

枕草紙は、一條帝の皇后定子に奉仕したりし清少納言の著しゝ所にして、觀察の奇警、行文の簡勁を以て稱せらる。即ちあらゆる事物事件に對して、犀利なる批判と自由なる感想とを縦横に披瀝したるものにして、一雙眼を具へたる女性の隨感錄たると同時に、又平安時代の一種の側面觀史とも見るべし。

方丈記は、建曆の頃日野山奥に閑居したる鴨長明の著はせる所也。此書、量多からずと雖も、好く佛教思想の眞諦を捉へ、世相人事の轉變を達觀し、筆路淡々として自ら無限の幽情を寓せり。

徒然草は、南北戦亂の時に當り、洛西雙ヶ岡に世を背きたる吉田兼好が、事に觸れ折に臨みて其抱懷を漏らしたる書也。釋典を經とし、老莊を緯としたる出世間的の思想に充ち、又兼好一流の趣味觀の其間に横溢するものありて、筆路、遒麗寔に言ひ難き興趣あり。

以上三書の校訂に關しては、枕草紙は春曙抄原本に基き、傍註抄、其他數種の異本を参照し、方丈記は、流水抄及び諺解の原本に據り、徒然草は文段抄を底本に用ひ、諸抄大成の類を參考し、異本に於て差異の甚しきものは、何れも頭註に標記し置けり。枕草紙、徒然草中の對話の全部、及び引用句の類にして本文と紛らはしきものには、概ね引用符を附せり。元來我邦の文章にては、語法の性質上、其對話に於て、直接法と間接法との區別を明確

にしがたき所ありて、一々之に引用符を施すは不穩當の嫌ひあるも、もと解釋上の困難は多く茲に起因するが故に、假に對話其他に之を施して閱讀通解の便を圖りたる也。

本書の索引は、三種ともに、思想、語句、逸話、故實、故事、其他の各方面に互りて最も詳細精密ならん事を期せり、これ我が古典中の三大隨筆は、其研究引用の範圍極めて廣く、一讀の後尙ほ反覆參考の要あるべきを信じたれば也。

大正元年十月

校訂者 塚本 哲三

一 緒言
 二 枕草紙
 三 方丈記
 四 徒然草
 五 索引

目錄

一 枕草紙……………一
 一 方丈記……………二九七
 一 徒然草……………三一七
 枕草紙索引……………四五九
 方丈記索引……………五五七
 徒然草索引……………五七一

枕草紙

なかし趣あり
あはれなり
情趣深し
炭を持ち
歩くなども
季節がら似
合はしき趣
あり

春は曙あけぼの やうく白くなりゆく山際やまぎはすこしあかりて、紫むらさきだちたる雲の細くたなびきたる。
夏は夜よる 月の頃はさらなり、闇やみもなほ螢飛びちがひたる、雨などの降るさへをかし。秋
は夕暮ゆふぐれ、夕日ゆふひはなやかにさして、山の端はいと近くなりたるに、鳥のねどころへ行くとて、
三つ四つこつななど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁かりなどのつらねたるが、いとちひ
さく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風の音、蟲のねなど、いとあはれなり。冬
は雪の降りたるは、いふべきにもあらず。霜しもなどのいと白く、またさらでもいと寒き
火など急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつきづくし。晝ひるになりて、ぬるくゆるび
もてゆけば、炭櫃すびひ火桶ひきの火も、白き灰がちになりぬるはわろし。
ころは、正月、三月、四五月、七月、八九月、十月、十二月、すべてをりにつけつと、

枕草紙

白馬―正月七日、左右馬寮より二一匹の白馬を宮庭に引き出し、天皇の御覽に供へ、又庶民にも示す
顔のきぬ―顔の地膚

一年ながらをかし。
正月一日は、まいて空の景色うらくと珍しく、かすみこめたるに、世にありとある人は、すがたかた姿容心ことにつくろひ、君をもわが身をも祝ひななどしたるさま、殊にをかし。
七日は、雪間の青わか菜青やかに摘み出でつゝ例はさしもさる物目近ものめぢかからぬ所に、もてさわぎ、白馬見んとて、里人は車ききよけにしたてて見みにゆく。中の御門なかみかぢの闕せきひき入るよほど、頭かしらども一處ひたひたにまろびあひて、指櫛さしぐしも落ち、用意せねば折れななどして、笑ふもまたをかし。左衛門さゑもんの陣ぢんなどに、殿上人てんじやうびあまた立ちななどして、舍人せねりの弓ゆみども取りて、馬ども驚かして笑ふを、僅ほんに見入れたれば、立部たてじぶなどの見ゆるに、主殿司このもりづかさ女官にようくわんなどの、行きちがひたるこそをかしけれ。いかばかりなる人、九重ここのへをかく立ち馴ならすらんなど思ひやるよ中うちにも、見るはいと狭せきほどにて、舍人せねりが顔のきぬもあらはれ、白きもののゆきつかぬ所は、誠に黒き庭に雪のむら消えたる心地こころちして、いと見ぐるし。馬のあがり騒さわぎたるも恐おそしく覺ゆれば、引き入られてよくも見やられず。

もちかゆ―望粥、小豆粥なり

心もとなく―待遠しくあなかま―あゝ喧しおほどかにて―鷹揚たかたかにして
まがく―しなく―思おもひに

八日、人々よろこびして走りさわぎ、車の音も、つねよりはことに聞えてをかし。十五日は、もちかゆの節せつ供くまるる。かゆの木きひき隠して、家の御達ごだち、女房にようぼうなどのうかどふを、うたれじと用意して、常に後うしろを心づかひしたる景色もをかしきに、いかにしてけるにかあらん、打ちあてたるは、いみじう興きようありとうち笑ひたるも、いと榮はな々々し。ねたしと思ひたる、ことわりなり。去年こぞより新しう通とほふ壻じこの君きみなどの、内裏うちへ参まゐるほどを、心もとなく、所につけて我われはと思ひたる女房にようぼうののぞき、奥のかたにたたすまふを、前まへにゐたる人は心得て笑ふを、「あなかま―」と招きかくれど、君見きみ知らず顔にて、おほどかにて居給へり。「ことなる物とり侍らん」などいひ寄り、はしりうちて逃ぐれば、あるかぎり笑ふ。男君おとこきみもにくからず愛敬あいぎやうづきて笑みたる、ことに驚かず、顔少し赤みてるたるもをかし。また互かたみに打ちて、男おとこなどをさへぞうつめる。いかなる心にかあらん、泣きはらだち、打ちつる人を呪のろひ、まがく―しくいふもをかし。内裏うちわたりなど、やんごとなきも、今日はみな亂れて、かしこまりなし。

除目―春行
はるゝは縣
召（アガタ
メシ）の除
目とて地方
官任免の式
申文―任官
志願書
啓し給へ―
皇后へ申す
を啓といふ
まゆにこも
りたる―柳
の僅に芽々
みたるを置
の臍に譬へ
いふ
祭―賀茂の

除目のほどなど、内裏わたりはいとをかし。雪降りこほりなどしたるに、申文もてありく。四位五位、わかやかに心地よけなるは、いとたのもしけなり。老いて頭白きなどが、人にとかく案内いひ、女房の局によりて、おのが身のかしこきよしなど、心をやりて説き聞するを、若き人々は眞似をし笑へど、いかでか知らん。「よきに奏し給へ、啓し給へ」などいひても、得たるはよし、得ずなりぬるこそ、いとあはれなれ。
三月三日、うらくとのどかに照りたる。桃の花の今咲きはじむる。柳など、いとをかしきこそ更なれ。それもまだ、まゆにこもりたるこそをかしけれ。廣ごりたるはにくし。花も散りたる後はうたてぞ見ゆる。おもしろく咲きたる櫻を長く折りて、大なる花瓶にさしたるこそをかしけれ。櫻の直衣に、出仕して、客人にもあれ、御兄の公達にもあれ、そこ近くるて物などうちいひたる、いとをかし。そのわたりに、烏蟲のひたひつきいと美しうて飛びありく、いとをかし。
祭のころはいみじうをかし。木々のこの葉、まだ繁うはなうて、わかやかに青みたるに、

祭、四月、中
の酉の日に
行はる
たどくし
きを―はつ
きりとせぬ
聲を
履子―クツ
ツケノアシ
ダ（和名抄）
ちやうざ―
長者、東寺
の住持なり
ことぐ―
異事、特に
きはだち異

霞も霧もへだてぬ空の景色の、何となくそとろにをかしきに、少し曇りたる夕つかた、夜など、忍びたる杜鵑の、遠うそら耳かと覺ゆるまで、たどくしきを聞きつけたらん、何ごこちかはせん。祭近くなりて、青朽葉、二藍などのものもおしまきつよ、細櫃の蓋に入れ、紙などにけしきばかり包みて、行きちがひもて歩くこそをかしけれ。末濃、村濃、巻染など、常よりもをかしう見ゆ。童女の頭ばかり洗ひつくろひて、形は皆矮えほころび、打ち亂れかよりたるもあるが、履子、沓などの緒すけさせ、裏をさせなどもて騒ぎ、いつしかその日にならんと、急ぎ走り歩くもをかし。怪しう踊りて歩く者ども、さうぞきたてつれば、いみじく、ちやうざといふ法師などのやうに、ねりさまよふこそをかしけれ。ほどくにつけて、親をばの女、姉などの供して、つくろひ歩くもをかし。
ことぐなるもの
法師の詞。男女の詞。下司の詞にはかならず文字あまりしたり。

なりたる物

験者—修験者、加持祈禱者

てうする—調伏する

所狭く云々—窮屈にて心中いかに苦しからんと氣の毒也
四足—四足門、四本柱を四方に添

おもはん子を法師になしたらんこそは、いと心苦しけれ。さるは、いとたのもしきわざを、唯木のはしなどのやうに思ひたらんこそ、いといとほしけれ。精進物のあしきを食ひ、寐ぬるをも、若きは物もゆかしからん。女などのある所をも、などか忌みたるやうに、さしのぞかすもあらん。それをも安からずいふ。まして験者などのかたは、いと苦しけなり。御獄、熊野、かよらぬ山なく歩くほどに、恐しき目も見、験あるきこえ出できぬれば、こよかしこによばれ、時めくにつけて安けもなし。いたく煩ふ人にかよりて、物怪てうするも、いと苦しければ、困じてうち眠れば、「ねぶりなどのみして」と咎むるも、いと所狭く、いかに思はんと。これは昔のことなり。今様はやすけなり。大進生昌が家に、宮の出でさせ給ふに、東の門は四足になして、それより御輿は入らせ給ふ。北の門より女房の車ども、陣屋の居ねば入りなんやと思ひて、髪つきわろき人も、いたくもつくろはず、寄せて下るべきものと思ひあなづりたるに、檳榔毛の車などは、門ちひさければ、さはりてえ入らねば、例の筵道しきておるよに、いとにくく腹だたし

へ造れる門
陣屋の云々—宮中の如く左右衛門の陣所の宿直人も居るにあらねば只乗車のまま入るべき事と思ひて

于定國—前漢書に出づ
進士—式部省の官吏登庸試験に應ぜしむべく國々より選出せる人材

けれど、いかゞはせん。殿上人、地下なるも、陣に立ちそひ見るもねたし。御前に参りて、ありつるやう啓すれば、「こよにも人は見るまじくやは。などかはさしもうち解けつる」と笑はせ給ふ。「されど、それは皆めなれて侍れば、よくしたて侍らんにしこそ驚く人も侍らめ。さてもかばかりなる家に、車入らぬ門やはあらん。見えば笑はん」などいふ程にしも、「これまるらせん」とて、御硯などさしいる。「いで、いとわろくこそおはしけれ。などてかその門狭く造りて、住み給ひけるぞ」といへば、笑ひて、「家のほど身のほどに合せて侍るなり」と答ふ。「されど門の限を、高く造りける人も聞ゆるは」といへば、「あなのおそろし」と驚きて、「それは于定國がことにこそ侍るなれ。ふるき進士などに侍らずば、承り知るべくも侍らざりけり。たましくこの道にまかり入りにければ、かうだに辨へられ侍る」といふ。「その御道もかしこからざめり。筵道敷きたれば、皆おち入りて騒ぎつるは」といへば、「雨の降り侍れば、實にさも侍らん。よし、また仰せかくべき事もぞ侍る、罷り立ち侍らん」とていぬ。「何事ぞ、生昌がいみじうおぢつるは」

それも尋ねず—この語の下に、ねぶたければそのまゝ寐たりと補ひ見るべし。ゆめに—決して見えぬもの—不思議なるもの、妙なもの

と問はせ給ふ。「あらず、車の入らざりつることいひ侍る」と申しておりぬ。同じ局に住む若き人々などして、萬の事も知らず、ねぶたければ皆寝ぬ。東の對の西の廂かけてある北の障子には、鑊もなかりけるを、それも尋ねず。家主なれば、案内をよく知りてあけてけり。あやしう濁ればみたるものの聲にて、「侍はんにはいかど」と數多たびいふ聲に、驚きて見れば、几帳の後に立てたる燈臺の光もあらはなり。障子を五寸ばかりあけていふなりけり。いみじうをかし。更にかやうのすきくしきわざ、ゆめにせぬもの、家におはしましたりとて、無下に心にまかするな、めりと思ふもいとをかし。わが傍なる人を起して、「かれ見給へ、かよる見えぬものあ、めるを」といへば、頭をもたけて見やりて、いみじう笑ふ。「あれは誰ぞ、顯證に」といへば、「あらず、家主、局主人と定め申すべき事の侍るなり」といへば、「門の事をこそ申しつれ、障子開け給へとやはいふ」「なほその事申し侍らん、そこに侍はんはいかにく」といへば、「いと見苦しきこと、更にえおはせじ」とて笑ふめれば、「若き人々おはしけり」とて、ひきたてていぬる、後に

つとめて—その翌朝ちうせい—小さい、生昌の方言口調をそのまま寫せる也折敷—片木板へへギイタを折りまげて作れる盆まゐりよからめ—食べよからんきすく—氣直、正直—

笑ふこといみじ。あけぬとならば、唯まづ入りねかし。消息をするに、よかんなりとは誰かはいはんと、けにをかしきに、つとめて、御前に参りて啓すれば、「さる事も聞えざりつるを、昨夜のことに愛でて、入りにたりけるな、めり。おはれ彼をはしたなく言ひけんこそ、いとほしけれ」と笑はせ給ふ。姫宮の御かたの童女に、装束せさすべきよし仰せらるゝに、「わらはの袖の上襲は何色に仕う奉るべき」と申すを、又笑ふもことわりなり。「姫宮の御前のものは、例のやうにては悪氣に候はん。ちうせい折敷、ちうせい高杯にてこそよく候はめ」と申すを、「さてこそは、上襲著たる童女もまゐりよからめ」といふを、「猶例の人のやうに、かかないひ笑ひそ、いとすくなるものを、いとほしけに」と制したまふもをかし。中間なるをりに、「大進ものきこえんとあり」と、人の告ぐるを聞き召して、「又なでふこといひて笑はれんとならん」と仰せらるゝもいとをかし。「行きて聞け」とのたまはすれば、わざと出でたれば、「一夜の門のことを中納言に語り侍りしかば、いみじう感じ申されて、いかでさるべ

またこともなし―他に別段の用事もなし

めでたし―原本をかしに作る
かうふり給はりて―叙爵して
しれもの―翁丸(犬の名)をいふ
打ち調じて

からんをりに對面して、申しうけたまはらんとなん申されつる」とて、またこともなし。一夜のことやいはんと、心ときめきしつれど、「今しづかに御局にさぶらはん」と辭していぬれば、歸り参りたるに、「さて何事ぞ」とのたまはすれば、申しつる事を、さなんとまねび啓して、「わざと消息し、呼び出づべきことにもあらぬを、おのづからしづかに局などにおらんにもいへかし」とて笑へば、「おのが心地に賢しとおもふ人の譽めたるを、嬉しと思ふとて、告げ知らするならん」とのたまはする御氣色もいとめでたし。うへに侍ふ御猫は、かうふり給はりて、命婦のおもととて、いとをかしければ、寵かせ給ふが、端に出でたるを、乳母の馬の命婦「あなまさなや、入り給へ」とよぶに、聞かで、日のさしあたりたるにうち眠りてゐたるを、おどすとて、「翁丸いづら、命婦のおもと食へ」といふに、まことかとて、しれもの走りかよいたれば、おびえ惑ひて、御簾の内に入りぬ。朝餉の間にうへはおはします。御覽じて、いみじう驚かせ給ふ。猫は御懐に入れさせ給ひて、男ども召せば、藏人忠隆まゐりたるに、「この翁丸打ち調じて、犬島に

―打ち懲して
さいなみて
―譴責して

さうぐしく―寂しく
なにぞ―何ぞ、いかなる
翁丸なり―一本翁なり
リ、心うの事云々は清少の心中、次の詞は御厠人の重ねていふ也

つかはせ。只今」と仰せらるれば、集りて狩りさわぐ。馬の命婦もさいなみて、「乳母かへてん、いとうしろめたし」と仰せらるれば、かしこまりて、御前にも出でず。犬は狩り出でて、瀧口などして追ひつかはしつ。「あはれ、いみじくゆるぎ歩きつるものを。三月三日に、頭の辨柳のかづらをせさせ、桃の花かざしにさせ、櫻腰にさせなどして、ありかせ給ひしをり、かよる目見んとは思ひかけんや」とあはれがる。「御膳のをりは、必むかひさぶらふに、さうぐしくこそあれ」などいひて、三四日になりぬ。ひるつかた、犬のいみじく泣く聲のすれば、なにぞの犬の、かく久しくなくにかあらんと聞くに、よろづの犬ども走り騒ぎとぶらひに行く。御厠人なるもの走り來て、「あないみじ、犬を藏人二人して打ちたまひ、死ぬべし。流させ給ひけるが歸りまゐりたるとて、調じ給ふ」といふ。心うのことや。翁丸なり。「忠隆實房なん打つ」といへば、制しに遣るほどに、辛うじてなき止みぬ。「死にければ門の外にひき棄てつ」といへば、あはれがりなどする夕つかた、いみじけに腫れ、あさましけなる犬のわびしけなるが、わなよきありければ、「あは

丸一翁丸の略稱

ゆゑしげに不氣味に

あらぬものに云々一翁丸ならずときめてしまへり

侍ふに一清少納言が也

さはこれ一かくわが言に感激して

れ丸か、かゝる犬やはこのごろは見ゆる」などいふに、翁丸と呼べど耳にも聞き入れず。それぞといひ、あらずといひ、口々申せば、「右近ぞ見知りたる、呼べ」とて、下なるを「まづとみのこと」とて召せば参りたり。「これは翁丸か」と見せ給ふに、「似て侍れども、これはゆゑしげにこそ侍るめれ。また翁丸と呼べば、悦びてまうで来るものを、呼べど寄りこず、あらぬなめり。それは打ち殺して、棄て侍りぬとこそ申しつれ。さるものども二人して打たんには、生きなんや」と申せば、心うがらせ給ふ。暗うなりて、物くはせられた食はねば、あらぬものにいひなして止みぬる。つとめて、御梳櫛にまゐり、御手水まゐりて、御鏡もたせて御覽すれば、侍ふに、犬の柱のもとについ居たるを、「あはれ昨日、翁丸をいみじう打ちしかな。死にけんこそ悲しけれ。何の身にかこのたびはなりぬらん。いかにわびしき心地しけん」とうちいふほどに、この寝たる犬ふるひわなよきて、涙をたど落しにおとす。いとあさまし。さはこれ翁丸にこそありけれ。よんべは隠れ忍びてあるなりけりと、あはれにて、をかしきことかぎりなし。御鏡をもうちおきて、「さは

涙を流すからばこれ正しくうへ一條院

物調せさせばや一何か食事をせさせたし

畏勤事一勅勤をいふ

翁丸」といふに、ひれ伏していみじくなく。御前にもうち笑はせ給ふ。人々まゐり集りて、右近内侍召して、かくなど仰せらるれば、笑ひのよしるを、うへにも聞し召して、渡らせおはしまして、「あさましう犬などもかゝる心あるものなりけり」と笑はせ給ふ。うへの女房たちなども来りまゐり集りて呼ぶにも、今ぞ立ちうごく。なほ顔など腫れためり。「物調せさせばや」といへば、「終にいひあらはしつる」など笑はせ給ふに、忠隆聞きて、臺盤所のかたより、「まことにや侍らん、かれ見侍らん」といひたれば、「あなゆゑし、さる者なし」といはすれば、「さりとも終に見つくる折もはべらん、さのみもえかくさせ給はじ」といふなり。さて後畏勤事許されて、もとのやうになりき。猶あはれがられて、ふるひなき出でたりし程こそ、世に知らずをかしくあはれなりしか。人々にもいはれて泣きなどす。

正月一日、三月三日は、いとうらよかなる。五月五日は曇りくらしたる。七月七日は曇り、夕がたは晴れたる空に月いとあかく、星のすがた見えたる。九月九日は、曉がたより

こちたくそ
ぼち―ひど
く濡れて
たてるを―
立てるよ、
下なるさわ
ぐよと竝立
の格
枝扇―僧侶
用の扇なり
定證僧都の
身長高きに
思ひよせた
る洒落

雨少し降りて、菊の露もこちたくそほち、おほひたる綿などもいたくぬれ、うつしの香ももてはやされたる。つとめては止みにたれど、なほ曇りて、やよもすれば、降り落ちぬべく見えたるもをかし。

よろこび奏するこそをかしけれ。後をまかせて、笏とりて、御前の方に向ひてたてるを。拜し舞踏しさわぐよ。

今内裏の東をば、北の陣とぞいふ。櫓の木の遙にたかきが立てるを、常に見て、「幾尋かあらん」などいふに、權中將の「もとより打ちきりて、定證僧都の枝扇にせさせばや」とのたまひしを、山階寺の別當になりて、よろこび申すの日、近衛府にて、この君の出で給へるに、高き履子をさへはきたれば、ゆよしく高し。出でぬる後こそ、「などその枝扇はもたせ給はぬ」といへば、「ものわすれせず」と笑ひ給ふ。

山は

小倉山。三笠山。このくれ山。わすれ山。いりたち山。鹿背山。ひはの山。かたさり山

所おきける
―遠慮した
る、片去り
より思ひつ
きたる洒落
わが名云々
―古今集、
天智天皇、
犬上のとこ
の山なる名
取川いさと
答へてわが
名もらすな
よそに云々
―古今六帖
昔見し人を
ぞ我はよそ
にせし朝倉
山の雲井遙
に

こそ、誰に所おきけるにかと、をかしけれ。五幡山。後瀬山。笠取山。ひらの山。烏籠

の山は、わが名もらすなと、みかどのよませ給ひけん、いとをかし。伊吹山。朝倉山

よそに見るらんとをかしき。岩田山。大比禮山もをかし、臨時の祭の使などおもひ出

でらるべし。手向山。三輪の山、いとをかし。音羽山。待兼山。玉坂山。耳無山。末の

松山。葛城山。美濃の御山。柞山。位山。吉備の中山。嵐山。更級山。姨捨山。小鹽山。

浅間山。かたよめ山。かへる山。妹背山。

峯は

ゆづるはの峯。阿彌陀の峯。彌高の峯。

原は

竹原。養の原。朝の原。その原。萩原。粟津原。奈志原。うなるごが原。安倍の原。篠

原。市は

數多ある中に大和に幾多の市ある中に特に

誰に云々一
な入りそ、
即ち入る勿
れの語より
思ひつきた
る洒落

藏人云々一
六位藏人は
陛下御臺の
御おろしな
る青色の袍
を著す

辰の市。椿市は、大和に數多ある中に、長谷寺にまうづる人の、かならずそこにとどまりければ、觀音の御縁あるにやと、心ことなるなり。おふさの市。飭摩の市。飛鳥の市。

淵は
かしこ淵。いかなる底の心を見せて、さる名をつけけんと、いとをかし。ないりその淵、誰にいかなる人の教へしならん。青色の淵こそまたをかしけれ、藏人などの身にしつべくて。いな淵。かくれの淵。のぞきの淵。玉淵。

海は
水うみ。與謝の海。かはぐちの海。伊勢の海。

わたりは
しかすがの渡。みつはしの渡。こりすまの渡。

山陵は
うぐひすの陵。柏原の陵。あめの陵。

家は

清和院一原
本せかゝるに
作る

大納言殿一
中宮定子の
御兄伊周な
るべし

櫻、藤、山
吹一重れの
色目

近衛の御門。二條。一條もよし。染殿の宮。清和院。菅原の院。冷泉院。朱雀院。とうるん。小野宮。紅梅。縣の井戸。東三條。小六條。小一條。清涼殿のうしとらの隅の北のへだてなる御障子には、荒海の繪。生きたるものどものおそろしけなる、手長足長をぞ書かれたる。うへの御局の戸、押しあけたれば、常に目に見ゆるを、にくみなどして笑ふほどに、高欄のもとに、青き瓶の大なる据ゑて、櫻のいみじくおもしろき枝の五尺ばかりなるを、いと多くさしたれば、高欄のもとまでこほれ咲きたるに、ひるかつた、大納言殿、櫻の直衣の少しなよらかなるに、濃き紫の指貫、白き御衣ども、うへに濃き綾の、いとあざやかなるを出して参り給へり。うへのこなたにおはしませば、戸口の前なる細き板敷に居給ひて、ものなど奏し給ふ。御簾のうちに、女房櫻の唐衣どもくつろかにぬぎ垂れつと、藤山吹などいろくくにこのもしく、あまた小半葎の御簾より押し出でたるほど、晝御座のかたに御膳まるる。足音高し。けはひなど、をしくといふ聲聞

けはひ一形勢、様子、旁註けいひつに作る、警蹕なり
月も日も云云一萬葉集卷十三に出づ、下の句、み室の山のとこ宮所
程遠き目一伊周の方を眺め居し目

ゆ。うらくとのどかなる日の景色いとをかしきに、終の御飯もたる藏人参りて、御膳奏すれば、中の戸より渡らせ給ふ。御供に大納言参らせ給ひて、ありつる花のもとに歸り居給へり。宮の御前の御几帳押しやりて、長押のもとに出でさせ給へるなど、唯何事もなく萬にめでたきを、さぶらふ人も、思ふことなき心地するに、月も日もかはりゆけどもひさにふるみ室の山といふ故事を、ゆるよかにうち詠み出して居給へる、いとをかしと覺ゆる。けにぞ千歳もあらまほしけなる御ありさまなるや。
陪膳つかうまつる人の、男どもなど召すほどもなくわたらせ給ひぬ。「御硯の墨すれ」と仰せらるゝに、目はそらにのみにて、唯おはしますをのみ見奉れば、ほど遠き目も放ちつべし。白き色紙おしたよみて、「これに只今覺えん故事、一つづつ書け」と仰せらるゝ。外に居給へるに、「これはいかに」と申せば、「疾く書きて参らせ給へ、男はことくはへ侍ふべきにもあらず」とて、御硯とりおろして、「とくくたど思ひめぐらさで、難波津も何もふと覺えん事を」と責めさせ給ふに、などさは臆せしにか、すべて面さへ赤みてぞ

思ひみだるゝや。春の歌、花の心など、さいふくも、上藤二つ三つ書きて、これにあるに、

年経れば齡は老いぬしかはあれど花をし見れば物おもひもなし

といふことを、君をし見ればと書きなしたるを御覽じて、「唯このころばへどもの、ゆかしかりつるぞ」と仰せらる。ついでに、「圓融院の御時、御前にて、草紙に歌一つ書けと、殿上人に仰せられけるを、いみじう書きにくく、すまひ申す人々ありける。更に手の悪しさ善さ、歌の折にあはざらんをも知らじと仰せられければ、わびて皆書きける中に、たどいまの關白殿の、三位の中將と聞えけるとき、

しほのみつづもの浦のいつもく君をばふかくおもふはやわが

といふ歌の末を、たのむはやわがと書き給へりけるをなん、いみじくめでさせ給ひける」と仰せらるゝも、すぐろに汗あゆる心地ぞしける。若からん人は、さもえ書くまじき事のさまにやとぞ覺ゆる。例いとよく書く人も、あいなく皆つよまれて、書きけがしなど

年経れば一古今集春上
ついでに一以下中宮の御物語なり

しほのみつ一萬葉第四に類歌ありその他に見えず

げによく云
云—この語
の上に、然
るにかゝる
場合に際し
てはと補ひ
見るべし

それもおほ
ゆるかは—
多数の中、
十首ばかり
思ひ出した
りとして、覺
え居るとい
ふ程ならん
や
きこしめし
—村上帝が
なり

したるもあり。古今の草紙を御前に置かせ給ひて、歌どもの本を仰せられて、「これが未
はいかに」と仰せらるゝに、すべて夜晝心にかゝりて、おほゆるもあり。けによく覚えず、
申し出でられぬことは、いかなることぞ。宰相の君ぞ十ばかり。それもおほゆるかは。
まいて五つ六つなどは、たゞ覺えぬよしをぞ啓すべけれど、「さやはけ悪く、仰事をはえ
なくもてなすべき」といひ口をしがるもをかし。知ると申す人なきをば、やがて詠みつゞ
けさせ給ふを、さてこれは皆知りたる事ぞかし。「などかく拙くはあるぞ」といひ歎く中
にも、古今あまた書き寫しなどする人は、皆覺えぬべきことぞかし。「村上の御時、宣耀
殿の女御と聞えけるは、小一條の左大臣殿の御女におはしましければ、誰かは知り聞え
ざらん。まだ姫君におはしける時、父大臣の教へ聞えさせ給ひけるは、一つには御手を
習ひ給へ、次にはきんの御琴を、いかで人にひきまさらんとおほせ、さて古今の歌二十
卷を、皆うかべさせ給はんを、御學問にはさせたまへとなん聞えさせ給ひけると、きこし
めしおかせ給ひて、御物忌なりける日、古今をかくして、持てわたらせ給ひて、例なら

おほめかし
からぬ人—
古今の歌な
どによく通
じたる女官
せめて—強
ひて

夾算—見か
けの處に挟
みおく竹札

す御几帳をひきたてさせ給ひければ、女御あやしとおほしけるに、御草紙をひろげさせ
たまひて、その年その月、何のをり、その人の詠みたる歌はいかにと、問ひきこえさせ
たまふに、かうなりと心得させたまふもをかしきものよ、ひがおほえもし、わすれたる
などもあらば、いみじかるべき事と、わりなく思し亂れぬべし。そのかたおほめかし
らぬ人、二三人ばかり召し出でて、碁石して數を置かせ給はんとて、聞えさせ給ひけん
ほど、いかにめでたくをかしかりけん。御前に侍ひけん人さへこそ羨しけれ。せめて申
させ給ひければ、賢しうやがて未までなどにはあらねど、すべてつゆ違ふ事なかりけり。
いかでなほ少しおほめかしく、僻事見つけてを止まんと、ねたきまで思しける。十卷に
もなりぬ。更に不用なりけりとして、御草紙に夾算して、みとのごもりぬるもいとめでた
しかし。いと久しうありて起きさせ給へるに、なほこの事左右なくて止まん、いとわろ
かるべしとして、下の十卷を、明日にもならば他をもぞ見給ひ合するとて、今宵定めんと、
おほとなぶら近くまゐりて、夜更くるまでなんよませ給ひける。されど終に負け聞えさ

念じ一祈り
うへ一一條
帝

數寄一風流

えせさいは
ひなど云々
一つまらぬ
男に添ひな
どしてある
は嫌なもの
也、相當な
人の女はや
はり宮仕さ
せ世の有様

せ給はずなりにけり。うへ渡らせ給ひて後、かゝる事なんと、人々殿に申し奉りければ、いみじう思し騒ぎて、御誦經など數多せさせ給ひて、そなたに向ひてなん念じ暮させ給ひけるも、すきぐしくあはれなる事なり」など語り出させ給ふ。うへも聞しめして、めでさせ給ひ、「いかでさ多くよませ給ひけん、われは三卷四卷だにもえよみはてじ」と仰せらる。「昔はえせものも皆數寄をかしうこそありけれ。このごろかやうなる事やは聞ゆる」など、御前に侍ふ人々、うへの女房のこなたゆるされたるなど参りて、口々いひ出でなどしたる程は、誠に思ふ事なくこそ覺ゆれ。おひさきなく、まめやかに、えせさいはひなど見てゐたらん人は、いぶせくあなづらはしく思ひやられて、猶さりぬべからん人の女などは、さしまじらはせ、世の中の有様も見せならはさまほしう、内侍などにも暫時あらせばやとこそ覺ゆれ。宮仕する人をば、あはしくしうわろきことに思ひるたる男こそ、いとにくけれ。けにそもまたさる事ぞかし。かけまくも畏き御前を始め奉り、上達部、殿上人、四位、五位、六位、女房は更にもいはず、見ぬ人は少くこそはあらめ。

なも知らし
めたしと也
たびしかは
ら一礫瓦、
賤しき者
おもだたし
一面目あり

にくみたる
一本死に
たるに作る
あるじせぬ
一饗應せぬ

女房の従者ども、その里より來るものども、長女、御廁人、たびしかはらといふまで、いつかはそれを恥ぢかくれたりし。殿ばらなどは、いとさしもあらずやあらん。それもある限は、さぞあらん。うへなどいひてかしづきするたるに、心にくからず覺えん理なれど、内侍のすけなどいひて、をりく内裏へ参り、祭の使などに出でたるも、おもだたしからずやはある。さて籠りたる人はいとよし。受領の五節など出すをり、さりともしいたうひなび、見知らぬ他人に問ひ聞きなどはせじと、心にくきものなり。

すさまじきもの

晝ほゆる犬。春の網代。三四月の紅梅のきぬ。嬰兒のなくなりたる産屋。火おこさぬ火桶、すびつ。牛にくみたる牛飼。博士のうちつどきに女子うませたる。方違にゆきたるにあるじせぬ所。まして節分はすさまじ。人の國よりおこせたる文の物なき。京のをもさこそは思ふらめども、されどそれはゆかしき事をも書きあつめ、世にある事を聞けばよし。人の許にわざと清けに書きたててやりつる文の、返事見ん、今は來ぬらんかしと

あやしく遅きと待つほどに、ありつる文の結びたるもたて文も、いときたなけに持ちな
ふくだめて、うへにひきたりつる墨さへ消えたるをおこせたりけり。「おはしまさどり
けり」とも、もしは「物忌とて取り入れず」などいひてもて歸りたる、いとわびしくすさ
まじ。またかならず來べき人の許に、車をやりて待つに、入り來る音すれば、さなな
りと人々出でて見るに、車やどりに入りて、轆ほうとうち下すを、「いかなるぞ」と問へ
ば、「今日はおはしませず、渡り給はず」とて、牛のかぎりひき出でていぬる。また家動り
てとりたる壻の來ずなりぬる、いとすさまじ。さるべき人の官仕する許やりて、いつし
かと思ふも、いと本意なし。兒の乳母の唯あからさまとて往ぬるを、もとむれば、とか
くあそばし慰めて「疾く來」といひ遣りたるに、「今宵はえ參るまじ」とて返しおこせたる、
すさまじきのみにもあらず、にくさわりなし。女などむかふる男、ましていかならん。待
つ人ある所に、夜少し更けて、しのびやかに門を叩けば、胸少し潰れて、人出して問は
するに、あらぬよしなきものの名のりしてきたるこそ、すさまじといふ中にも、かへす

牛のかぎり
—牛ばかり
家動りて—
一家大騒し
て
あからさま
とて—つひ
一寸といひ
て
求むれば—
兒が乳母を
探し求むる
なり

せみ聲—
本せめ聲に
作る、苦し
き聲
つかずたち
れ—護法即
ち調伏のし
るしつかず
立てとより
ましに言ふ
あれと—自
ら
上達部—任
官評議の人
人なり
いらふる—
原本いひふ

がへすすさまじけれ。驗者の物怪調すとて、いみじうしたりがほに、獨鉆や珠數などもた
せて、せみ聲にしほり出し讀み居たれど、いさよか退氣もなく、護法もつかねば、集めて
念じるたるに、男も女も怪しと思ふに、時のかはるまで讀みこうじて、「更につかず、た
ちね」とて珠數とりかへして、あれと「驗なしや」とうちいひて、額より上さまに頭さぐり
あけて、あくびをこうちして、よりふしぬる。除目に官得ぬ人の家、今年はかならずと聞
きて、はやうありし者どもの、外々なりつる、片田舎に住む者どもなど、皆集り來て、出
で入る車の轆もひまなく見え、物まうでする供にも、われもくと參り仕うまつり、物食
ひ酒飲み、のよしりあへるに、はつる曉まで門叩く音もせず。「怪し」など耳立てて聞けば、
さきおふ聲して上達部など皆出で給ふ。ものきよに、宵より寒がりわなよき居りつるけす
男など、いと物うけに歩み來るを、をるものどもは、とひだにもえ問はず。外よりきた
る者どもなどぞ、「殿は何にかならせ給へる」など問ふ。答には、「何の前司にこそは」と、
必いらふる。まことに頼みける者は、いみじう歎かしと思ひたり。翌朝になりて、隙なく

るに作る
 よろしう—
 相當に
 昔覺えて—
 昔風に、舊
 式にて
 物のをりの
 扇—祭、物
 見などに持
 つべき扇
 心ときめき
 して—よき
 祿を受くる
 ならんと心
 もどきつき
 て

をりつる者も、やうく一人二人づつすべり出でぬ。ふるきものの、さもえ行き離るまじきは、來年の國々を手を折りて數へなどして、ゆるぎ歩きたるも、いみじういとほしう、すさまじけなり。よろしう詠みたりと思ふ歌を、人の許に遣りたるに返しせぬ。懸想文はいかゞせん、それだにをりをかしようなどある返事せぬは、心おとりす。又さわがしう時めかしき處に、うちふるめきたる人の、おのがつれぐと暇あるまよに、昔覺えて、ことなる事なき歌よみして遣せたる。物のをりの扇、いみじと思ひて、心ありと知りたる人にいひつけたるに、その日になりて、思はずなる繪など書いてえたる。産養馬錢などの使に、祿などとらせぬ。はかなき藥玉、卯槌などもてありく者などにも、なほ必とらすべし。思ひかけぬことに得たるをば、いと興ありと思ふべし。これはさるべき使ぞと、心ときめきして來るに、たゞなるは、誠にすさまじきぞかし。婿とりて、四五年までうぶやのさわぎせぬ所。おとななる子どもあまた、ようせずば、孫などもはひありきぬべき人の親どちの晝寢したる。傍なる子どもの心地にも、親のひ

あるべき—
 原本ありし
 に作る
 あへず—出
 です
 心よ—と—
 原本よきと
 に作る

あなづらは
 しき人—心
 安き人

るねしたるは、よりどころなくすさまじくぞあるべき。寢起きてあぶる湯は、塵だたしくさへこそ覺ゆれ。十二月の晦日のなが雨、一日ばかりの精進の懈怠とやいふべからん。八月のしらがさね。乳あへずなりぬる乳母。
 たゆまるよもの
 精進の日のおこなひ。日遠きいそぎ。寺に久しくこもりたる。
 人にあなづらるよもの
 家の北おもて。あまり心よしと人に知られたる人。年老いたるおきな。又あはくしき女。築土のくづれ。
 にくきもの
 急ぐ事あるをりに長言する客人。あなづらはしき人ならば、「後に」などいひても追ひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人、いとにくし。硯に髪の入りにてすられたる。また墨の中に石こもりて、きしくときしみたる。俄にわづらふ人のあるに、驗者もとむ

例ある所
いつも居る
所
えがちに
心得顔に
老ばみ云々
老境に入
れる下品者

わらはべの
云々當時
の童謡、こ
うどのほ國
府殿にや

るに、例ある所にはあらで、外にある、尋ねありくほどに、待遠にひさしきを、辛うじ
て待ちつけて、悦びながら加持せさするに、このごろ物怪に困じにけるにや、るまよ
に即ねぶり聲になりたる、いとにくし。何でふことなき人の、すどろにえがちに物いた
ういひたる。火桶すびつなどに、手のうらうちかへし、皺おしのべなどしてあぶりを
もの。いつかは若やかなる人などの、さはしたりし。老ばみうたてあるものこそ、火桶
のはたに足をさへもたけて、物いふまよに、おしすりなどもするらめ。さやうのものは、
人のもとに來てゐんとする所を、まづ扇して塵拂ひすてて、るも定まらずひろめきて、
狩衣の前、下さまにまくり入れてもゐるか。かゝることは、いひがひなきものの際に
やと思へど、少しよろしき者の式部大夫、駿河前司などいひしがさせしなり。また酒飲
みて、赤き口を探り、髯あるものはそれを撫でて、盃人に取らすほどのけしき、いみ
じくにくしと見ゆ。また「飲め」などいふなるべし、身ふるひをし、頭ふり、口わきをさへ
ひきたれて、「わらはべのこうどのに参りて」など、謠ふやうにする。それはしも誠によき

謠ふやうに
する一醉ひ
て慥には歌
へぬ様なり
しらべいふ
一調子を合
せて尤らし
くいふ
さるまじう
云々一人な
ど隠すべく
もあらぬを
無理に工夫
したる所に
帽額の簾
御簾の上に
横に長くひ
き延ぶる一
幅の絹を帽

人のさし給ひしより、心づきなしと思ふなり。物うらやみし、身のうへなけき、人のう
へいひ、露ばかりの事もゆかしがり、聞かまほしがりて、いひ知らぬをば怨じそしり、又
わづかに聞きわたる事をば、われもとより知りたる事のやうに、他人にも語りしらべ
ふも、いとにくし。物聞かんと思ふほどに泣く兒。鳥の集りて飛びちがひ鳴きたる。忍
びて來る人見しりて吠ゆる犬は、うちも殺しつべし。さるまじうあながちなる所に、隠
し伏せたる人の、躡したる。又密に忍びてくる所に、長烏帽子して、さすがに人に見え
じと惑ひ出づるほどに、物につきさはりて、そよるといはせたる、いみじうにくし。伊
豫簾など懸けたるをうちかつぎて、さらくとならしたるも、いとにくし。帽額の簾は、
ましてこはき物のうちおかるよ、いととしるし。それもやをら引きあけて出入するは、更
に鳴らす。又遣戸など荒くあくるも、いとにくし。少しもたぐるやうにて開くるは、鳴
りやはする。あしうあくれば、障子などもたをめかし、こほめくこそしるけれ。ねぶた
しと思ひて臥したるに、蚊のほそ聲になのりて、顔のもとに飛びありく、羽風さへ身の

類といふ、
帽類附の簾

才まぐる一
えらがる、
一説、才捲
くるにて才
を以て人の
言を押し捲
くる

起しにより
き一原本起
しより來に
作る

はなひて一
くさめして

ほどにあるこそ、いとにくけれ。きしめく車に乗りて歩くもの、耳も聞かぬにやあらんと、いとにくし。わが乗りたるは、その車のぬしさへにくし。物語などするに、さし出でてわれひとり才まぐるもの。すべてさし出は、童も大人もいとにくし。昔物語などするに、われ知りたりけるは、ふと出でていひくたしなどする、いとにくし。鼠の走りありく、いとにくし。あからさまにきたる子ども童をらうたがりて、をかしき物など取らするに、ならひて、常に來て居入りて、調度やうち散らしぬる、にくし。家にも宮仕所にも、逢はでありなんと思ふ人の來るに、虚寐をしたるを、わが許にあるものども起しによりきては、いぎたなしと思ひ顔に、ひきゆるがしたるいとにくし。新參のさしこえて、物しり顔にをしへやうなる事いひ、うしろみたる、いとにくし。わが知る人にてあるほど、はやう見し女の事、譽めいひ出しなどするも、過ぎてほど經にけれど、なほにくし、ましてさしあたりたらんこそ思ひやられる。されどそれは、さしもあらぬやうもありかし。はなひて誦文する人。大かた家の男しうならでは、高くはなひたるも

するも一も
は感歎辭
まがくし
く一薄氣味
悪く

乳母の男云
云一乳母の
夫こそにく
けれ、され
ど養君の女
なるにはそ
の夫も近く
來ねばよし
と也、以下
などするよ
まで、一本
宮仕所はの
次に入る
芹つみし一

の、いとにくし。蚤もいとにくし。衣の下にをどりありきて、もたぐるやうにするも。また犬のもろ聲に長々となきあけたる、まがくしくにくし。乳母の男こそあれ、女はされど近くも寄らねばよし。男子をば、たゞわが物にして、立ちそひ領じてうしろみ、いさよかもこの御事に違ふものをば讒し、人をば人とも思ひたらず、怪しけれど、これがとがを心に任せていふ人もなければ、處得いみじきおももちして、事を行ひなどするよ。小一條院をば、今内裏とぞいふ。おはします殿は清涼殿にて、その北なる殿におはします。西東はわたどのにて渡らせ給ふ。常に參うのほらせ給ふ。おまへはつほなれば、前裁などうる、笹ゆひていとをかし。二月十日の日の、うらくとのどかに照りたるに、わたどのの西の廂にて、うへの御笛ふかせ給ふ。高遠の大貳、御笛の師にて物し給ふを、異笛ふたつして、高砂ををりかへし吹かせ給へば、猶いみじうめでたしと言ふもよのつねなり。御笛の師にて、そのことどもなど申し給ふ、いとめでたし。御簾のもとに集り出でて見奉るをりなどは、わが身に芹つみしなど覺ゆることこそなけれ。すけたゞは木

綺語抄に賤しき男戀ひたる姫の芹食むをかいまみ常に芹食みて心を慰めたる事見ゆ、童蒙抄に、芹つみし昔の人もわが如や心に物の叶はざりけん

工允くのをうにて藏人くらうじにはなりにたる。いみじう荒々あらくしうあれば、殿上人女房てんじやうびにようぼうは、あらわにとぞつけたるを、歌につくりて、「さうなしのぬし、尾張人おはりうぢの種たねにぞありける」とうたふは、尾張おはりの兼時かねときが女の腹はらなりけり。これを笛に吹かせ給ふを、添そひ侍まへひて、「なほたかう吹かせおはしませ、え聞きさふらはじ」と申せば、「いかでか、さりとも聞き知りなん」とて密みかにのみ吹かせ給ふを、あなたより渡らせおはしまして、「このものなかりけり、只今こそふかめ」と仰せられて吹かせたまふ。いみじうをかし。ふみことばなめき人こそ、いとどにくけれ。世をなのめに書きなしたる、詞ことばのにくきこそ。さるまじき人のもとに、あまりかしこまりたるも、實ひにわろき事ぞ。されど我われえたらんは、理ことわり、人のもとなるさへにくくこそあれ。大かたさし向ひても、なめきは、などかく言ふらんとかたはらいたし。ましてよき人などをさ申す者は、さるはをこにて、いとにくし。男しうなどわろくいふ、いとわろし。わが使ふものなど、おはする、のたまふなどいひたる、いとにくし。こよもとに侍まへるといふ文字もじをあらせばやと聞くことこ

愛敬なくと
—愛敬なく
とも

さいはざらん—御前より外にて也上の官をいふにかゝるやんごとながらすとも—何もその様にえらがらすとも

そ多かめれ。愛敬あいぎやうなくと、詞しなめきなどいへば、いはるゝ人も聞く人も笑ふ。かく覺ゆればにや、あまり嘲哂てうりやうするなどいはるゝまである人も、わろきなるべし。殿上人宰相てんじやううひさしいしやうなどを、たどなる名を、聊いささつよましけならずいふは、いとかたはなるを、けによくさいはず、女房にようぼうの局つばねなる人をさへ、あのおもと君などいへば、めづらかに嬉しと思ひて、譽ほめむる事ぞいみじき。殿上人公達てんじやううきみたちを、御前みまへより外にては官つかさをいふ。また御前みまへにて物をいふとも、きこしめさんには、なごてかは、まろがなどいはん。さいはざらんにくし。かくいはんに、わろかるべき事かは。ことなる事なき男の、ひきいれ聲して艶ひんだちたる。墨つかぬ硯いん。女房にようぼうの物ゆかしうする。たどなるだに、いとしも思はしからぬ人の、にくけごとしたる。一人車ひとりくるまに乗りて物見る男おとこ、いかなるものにかあらん、やんごとながらすとも、わかき男おとこどもの物ゆかしう思ひたるなど、ハる乗せても見よかし。透影すゑかげに唯一人ひとりかぐよひて、心一つにまもりゐたらんよ。曉あかつきにかへる人の、昨夜よるべおきし扇あかぎ懷紙ふしころがみもとむとて、暗くらければ、探りあてん、さぐり

一説やんごとなからずとも

とする人は
―かく曉の
別を惜しむ
人は

いひいでに
云々―いひ
いひ靜に出

あてんと、たゞきもわたし、「怪し」などうちいひもとめ出でて、そよくと懐にさし入れて、扇ひきひろけて、ふたくとうちつかひて、まかり申したる、にくしとは世の常、いと愛敬なし。おなじごと夜深く出づる人の 烏帽子の緒強くゆひたる、さしもかためずともありぬべし。やをらさながらさし入れたりとも、人のとがむべきことかは。いみじうしどけなう、かたくなし。直衣狩衣などゆがみたりとも、誰かは見知りて笑ひそしりもせん。とする人は、なほ曉のありさまこそ、をかしくもあるべけれ。わりなくしぶしぶに起きがたけなるを、強ひてそよのかし、「あけ過ぎぬ、あな見苦し」などいはれて、うちなけくけしきも、けにあかず物うきにしもあらんかすと覺ゆ。指貫なども居ながら著もやらず、まづさしよりて、夜ひと夜いひつることののこりを、女の耳にいひ入れ、何わざすとなけれど、帯などをばゆふやうなりかし。格子あけ、妻戸ある處は、やがて諸共に出で行き、晝のほどのおほつかかならん事なども、いひいでにすべり出でなんは、見送られて、名残もをかしかりぬべし。なごりも出所あり。いときはやかに起きて、ひろ

で行きたら
んは
なごりも出
所あり―名
殘惜しきも
その出で行
き方による
見たる―一
本見いでた
るに作る

さいで―絹
のきれ

かはぼり―
扇

めきたちて、指貫の腰強くひきゆひ、直衣、うへのきぬ、狩衣も袖かいまくり、よろづさし入れ、帯強くゆふ、にくし。開けて出でぬる所たてぬ人、いとにくし。
心ときめきするもの

雀のこがひ。兒あそぶする所の前わたりたる。よき薫物たきて一人臥したる。唐鏡の少しくらき見たる。よき男の車とどめて物いひ案内せさせたる。頭洗ひ化粧じて、香にしみたる衣著たる。殊に見る人なき所にて、心のうちはなほをかき。待つ人などある夜、雨の脚、風の吹きゆるがすも、ふとぞおどろかるよ。

すぎにしかたのこひしきもの

枯れたる葵。雛あそびの調度。二藍、葡萄染などのさいでの、おしへされて、草紙の中
にありけるを見つけたる。また折からあはれなりし人の文、雨などの降りて徒然なる日
さがし出でたる。去年のかはぼり。月のあかき夜。

こよろゆくもの

女繪—濱臣の説に男女の中をかきつけし繪巻物といへり
重食—雙六の類
すそ—呪咀

檳榔毛—檳榔毛の車、束帶正装の時の乗用

よくかいたる女繪の詞をかしうつづけておほかる。物見のかへさに乗りこほれて、男どもいと多く、牛よくやるものの車走らせたる。白く清けなる檀紙に、いとほそう書くべくはあらぬ筆して文書きたる。川船のくだりざま。齒黒のよくつきたる。重食に丁多くうちたる。うるはしき糸のねりあはせぐりしたる。物よくいふ陰陽師して、河原に出でてすその祓したる。夜寝起きて飲む水。徒然なるをりに、いとあまり睦しくはあらず、疎くもあらぬ賓客のきて、世の中の物がたり、この頃ある事の、をかしきも、にくきも、怪しきも、これにかより、かれにかより、公私おほつかなからず、聞きよきほどに語りたる、いと心ゆくことちす。社寺などに詣でて物申さするに、寺には法師、社には禰宜などやうのものの、思ふほどよりも過ぎて、滞なく聞きよく申したる。檳榔毛はのどやかにやりたる。急ぎたるは軽々しく見ゆ。網代は走らせたる。人の門より渡りたるを、ふと見るほどもなく過ぎて、供の人ばかり走るを、誰ならんと思ふこそをかしけれ。ゆるゆると久しく行けばいとわろし。牛は額いとちひさく白みたるが、腹のした、足のし

ゆふかみ—木綿鬘か、木綿は純白のものなれば、すべて眞白きをいへる當時の常用語にや

罪はえがた—罪得る様な事、説經師の悪口など書きたるをいふ
御前—前驅

も、尾のすそ白き。馬は紫の斑つきたる。蘆毛。いみじく黒きが、足肩のわたりなどに、白き處、うす紅梅の毛にて、髮尾などもいとしろき、實にゆふかみともいひつべき。牛飼は大にて、髮赤白髮にて、顔の赤みてかどくしけなる。雑色隨身はほそやかなる。よき男も、なほ若きほどは、さるかたなるぞよき。いたく肥えたるは、ねぶたからん人と思はる。小舎人はちひさくて、髮のうるはしきが、すそさわらかに、聲をかしうて、畏りて物などいひたるぞ、りやうくじき。猫はうへのかぎり黒くて、他はみな白からん。説經師は顔よき、つとまもらへたるこそ、その説く事のたふとさも覺ゆれ。外目しつればふと忘るよに、にくけなるは罪や得らんと覺ゆ。この詞はとどむべし。少し年などのよろしきほどこそ、かやうの罪はえがたの詞かき出でけめ。今は罪いとおそろし。又たふときこと、道心おほかりとて、説經すといふ所に、最初に行きぬる人こそ、なほこの罪の心地には、さしもあらで見ゆれ。藏人おりたる人、昔は、御前などいふこともせず、その年ばかり、内裏あたりには、まして影も見えざりける。今はさしもあらざしめる。藏

名残つれづれにて云々
—今まで多忙なりし後とて暇も多しと思ふ

車たつる云云—立ちたる他の車をさへ見入れ殊に心を附けたる様子となり
八講—法華八卷を朝夕二座づつ四日、都合八座に講ず

人の五位とて、それをしもぞ忙しうつかへど、なほ名残つれづれにて、心一つは暇ある心地ぞすべかめれば、さやうの所に急ぎ行くを、一たび二たび聞きそめつれば、常にまうでまほしくなりて、夏などのいとあつきにも、帷子いとあざやかに、薄二藍、青鈍の指貫などふみちらしてゐたしめり。烏帽子にも忌つけたるは、今日さるべき日なれど、功德のかたにはさはらずと見えんとにや。いそぎ來てその事するひじりと物語して、車たつるさへぞ見いれ、ことにつきたるけしきなる。久しく逢はざりける人などの、まうで逢ひたる、めづらしがりて、近くるより物語し、うなづき、をかしき事など語り出でて、扇ひろうひろけて、口にあてて笑ひ、装束したる珠數かいまさぐり、手まさぐりにし、こなたかなたうち見やりなどして、車のよしあしほめそしり、なにがしにてその人のせし八講、經供養などいひくらべるるほどに、この説經の事もきよ入れず。なにかは、常に聞くことなれば、耳馴れて、めづらしう覺えぬにこそはあらめ。さはあらで講師あてしばしあるほどに、さきすこしおはする車とどめておると人、蟬の羽よりも輕

絹すし—生さばかり—同じく三四人

その人云々—説經などの折必ず列席するため途にはかゝる會の話ある毎に、だれそれは居

けなる直衣、指貫、すどしのひとへなど著たるも、狩衣姿にても、さやうにては若くほそやかなる三四人ばかり、侍のもの又さばかりして入れば、もとるたりつる人も、少しうち身じろきくつろぎて、高座のもとと近き柱のもとなどにすゑたれば、さすがに珠數おしもみなどして、伏し拜みるたるを、講師もはえくしう思ふなるべし、いかで語り傳ふばかりと説き出でたる、聽問すなど、立ち騒ぎぬかづくほどにもなくて、よきほどにて立ち出づとて、車どものかたなど見おこせて、われどちいふ事も何事ならんと覺ゆ。見知りたる人をば、をかしと思ひ、見知らぬは、誰ならん、それにや彼にやと、目をつけて思ひやらるゝこそをかしかれ。説經しつ、八講しけりなど人いひ傳ふるに、「その人はありつや」「いかどは」など定りていはれたる、あまりなり。なかは無下にさしのぞかではあらん。あやしき女だに、いみじく聞くめるものをば。さればとて、はじめつかたは徒歩する人はなかりき。たまさかには、つほ装束などばかりして、なまめきけさうじてこそありしか。それも物語をぞせし。説經などは殊に多くも聞かざりき。この頃その折さ

たかといへば、どうして居らぬ筈がありませうと人にいはると也

さうちう一未詳、家事を忘れて菩提に入りし人にや、一本つれたう起きて一行きたるにと補ひ見るべし

し出でたる人の、命長くて見ましかば、いかばかりそしり誹謗せまし。菩提といふ寺に結縁八講せしが、聴きにまうでたるに、人のもとより疾く歸り給へ、いとさうぐしといひたれば、蓮のはなびらに、

もとてもかゝる蓮の露をおきてうき世にまたは歸るものかは

と書きてやりつ。誠にいとたふとくあはれなれば、やがてとまりぬべくぞ覺ゆる。さうちうが家の人のもどかしさも忘れぬべし。

小白川といふ所は、小一條の大將殿の御家ぞかし。それにて上達部、結縁の八講し給ふに、いみじくめでたき事にて、世の中の人の集り行きて聴く。遅からん車はよるべきやうもなしといへば、露と共に急ぎ起きて、實にぞひまなかりける。轅の上に又さし重ねて、三つばかりまでは、少し物も聞ゆべし。六月十日餘にて、暑きこと世に知らぬほどなり。池の蓮を見やるのみぞ、少し涼しき心地する。左右の大臣たちをおき奉りては、おはせぬ上達部なし。二藍の直衣指貫、淺黄の帷子をぞすかし給へる。少しおとなび給へるは、

家の子一 一條家の子

關白殿をぞ聞えし一今の關白殿の事をかく申したる也

細塗骨など一細骨塗骨などの意にや

青にびのさしぬき、白き袴もすどしけなり。安親の宰相なども若やぎだちて、すべてたふときことの限にもあらず、をかしき物見なり。廂の御簾高くまき上げて、長押のうへに上達部奥に向ひて、ながくと居給へり。そのしもには殿上人、わかき公達、かりさうぞく直衣なども、いとをかしくて、居もさだまらず、こよかしこに立ちさまよひ、あそびたるもいとをかし。實力の兵衛佐、長明の侍従など、家の子にて、今すこしいでいりなれたり。まだ童なる公達など、いとをかしうておはす。少し日たけたるほどに、三位中將とは關白殿をぞ聞えし、香の羅、二藍の直衣、おなじ指貫、濃き蘇枋の御袴に、張りたる白き單衣のいとあざやかなるを著給ひて、歩み入り給へる。さばかりかろび涼しけなる中に、あつかはしけなるべけれど、いみじうめでたしとぞ見え給ふ。細塗骨など、骨はかはれど、たゞ赤き紙を同じなみにうちつかひ持ち給へるは、瞿麥のいみじう咲きたるにぞ、いとよく似たる。まだ講師ものほらぬほどに、懸盤どもして、何にかはあらん物まるるべし。義懐の中納言の御ありさま、常よりも勝りて清けにおはするさまぞ限なき

書くべきに
 一説ころに
 て句となら
 ず、ほど經
 ればまで續
 きて句とな
 り、其下に、
 ふと忘れは
 つるものゆ
 ゑかくは書
 きつけ侍り
 など補ひ考
 ふべし云々
 顯證の人々
 |その上達
 部のみなら
 ず關係なき
 聽衆の人々

や。上達部の御名など書くべきにもあらぬを。誰なりけん、少しほど經れば、色あひはなばなといみじく、句あざやかに、いづれともなき中の帷子を、これはまことに、たゞ直衣一つを著たるやうにて、常に車のかたを見おこせつゝ、物などいひおこせ給ふ。をかしと見ぬ人なかりけんを、後にきたる車の際もなかりければ、池にひき寄せてたてたるを見給ひて、實方の君に、「人の消息つきくしくいひつべからんもの一人」と召せば、いかなる人にかあらん、選りて率ておはしたるに、「いかゞいひ遣るべき」と、近く居給へるばかりいひ合せて、やり給はん事は聞えず。いみじくよそひして、車のもとに歩みよるを、かつは笑ひ給ふ。後のかたによりていふめり。久しく立てれば、「歌など詠むにやあらん、兵衛佐返しおもひまうけよ」など笑ひて、いつしか返事聞かんと、おとな上達部まで、皆そなたさまに見やり給へり。實に顯證の人々まで見やりしもをかしうありしを、返事きたるにや、すこし歩みくるほどに、扇をさし出でて呼びかへせば、歌などの文字をいひ過ちてばかりこそ呼びかへさめ。久しかりつるほどに、あるべきことか

けに―一層
 まさりて
 いとほき
 水を云々―
 返事の無風
 流なるをい
 ふならん
 聞えやすら
 ん―かの女
 房の車に也
 かいけつ―
 掻き消す
 何かは云々

は、なほすべきにもあらじものとぞ覺えたる。近く参りつくも心もとなく、「いかにいかに」と誰も問ひ給へどもいはず。權中納言見給へば、そこによりてけしきばみ申す。三位中將、「疾くいへ、あまり有心すぎしてそなふな」との給ふに、「これも唯おなじ事になん侍る」といふは聞ゆ。藤大納言は人よりもけにのぞきて、「いかゞいひつる」との給ふれば、三位中將、「いとほき木をなん押し折りたゞめる」と聞え給ふに、うち笑ひ給へば、皆何となくさと笑ふ聲、聞えやすらん。中納言「さて呼びかへされつるさきには、いかゞいひつる、これやなほしたること」と問ひ給へば、「久しうたちて侍りつれども、ともかくも侍らざりつれば、さは参りなんとてかへり侍るを、呼びて」とぞ申す。誰が車ならん、見知りたりや」などのたまふ程に、講師ののほりぬれば、皆居しづまりて、そなたをのみ見る程に、この車はかいけつやうにうせぬ。下簾など、たゞ今日はじめたりと見えて、濃きひとへがさねに、一藍の織物、蘇枋の羅のうはぎなどにて、しりにすりたる裳、やがて廣げながらうち懸けなどしたるは、何人ならん。何かは、人のかたほな

「いや何でもない、一體人は一方に偏してひれくれたるよりは如何にもすなほにあらん方却りてよしと也、前の女房の評論やまかり云々、やは呼掛けの詞、法華方便品に五千人の増上慢の輩法座を退くに佛退亦佳矣との

らんことよりは、實にと聞えて、なかくいとよしとぞ覺ゆる。朝座の講師清範、高座のうへも光満ちたる心地して、いみじくぞあるや。暑さのわびしきにそへて、しさすまじき事の、今日すぐすまじきをうち置きて、唯少し聞きて歸りなんとしつるを、敷竝に集ひたる車の奥になんるたれば、出づべきかたもなし。朝の講まてなば、いかで出でなんとて、前なる車どもに消息すれば、近くたよんうれしさにや。はやくと引き出であけて出すを見給ふ。いとかしがましままで人ごといふに、老上達部さへ笑ひにくむを、きよも入れず、答もせで狭がり出づれば、權中納言「やまかりぬるもよし」とて、うち笑ひ給へるぞめでたき。それも耳にもとまらず、暑きに惑ひ出でて、人して、「五千人の中には入らせ給はぬやうもあらじ」と聞えかけて歸り出でにき。そのはじめより、やがてはつる日までたてる車のありけるが、人寄り來とも見えす、すべてたどあさましう繪などのやうにて過しければ、「ありがたく、めでたく、心にくく、いかなる人ならん、いかで知らん」と問ひけるを聞き給ひて、藤大納言、「何かめでたからん、いとにくし、ゆ

たまへる事見ゆ、下の答も之によ

奥のかたに云々、几帳は端に立つべき物なるに奥におしやりたるは奥の方に心おかるゝ爲ならんと也

ゆしきものにこそあなれ」とのたまひけるこそをかしけれ。さてその二十日あまりに、中納言の法師になり給ひにしこそあはれなりしか。櫻などの散りぬるも、なほ世の常なりや。老を待つまのとだにいふべくもあらぬ御有様にこそ見え給ひしか。

七月ばかり、いみじくあつければ、よろづの所あけながら夜もあかすに、月のころは寐起きて見いだすもいとをかし。闇もまたをかし。有明はたいふもおろかなり。いとつややかなる板の端近く、あざやかなる疊一枚かりそめにうち敷きて、三尺の几帳、奥のかたに押しやりたるぞあぢきなき。端にこそ立つべけれ、奥のうしろめたからんよ。人は出でにけるなるべし。薄色のうらいと濃くて、うへは少しかへりたるならずは、濃き綾のつややかなるが、いたくはなえぬを、かしらこめてひき著てぞねためる。香染のひとへ、紅のこまやかなるすどしの袴の、腰いと長く衣の下よりひかれたるも、まだ解けながらなめり。傍のかたに髪のうちたよなはりてゆらよかなるほど、長さ推しはかられたるに、又いづこよりにかあらん、朝ほらけのいみじう霧満ちたるに、二藍の指貫、あるか

おふの下草
—新勅撰集
に、櫻麻の
おふの下草
露しあらば
あかしてゆ
かむ親は知
るとも

見えぬる—
見られぬる

我もちたる
して云々—

なきかの香染の狩衣、白きすどし、紅のいとつややかなるうちぎぬの、霧にいたくしめ
りたるをぬぎ垂れて、鬢の少しふくだみたれば、烏帽子の押し入れられたるけしきもしど
けなく見ゆ。朝顔の露落ちぬさきに文書かんとて、道のほども心もとなく、おふの下草
など口ずさびて、わがかたへ行くに、格子のあがりたれば、御簾のそばをいさよかあけ
て見るに、起きていぬらん人もをかし。露をあはれと思ふにや、しばし見たれば、枕が
みのかたに、朴に紫の紙はりたる扇、ひろごりながらあり。檀紙の疊紙のほそやかな
るが、花か紅か、少しにほひうつりたるも几帳のもとに散りほひたる。人のけはひあれ
ば、衣の中より見るに、うち笑みて長押におしかよりるたれば、はぢなどする人にはあ
らねど、うちとくべき心ばへにもあらぬに、ねたうも見えぬるかなと思ふ。「こよなき名
残の御あさいかな」とて、簾の中に半ばかり入りたれば、「露よりさきなる人のもどかし
さに」といらふ。をかしき事とりたてて書くべきにあらねど、かく言ひかはすけしきど
もにくからず。枕がみなる扇を、我もちたるしておよびてかき寄するが、あまり近う寄

男の持てる
扇にて枕元
に廣ごりた
る扇を及び
腰にかき寄
する也

はしたなき
—明け過ぎ
たる

しなひ長く
—房長く垂
れて

おどろ—う
ばら、荆棘
かよひて—

りくるにやと心ときめきせられて、今少し引き入らるゝ。取りて見などして、疎くおほ
したる事などうちかすめ恨みなどするに、あかうなりて、人の聲々し、日もさし出でぬべ
し。霧の絶間見えぬほどにと急ぎつる文も、たゆみぬるこそうしろめたけれ。出でぬる
人も、いつの程にかと見えて、萩の露ながらあるにつけてあれど、えさし出でず。香の
かのいみじうしめたる匂いとをかし。あまりはしたなき程になれば、立ち出でて、わが
きつる處もかくやと思ひやらるゝもをかしかりぬべし。

木の花は

梅の濃くも薄くも紅梅。櫻の花びらおほきに、葉色こきが、枝ほそくて咲きたる。藤の
花、しなひ長く色よく咲きたる、いとめでたし。卯の花は品おとりて何となけれど、咲
く頃のをかしう、杜鵑のかげにかくるらんと思ふにいとをかし。祭のかへさに、紫野の
わたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根などに、いと白う咲きたるこそをかしけれ。
青色のうへに白き單襲かづきたる、青朽葉などにかよひていとをかし。四月のつごもり、

似通ひて
つごもり、
ついたち一
上旬、下旬
と漠然いへ
る例なり

たとひにい
ふ―當時愛
敬なきを梨
の花の如し
と譬へいへ
りしならん

ことごとくし
き名つきた
る鳥―鳳凰
也、格物論

に、非梧桐
不栖云々

かればな
枯びてみづ
みづしから
ぬ花

采女の云々
―大和物語
に見ゆ
ねくたれ髪
―わきもこ

五月のついたちなどのころほひ、橘の濃くあをきに、花のいとしろく咲きたるに、雨のふりたる翌朝などは、世になく心あるさまにをかし。花の中より、實のこがねの玉かと思えて、いみじくきはやかに見えたるなど、あさ露にぬれたる櫻にも劣らず、杜鵑のよすがとさへおもへばにや、猶更にいふべきにもあらず。梨の花、世にすさまじく怪しき物にして、目にちかく、はかなき文つけなどだにせず。愛敬おくれたる人の顔など見ては、たとひにいふも、實にその色よりしてあいなく見ゆるを、唐土にかぎりなき物にて、文にも作るなるを、さりともあるやうあらんとて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしきにほひこそ、心もとなくつきたためれ。楊貴妃、皇帝の御使に逢ひて泣きける顔に似せて、梨花一枝春の雨を帯びたりなどいひたるは、おほろけならじと思ふに、猶いみじうめでたき事は類あらじと覺えたり。桐の花、紫に咲きたるはなほをかしきを、葉のひろがり、さまうたてあれども、又他木もひとしう言ふべきにあらず。唐土にことごとくしき名つきたる鳥の、これにしも住むらん、心ことなり。まして琴に作りてさまぐな

る音の出でくるなど、をかしとは尋常にいふべくやはある。いみじうこそはめでたけれ。木のさまざまにくけなれど、樗の花いとをかし。かればなに、さまことに咲きて、かならず五月五日にあふもをかし。

池は

勝間田の池。盤余の池。にえの池。初瀬に参りしに、水鳥のひまなくたちさわぎしが、いとをかしく見えしなり。水なしの池、あやしうなどで附けけるならんといひしかば、五月など、すべて雨いたく降らんとする年は、この池に水といふ物なくなんある、又日のいみじく照る年は、春のはじめに水なん多く出づるといひしなり。無下になく乾きてあらばこそさもつけめ、出づるをりもあるなるを、一すぢにつけけるかなと答へまほしかりし。猿澤の池、采女の身を投げけるを聞きしめて、行幸などありけんこそいみじうめでたけれ。ねくたれ髪をと人丸が詠みけんほど、いふもおろかなり。御まへの池、又何の意につけけるならんとをかし。鏡の池。狭山の池、みくりといふ歌のをかしく覺ゆ

がれくたれ
髪を猿澤の
池の玉藻と
見るぞかな
しき
みくりとい
ふ歌—古今
六帖、武藏
なる狭山が
池のみくり
こそ引けば
絶えすれ我
や絶えする

るにやあらん。こひぬまの池。原の池。玉藻はな刈りそといひけんもをかし。ますだの池。

せちは

五月にしくはなし。菖蒲蓬などのかをりあひたるもいみじうをかし。九重の内をはじめて、いひしらぬ民の住家まで、いかでわがもとに繁くふかんと葺きわたしたる、猶いとめづらしく、いつか他折はさはしたりし。空のけしきの曇りわたりたるに、后宮などには、縫殿より、御薬玉とていろくの糸をくみさけて参らせたれば、御几帳たてまつる母屋の柱の左右につけたり。九月九日の菊を、綾と生絹のきぬに包みて参らせたる、同じ柱にゆひつけて、月ごろある薬玉取り替へて捨つめる。又薬玉は菊のをりまであるべきにやあらん。されどそれは皆糸をひき取りて物ゆひなどして、しばしもなし。御節供まゐり、わかき人々は菖蒲のさしぐしさし、物忌つけなどして、さまざま唐衣、汗衫ながき根、をかしきをり枝ども、村濃の組して結びつけなどしたる、珍しういふべきこ

組—組糸

よろしう思
ふ—軽くな
ほざりに思
ふ
そばへたる
—戯れふざ
けたる

とならねどいとをかし。さても春ごとに咲くとて、櫻をよろしう思ふ人やはある。辻ありく童女の、ほどくにつけては、いみじきわざしたると、常に袂をまもり、人に見くらべ。えもいはず興ありと思ひたるを、そばへたる小舎人童などにひきとられて、泣くもをかし。紫の紙に樗の花、青き紙に菖蒲の葉、細うまきてひきゆひ、また白き紙を根にしてゆひたるもをかし。いと長き根など文の中に入れなどしたる人どもなども、いと艶なる返事かよんといひ合せかたらふどちは、見せあはしなどする、をかし。人の女、やんごとなき所々に御文聞え給ふ人も、今日は心ことにぞなまめかしうをかしき。夕暮のほどに杜鵑の名のりしたるも、すべてをかしういみじ

木は

桂。五葉。柳。橘。そばの木、はしたなき心地すれども、花の木ども散りはてて、おしなべたる縁になりたる中に、時もわかず濃き紅葉のつやめきて、思ひかけぬ青葉の中よりさし出でたる、めづらし。檀更にもいはず。そのものともなければ、やどり木といふ名

はしたなき
—時に合は
ぬ、間の抜
けた様な
そのものと

もなけれど
一別に木と
いふ程のも
のならねど
千枝にわか
れて一古今
六帖に、い
づみなるし
のぶの森の
楠の木の手
枝にわかれ
て物をこそ
おもへ
みつばよつ
ば云々一古
今集序に、
この殿はむ
べもとみけ
りさき草の
みつばよつ

いとあはれなり。榊、臨時の祭、御神樂のをりなどいとをかし。世に木どもこそあれ、神の御前の物といひはじめけんも、とりわきをかし。くすの木は、木立おほかる所にも殊にまじらひたてらず、おどろくしき思ひやりなどうとましきを、千枝にわかれて戀する人の例にいはれたるぞ、誰かは數を知りていひ始めけんとおもふにをかし。檜、人ぢかからぬものなれど、みつばよつばの殿づくりもをかし。五月に雨の聲まねぶらんもをかし。楓の木、さよやかなるにも、もえ出でたる梢の赤みて、同じかたにさし廣ごりたる葉のさま、花もいと物はかなけにて、むしなどの枯れたるやうにてをかし。あすはひの木、この世近くも見えきこえず、御嶺に詣でて歸る人など、しか持てありくめる。枝ざしなどのいと手ふれにくけに荒々しけれど、何の意ありてあすはひの木とつけけん、あぢきなき兼言なりや。誰にたのめたるにかあらんと思ふに、知らまほしうをかし。ねずもちの木、人なみくくなるべき様にもあらねど、葉のいみじうこまかに小さきがをかしきなり。樗の木。山梨の木。椎の木は、常磐木はいづれもあるを、それしも葉がへせ

ばに殿づく
りせり、さ
き草は檜、
みつば云々
は棟多き様
人丸が詠み
たる歌一拾
遺集に、足
引の山路も
しらす白檜
の枝にも葉
にも雪のふ
れづば、素
盞鳴尊以下
おろかにこ
そ覺えれま
では過誤錯
簡なるべし
兵衛佐、尉

ぬ例にいはれたるもをかし。白檜などいふもの、まして深山木の中にもいと氣遠くて、三位二位のうへのきぬ染むる折ばかりぞ、葉をだに人の見るめる。めでたき事、をかしき事にとり出づべくもあらねど、いつとなく雪の降りたるに見まがへられて、素盞鳴尊の出雲國におはしける御事を思ひて、人丸が詠みたる歌などを見る、いみじうあはれなり。いふ事にても、をりにつけても、一ふしあはれともをかしとも聞きおきつる物は、草も木も鳥蟲も、おろかにこそ覺えね。棟のいみじうふさやかにつやめきたるは、いと青う清けなるに、思ひかけず似るべくもあらず。莖の赤うきらくしう見えたるこそ、賤しけれどもをかしけれ。なべての月頃はつゆも見えぬものの、十二月の晦日にしも時めきて、亡人のくひ物にもしくにやとあはれなるに、又齡延ぶる齒固の具にもしてつかひためるは、いかなるにか。紅葉せん世やといひたるもたのものし。柏木いとをかし。葉守の神のますらんもいとかしこし。兵衛佐、尉などをいふらんもをかし。すがたなけれど、櫻欄の木、からめきて、わろき家のものとは見えず。

―共に異名を柏木といふ

谷へだてたるほど云々
―山鳥は夜雌雄峯を隔て臥すとぞ

まなこゝろ―
眼居、目つき

鳥は

他處（こゝろ）の物なれど、鸚鵡（あひり）いとあはれなり。人のいふらんことをまねぶらんよ。杜鵑（ほととぎす）。水鶏（すゐけい）。鳴（な）みこ鳥（みこどり）。鶺鴒（ひば）。火燒（ひたき）。山鳥（やまどり）は友を戀ひて鳴くに、鏡を見せたれば慰むらん、いとあはれなり。谷へだてたるほどなどいと心ぐるし。鶴（つる）はこちたきさまなれども、鳴く聲雲井（くもゐ）まで聞ゆらん、いとめでたし。頭赤（かしら）き雀斑（すずめ）。班鳩（いかるが）の雄（おとこ）。巧鳥（たくみどり）。鶯（うぐいす）はいと見る目もみぐるし。まなこゝろなども、うたて萬（よろづ）になつかしからねど、万木（ゆるぎ）の森にひとり寝じと、争（あ）ふらんこそをかしけれ。容鳥（はこどり）。水鳥（みづどり）は鶯（うぐいす）いとあはれなり。互（かたみ）に居（ゐ）かはりて、羽（は）のうへの霜（しも）を拂（はら）ふらんなどいとをかし。都鳥（みやどり）。川千鳥（かはちどり）は友まどはすらんこそ。雁（かり）の聲は遠く聞えたるあはれなり。鴨（かも）は羽の霜（しも）うち拂（はら）ふらんと思ふにをかし。鶯（うぐいす）は文（ふみ）などにもめでたき物につくり、聲（こゑ）よりはじめて、さまかたちもさばかり貴（あて）に美（うつく）しきほどよりは、九重（ここのへ）の内に鳴かぬぞいとわろき。人のさなんあるといひしを、さしもあらじと思ひしに、十年（とせ）ばかり侍（さむら）ひて聞きしに、實（まこと）に更に音（ね）もせざりき。さるは竹（たけ）も近く、紅梅（こうばい）もいとよく通（とほ）ひぬべ

いぎたなき
―寢坊

今（いま）は云々―
天性（てんせい）なれば
今更（いまさら）何（なに）とも
仕方（しかた）なし

人（ひと）をも云々―
人間（にんげん）をも
世（よ）に衰（おとろ）へす
てられたる
をば度外（たがひ）視（み）
して誘（いざな）ふ事
なし、鶯（うぐいす）を
かく誘（いざな）ふも
只世（ただよ）にも
はやさるゝ
鳥（とり）なればと
なり

きたよりなりかし。まかんで聞けば、あやしき家の見どころもなき梅（うめ）などには、花（はな）やかにぞ鳴く。夜（よる）なかぬもいぎたなき心地すれども、今（いま）はいかどせん。夏秋（なつあき）の末（すえ）まで老聲（おいこゑ）に鳴きて、むしくひなど、ようもあらぬものは名をつかけかへていふぞ、口惜（くちやく）しくすごき心地する。それも雀（すずめ）などのやうに、常（とこ）にある鳥（とり）ならば、さもおほゆまじ。春（はる）なくゆゑこそはあらめ。年（とし）立ちかへるなど、をかしきことに、歌（うた）にも文（ふみ）にも作るなるは、なほ春（はる）のうちならましかば、いかにをかしからまし。人（ひと）をも人（ひと）けなう、世（よ）のおほえあなづらはしうなりそめにたるをば、誘（いざな）りやはする。鶯（うぐいす）、鳥（とり）などのうへは、見（み）いれ聞きいれなどする人、世（よ）になしかし。さればいみじかるべきものとなりたればと思ふに、心（こゝろ）ゆかぬ心地するなり、祭（まつり）のかへさ見るとて、雲林院（うりんゐん）、知足院（ちそくゐん）などの前に車（くるま）をたてたれば、杜鵑（ほととぎす）もしのばぬにやあらん鳴くに、いとようまねび似せて、木（き）高（たか）き木（き）どのも中に、諸聲（もろこゑ）に鳴きたるこそさすがにをかしけれ。杜鵑（ほととぎす）は猶（なほ）更にいふべきかたなし。いつしかしたり顔（かほ）にも聞え、歌（うた）に。卯（う）の花（はな）、花橘（はなたちばな）などにやどりをして、はたかくれたるも、ねたけなる心（こゝろ）ばへなり、五月雨（さみだれ）

はたかくれ
—半ば隠れ
らう／＼じ
う—勞々じ
う、巧に

の短夜に寝ざめをして、いかで人よりさきに聞かんとまたれて、夜深くうち出でたる聲の、らう／＼じう愛敬づきたる、いみじう心あくがれ、せんかたなし。六月になりぬれば音もせずなりぬる、すべて言ふもおろかなり。夜なくもの、すべていづれもく／＼めでたし。兒どものみぞさしもなき。

あてなるもの

あまづら—
甘葛、千歳
薬汁

薄色に白重の汗疹。かりのこ。削氷のあまづらに入りて、新しき鏡に入りたる。水晶の珠數。藤の花。梅の花に雪のふりたる。いみじう美しき兒の覆盆子くひたる。

蟲は

ち／＼／＼
—蓑蟲の聲

鈴蟲。松蟲。促織。蟋蟀。蝶。われから。蜂蟻。螢。蓑蟲いとあはれなり。鬼の生みければ、親に似て、これもおそろしき心地ぞあらんとて、親のあしき衣ひき著せて、「今秋風吹かんをりにぞこんずる、侍てよ」といひて逃げていにくるも知らず、風の音聞き知りて、八月ばかりになれば、ちよ／＼とはかなげに鳴く、いみじくあはれなり。茅蜩

を父よく
と聞きなし
たる洒落

かたし—頑
なり、一本
うとましに
作る

叩頭蟲またあはれなり。さる心に道心おこして、つきありくらん。又おもひかけず暗き所などにほとめきたる、聞きつけたるこそをかしけれ。蠅こそにくきものうちに入れつべけれ。愛敬なくにくきものは、人々しう書き出づべきもののやうにあらねど、萬の物に、顔などにぬれたる足して居たるなどよ。人の名につきたるは必かたし。夏蟲いとをかしく廊のうへ飛びありく、いとをかし。蟻はにくけれど、輕びいみじうて、水のうへなどをたど歩みありくこそをかしけれ。

七月ばかりに、風のいたう吹き、雨などのさわがしき日、大かたいと涼しければ、扇もち忘れたるに、汗の香少しかよへたる衣の薄き引きかづきて、晝寝したるこそをかしけれ。

にけなきもの

髪あしき人のしろき綾の衣著たる。しどかみたる髪に葵つけたる。あしき手を赤き紙に書きたる。下衆の家に雪の降りたる。また月のさし入りたるもいとくちをし。月のいと

あめうし—
 黄牛、よき
 色の牛
 つみたる—
 食ひたる—
 おどろく—
 しく—美々
 しく、稟々
 しく
 廊などに云
 云—廊の内
 なる女房の
 許に忍び入
 りて臥す也
 わきあけて
 —開腋の袍
 をいふ

あかき、やかたなき車にあひたる。又さる車にあめうしかけたる。老いたるものの腹たかくて喘ぎありく。また若き男もちたる、いと見ぐるしきに、他人の許に行くとして妬みたる。老いたる男の寝惑ひたる。又さやうに髻がちなる男の椎つみたる。齒もなき女の梅くひて酸がりたる。下衆の紅の袴著たる、このごろはそれのみこそあめれ。靱負佐の夜行狩衣すがたも、いとやしけなり。また人に恐ぢらるようへの衣はたおどろおどろしく、たちさまよふも、人見つけばあなづらはし。「嫌疑の者やある」と戯にもとがむ。六位藏人、うへの判官とうちいひて、世になくきらしくしきものに覚え、里人下衆などは、この世の人とだに思ひたらず、目をだに見あはせて恐ぢわなよく人の、内裏わたり廊などに忍びて入りふしたるこそいとつきなけれ。そらだきものしたる几帳にうちかけたる袴の、おもたけに賤しうきらしくしからんもと、推し量らるゝなどよ。さかしらにうへの衣わきあけにて、鼠の尾のやうにて、わがねかけたらん程ぞ、似氣なき夜行の人なる。この司ほどは、念じてとどめてよかし。五位の藏人も。

念じて云々
 —我慢して
 忍び歩きを
 止めよ
 氣色ばみ—
 様子ぶり
 物がたりす
 ー幼兒の
 何となく愛
 らしげにさ
 へづる様を
 いふ、一説
 に話相手の
 人の子とい
 ふはいかに
 おもなき—
 遠慮なき、
 づうくし

廊に人とあまたるて、ありく者ども見やすからず呼び寄せて、ものなどいふに、清けなる男、小舎人童などの、よき裏袋に衣どもつとみて、指貫の腰などうち見えたる。袋に入りたる弓、矢、楯、鉞、劍などもてありくを「誰がぞ」と問ふに、つゐるて某殿のといひて行くはいとよし。氣色ばみやさしがりて、「知らず」ともいひ、聞きも入れていぬる者は、いみじうぞにくきかし。月夜に空車ありきたる。清けなる男のにくけなる妻もちたる。髻黒にくけなる人の年老いたるが、物がたりする人の兒もてあそびたる。主殿司こそなほをかききものはあれ。下女のきははさばかり羨しきものはなし。よき人にせさせまほしきわざなり。若くて容貌よく、容體など常によくてあらんは、ましてよからんかし。年老いて物の例など知りて、おもなきさましたるもいとつきくしうめやすし。主殿司の顔、愛敬づきたらんをもたりて、装束時にしたがひて、唐衣など今めかして、ありかせばやとこそ覺ゆれ。男はまた隨身こそあめれ。いみじく美々しくをかしき公達も、隨身なきはいとしらくし。辨などをかしくよき官と思ひたれども、下襲

下襲のしり
 一襦(ハキヨ)
 頭辨一行成
 それさなせ
 もと云々
 それ左様
 してはなら
 ぬと辨内侍
 に話し居る
 所なり
 遠江の濱や
 なぎ一春曙
 抄に、濱や
 無き也、黒
 川翁は、萬
 葉七、あら
 れふり遠た
 あふみの香
 跡川柳とい
 ふ歌を引く

のしり短くて、隨身ずぶじんなきぞいとわろきや。
 職しきの御曹司みせうしの西面にしをの立部たてじぶのもとにて、頭辨びんの、人と物をいと久しくいひたち給へれば、さし出でて、「それは誰ぞ」といへば、「辨べんの内侍ないしなり」との給ふ。「何かはさもかたらひ給ふ。大辨だいべん見えば、うちすて奉りていなんものを」といへば、いみじく笑ひて、「誰かかよる事をさへいひ聞かせけん、それさなせとかたらふなり」との給ふ。いみじく見えて、をかしき筋すぢなどたてたる事はなくて、たゞありなるやうなるを、皆人みなひとさのみ知りたるに、なほ奥おくふかき御心みこころさまを見知りたれば、「おしなべたらす」など御前ごまへにも啓し、又さしろしめしたるを、常に、「女はおのれを悦ぶ者のためにかほづくります、士はおのれを知れる人のために死ぬといひたる」といひ合せつゝ申し給ふ。「遠江とほへの濱はまやなぎ」などいひかはしてあるに、わかき人々は唯いひにくみ、見ぐるしき事どもなどつくろはずいふに、「この君こそうたて見にくけれ。他人たにびとのやうに讀經よみきやうし、歌うたひなどもせず、けすさまじ」など諍そしる。更にこれかれに物いひなどもせず、「女は目はたてさまにつき、眉まゆは額ひたいにおひかより、

ども又も生
 ふといふ香
 跡川柳とい
 ふ歌を引く
 初いひそめ
 し人ひと清少
 遅く参らば
 云々一あな
 たの参向まきむかひが
 後のちる様ような
 らば我われかく
 かく申した
 ると申し上
 げに使者しやを
 中宮ちゆうぐうの方かたへ
 参らせよ
 憚りなし
 論語ろんごに過則かたぎ
 勿なほ憚はば改

鼻は横よこさまにありとも、たゞ口くちつき愛敬あいぎやうづき、願ねがひのした、頸のどなどをかしげにて、聲こゑにくからざらん人なん思はしかるべき。とはいひながら、なほ顔かほのいにくけなるは心憂こころうれしとの給へば、まいて願ねがひほそく愛敬あいぎやうおくれたらん人は、あいなうかたきにして、御前ごまへにさへあしう啓する。物など啓せせんとも、その初いひそめし人をたづね、下しもなるをも呼びのほせ、局つぼねにも来ていひ、里さとなるには文書ふみかきても、みづからもおはして、「遅く参らば、さなん申したると申しに参らせよ」などの給ふ。「その人の侍さむらひふ」などいひ出づれど、さしもうけひかずなどぞおはする。「あるに随したがひ、定めず、何事ももてなしたるをこそ、よき事にはすれ」とうしろみ聞ゆれど、「わがもとの心の本性ほんじやう」とのみの給ひつゝ、「改らざるものは心なり」との給へば、「さて憚りなしとはいかなる事をいふにか」と怪しがれば、笑ひつゝ、「中よしなど人々にもいはるよ。かうかたらふとならば何か恥づる、見えなどもせよかし」との給ふを、「いみじくにくけなれば、さあらんはえ思はじとの給ひしによりて、え見え奉らぬ」といへば、「實まことにくくもぞなる。さらばな見えそ」とて、お

眞心に云々
 一實際うそ
 はいはぬ
 式部のおも
 と一清少と
 同僚の女房
 うへ、宮一
 一條帝と中
 宮定子
 けしき一陸
 下の居給ふ
 様子
 給ひて一後
 も我等二人
 はと補ひ見
 るべし
 あらぬ顔一
 違つた顔、

のづから見つべきをりも顔をふたぎなどして、まことに見給はぬも、眞心にそらごとし給はざりけりと思ふに、三月晦日頃、冬の直衣の著にくきにやあらん、うへの衣がちにて、殿上の宿直すがたもあり。翌朝日さし出づるまで、式部のおもとと廂に寝たるに、奥の遣戸をあけさせ給ひて、うへの御前、宮の御前出でさせ給へれば、起きもあへずまどふを、いみじく笑はせ給ふ。唐夜を髪のうち著て、宿直物も何もうづもれながらある上におはしまして、陣より出で入るものなど御覽す。殿上人のつゆ知らで、より來て物いふなどもあるを、「けしきな見せそ」と笑はせ給ふ。さてたよせ給ふに、「二人ながらいざ」と仰せらるれど、今顔などつくるひてこそとてまるらず。入らせ給ひて、なほめでたき事どもいひあはせてゐたるに、南の遣戸のそばに、几帳の手のさし出でたるにさはりて、簾の少しあきたるより、黒みたるもの見ゆれば、のりたかが居たるなめりと思ひて、見も入れで、なほ事どもをいふに、いとよく笑みたる顔のさし出でたるを、「のりたかなめり、そは」とて見やりたれば、あらぬ顔なり。あさましと笑ひさわぎて几

外の顔

さつくぐ
 と一その様
 につくぐ
 と
 局のすだれ
 云々一心安
 く局の中
 も入り給ふ
 殿上のなだ
 いめん一清
 涼殿の名謁
 宿直の武士
 等が名を呼
 ばれて名乗
 る式、毎夜

帳ひき直しかくるれど、頭辨にこそおはしけれ。見え奉らじとしつるものをと、いとくちをし。もろともに居たる人は、こなたに向きてゐたれば、顔も見えず。立ち出でて、「いみじく名残なく見つるかな」との給へば、「のりたかと思ひ侍れば、あなづりてぞかし。なかは見じとの給ひしに、さつくぐとは」といふに、「女は寝おきたる顔なんいとよきといへば、ある人の局に行きてかいはみして、又もし見えやするとて來りつるなり。まだうへのおはしつる折からあるを、え知らざりけるよ」とて、それより後は、局のすだれうちかづきなどし給ふめり。殿上のなだいめんこそ猶をしけれ。御前に人さぶらふをりは、やがて問ふもをかし。足音どもしてくづれ出づるを、うへの御局の東面に、耳をとなへて聞くに、知る人の名のりには、ふと胸つぶるらんかし。又ありともよく聞かぬ人も、この折に聞きつけたらんは、いかど覺ゆらん。名のりよしあし、聞きにくく定むるもをかし。はてぬなりと聞くほどに、瀧口の弓ならし、沓の音そよめき出づるに、藏人のいと高くふみこほめか

亥の一刻即ち九時半の更行はるさばる事ども一故障、名謁に出でざる理由を瀧口の長官などが奏上するなり

てづからは云々一自ら呼ぶは聲も

して、うしとらの隅の高欄に、たかひざまづきとかやいふるすまひに、御前のかたに向ひて、後ざまに「誰々か侍る」と問ふほどこそをかしけれ。細うたかう名のり、また人さぶらはねばにや、なだいめん仕う奉らぬよし奏するも、いかにと問へばさばる事ども申すに、さ聞きて歸るを、「方弘はきかず」とて公達の教へければ、いみじう腹だちしかりて、勘へて、瀧口にさへ笑はる。御厨子所の御膳棚といふものに、沓おきて、はらへいひのよしるを、いとほしがりて、「誰が沓にかあらん、え知らず」と主殿司人々のいひけるを、「やゝ方弘がきたなき物ぞや」とりに來てもいとさわがし。わかくてよろしき男の、ゆす女の名をいひなれて呼びたるこそ、いとにくけれ。知りながらも、何とかや、かたもじは覺えていふはをかし。宮仕所の局などによりて、夜などぞ、さおほめかんは悪しかりぬべけれど、主殿司、さらぬ處にては、侍、藏人所にあるものを率て行きてよばせよかし、てづからは聲もしるきに。はしたもの、わらはべなどはされどよし。わかき人と兒は肥えたるよし。受領などおとなだちたる人は、ふときいとよし。あまり

明に人に知られて悪しければ心いられたらん一氣が短い、いらす黒き袴一よごれてきたなき袴走る車云々一黒き袴、狩衣、走る車、何れも別々に上の見えぬべきがに接する文脈

瘦せからめきたるは、心いられたらんと推し量らる。よろづよりは、牛飼童のなりあしくてもたるこそあれ。他物どもは、されど後にたちてこそ行け、先につとまもられ行くもの、穢けなるは心憂し。車のしりに殊なることなき男どものつれだちたる、いと見ぐるし。ほそらかなる男隨身など見えぬべきが、黒き袴の末濃なる、狩衣は何もうちなればみたる。走る車のかたなどに、のどやかにてうち添ひたるこそ、わが物とは見えね。なほ大かた様子あしくて、人使ふはわろかりき。破れなど時々うちしたれど、馴ればみて罪なきはさるかたなりや。つかひ人などはありて、わらはべの穢けなるこそは、あるまじく見ゆれ。家にゐたる人も、そこにある人とて、使にても、客人などの往きたるにも、をかしき童の數多見ゆるはいとをかし。人の家の前をわたるに、さぶらひめきたる男、つちに居るものなどして、男子の十ばかりなるが、髪をかしけなる、引きはへても、さばきて垂るも、また五つ六つばかりなるが、髪は頭のもとにかいくとみて、つらいと赤うふくらかなる、あやしき弓、楯だちたる物な

ささの云々
—ささばさ
く(笏)の誤
なるべしと
いふ、笏の
白きを挾め
るあたりに

淵瀨云々—
古今集に、
世の中は何

どさよけたる、いとうつくし。車とどめて抱き入れまほしくこそあれ。又さて往くに、
薫物の香のいみじくかよへたる、いとをかし。よき家の中門あけて、檳榔毛の車の白う
清けなる、はじ蘇枋の下簾のほひいときよけにて、榻にたちたるこそめでたけれ。五
位六位などの下襲のしりはさみて、さよのいと白きかたにうちおきなどして、とかくい
きちがふに、また装束し、壺胡篋負ひたる隨身の出で入る、いとつきぐし。厨女のい
と清けなるがさし出でて、某殿の人やさぶらふなどいひたる、をかし。

瀧は

音無の瀧。布留の瀧は、法皇の御覽じにおはしけんこそめでたけれ。那智の瀧は熊野に
あるがあらはれなるなり。轟の瀧はいかにかしがましく怖しからん。

川は

飛鳥川、淵瀨さだめなくはかなからむといとあらはれなり。大井川。泉川。水無瀨川。耳
敏川、また何事をさしもさかしく聞きけんをかし。音無川、思はずなる名とをかしき

か常なる飛
鳥川昨日の
淵ぞ今日の
瀨となる

このしたに
も—天の川
はこの下界
にもあるよ
との洒落
七夕つめに
—古今集に
狩り暮し七
夕つめに宿
からん天の
川原に我ば
來にけり

なり。細谷川。玉星川。貫川。澤田川。催馬樂などのおもひはするなるべし。なのりそ
の川。名取川もいかなる名を取りたるにかと聞かまほし。吉野川。あまの川、このした
にもあるなり。七夕つめに宿からんと業平が詠みけんも、ましてをかし。

橋は

あさむつ橋。長柄の橋。あまびこの橋。濱名の橋。ひとつ橋。佐野の船橋。うたじめ
の橋。轟の橋。小川の橋。かけはし。勢多の橋。木曾路の橋。堀江の橋。鵠の橋。ゆき
あひの橋。小野の浮橋。山菅の橋。一筋わたしたる棚橋。心せばければ名を聞きたるを
かし。假寐の橋。

里は

逢坂の里。ながめの里。いさめの里。ひとつまの里。たのめの里。朝風の里。夕日の里。
十市の里。伏見の里。長井の里。つまとりの里、人にとられたるにやあらん、わが取り
たるにやあらん、いづれもをかし。

草は

心あがり―
澤瀉を而高
にかけし洒
落
生ふる處云
云―堀河百
首、壁に生
ふるいつま
で草のいつ
までかかれ
すとふべき
篠原の里

菖蒲。菰。葵いとをかし。祭のをり、神代よりしてさるかざしとなりけん、いみじうめでたし。物のさまもいとをかし。澤瀉も名のをかしきなり、心あがりしけんとおもふに。三稜草。蛇床子。苔。木蠹。雪間の青草。酢漿。あやの紋にても他物よりはをかし。あやふ草は岸の額に生ふらんも、實にたのもしけなくあはれなり。いつまで草は生ふる處いとほかなくあはれなり。岸の額よりもこれはくづれやすけなり。まことの石灰などには、えおひすやあらんと思ふぞわろき。ことなし草は思ふ事なきにやあらんと思ふもをかし。又あしき事を失ふにやといづれもをかし。しのぶ草いとあはれなり。屋の端、さし出でたる物の端などに、あながちに生ひ出でたるさま、いとをかし。蓬いとをかし。茅花いとをかし。濱茅の葉はましてをかし。荆三稜。蘋萍。淺茅。青鞭草。木賊といふ物は風に吹かれたらん音こそ、いかならんと思ひやられてをかしけれ。薺。ならしば、いとをかし。蓮のうき葉のらうたけにて、のどかに澄める池の面に、大なるこ小さきと、

物おしつけ
―葉の大き
を物に比べ
んためにや

ひろごりたどよひてありく、いとをかし。とりあけて物おしつけなどして見るも、よにいみじうをかし。八重葎。麥門冬。山藺。女蘿。濱木綿。葦。葛の風に吹きかへされて裏のいとしろく見ゆる、をかし。

集は

古萬葉集 古今 後撰

歌の題は

- 都 葛 三稜草 駒 霞 笹 壺葦 女蘿 蔣 高瀬 鴛鴦 淺茅 芝 青鞭草 梨
- 棗 榿

草の花は

嬰麥、唐のは更なり、やまとのもいとめでたし。女郎花。桔梗。菊のところくうつろひたる。刈萱。龍膽は枝さしなどもむつかしけなれど、他花みな霜がれはてたるに、いとほやかなる色あひにてさし出でたる、いとをかし。わざととりたてて、人めかすべ

むつかし―
むくつけし

古萬葉集―
萬葉集なり
別物にあら
す

老いていけ
 げ云々―黒
 川翁の説に
 董の老い衰
 へ行けば董
 董も唯の董
 も同じ様に
 なるはいや
 な心地す
 ぬかつき―
 黒川翁の説
 に、千生酸
 漿（センナ
 リホホツ
 キ）
 おほどれた
 る―老耄、

きにもあらぬさまなれど、鴈來紅の花らうたけなり。名ぞうたてけなる。鴈の來る花と、文字には書きたる。雁緋の花、色は濃からねど、藤の花にいとよく似て、春と秋と咲く、をかしけなり。壺董、すみれ、同じやうの物ぞかし。老いていけば同じなど愛し。しもつけの花。夕顔は朝顔に似て、いひとつけたるもをかしかりぬべき花のすがたにて、にくき實のありさまこそいとくちをしけれ。などてさはた生ひ出でけん。ぬかつきなどいふもののやうにだにあれかし。されどなほ夕顔といふ名ばかりはをかし。葦の花、更に見どころなけれど、御幣などいはれたる、心ばへあらんと思ふにたどならず。萌えしも薄にはおとらねど、水のつらにてをかしうこそあらめと覺ゆ。これに薄を入れぬ、いとあやしと人いふめり。秋の野のおしなべたるをかしさは、薄にこそあれ。穂さきの蘇枋にいと濃きが、朝霧にぬれてうち靡きたるは、さばかりの物やはある。秋の終ぞいと見所なき。いろくに亂れ咲きたりし花の、かたもなく散りたる後、冬の末まで、頭いと白く、おほどれたるをも知らで、昔おもひいで顔になびきて、かひろぎ立てる人にこそいみじ

又は老髪
 の如くばさば
 さとなりた
 る様をいふ
 ならん
 なびきて―
 この下に立
 てるさまは
 と補ふべし
 かひろぎ―
 老人の腰の
 ひよるめく
 様

今いで來る
 者―この頃
 來たての從
 者

う似ためれ。よそふる事ありて、それをしもこそ哀ともおもふべけれ。萩はいと色ふかく、枝たをやかに咲きたるが、朝露にぬれてなよくとひろごりふしたる、牡鹿の分きてたちならすらんも心ことなり。唐葵はとりわきて見えねど、日の影に隨ひて傾くらんぞ、なべての草木の心とも覺えでをかしき。花の色は濃からねど、咲く山吹には山石榴も異なることなけれど、をりもてぞ見るとよまれたる、さすがにをかし。薔薇はちかくて、枝のさまなどはむつかしけれどをかし。雨など晴れゆきたる水のつら、黒木の階などのつらに、亂れ咲きたるゆふばえ。

おほつかなきもの

十二年の山籠の法師の女親。知らぬ所に闇なるに行きたるに、あらはにもぞあるとて、火もともさで、さすがになみるたる。今いで來るものの心も知らぬに、やんごとなき物もたせて人の許やりたるに、遅くかへる。物いはぬ兒の、そりくつがへりて人にも抱かれず泣きたる。暗きに覆盆子食ひたる。人の顔見しらぬ物見。

あらぬ人
別人

れおびれた
る―れぼけ
たる
やがて―そ
のまゝ

けそう―類
證、あらは
なる

たとしへなきもの

夏と冬と。夜と晝と。雨ふると日てると。若きと老いたると。人の笑ふと腹だつと。黒
きと白きと。思ふと憎むと。藍と黄蘗と。雨と霧と。おなじ人ながらも志うせぬるは、
誠にあらぬ人とぞ覺ゆるかし。常磐木おほかる處に鳥のねて、夜中ばかりにいねさわが
しくおぢ惑ひ、木づたひて、ねおびれたる聲に鳴きたるこそ、晝のみめにはたがひてをか
しけれ。忍びたる處にては夏こそをかしけれ。いみじう短き夜のいはかなく明けぬる
に、つゆ寐すなりぬ。やがて萬の所あけながらなれば、涼しう見わたされたり。なほ今
少しいふべき事のあれば、互にいらへどもするほどに、たゞ居たる前より、鳥の高く鳴き
て行くこそ、いとけそうなる心地してをかしけれ。冬のいみじく寒きに、思ふ人とうづ
もれ臥して聞くに、鐘の音のたゞ物の底なるやうに聞ゆるもをかし。鳥の聲もはじめは
羽のうちに口をこめながら鳴けば、いみじう物深く遠きが、つきくになるまゝに近く
聞ゆるもをかし。懸想人にて來るはいふべきにもあらず。唯うちかたらひ、又さしもあ

斧の柄も云
云―時間の
甚だ長きを
いふ、晉の
王質の故事
ながめて―
一本あくび
てに作る
いはすある
と―黒川翁
云、いはす
にて句、あ
るはあくの
誤
下ゆく水の
―六帖に、
心には下ゆ
く水の湧き

らねど、おのづから來などする人の、簾の内にて、あまた人々ゐて、物などいふに、入り
てとみに歸りけもなきを、供なる男童など、斧の柄も朽ちぬべきなんめりとむつかし
ければ、永やかにうち詠めて、密にと思ひていふらめども、「あなわびし、煩惱苦惱かな、
今は夜中にはなりぬらん」などいひたる、いみじう心づきなく、かのいふ者はとかくも覺
えず、この居たる人こそ、をかしう見きよつる事もうするやうに覺ゆれ。又さは色に出
でてはえいはずあると、高やかにうちいひうめきたるも、したゆく水のといとをかし。
立部、透垣のもとにて、「雨降りぬべし」など聞えたるもいとにくし。よき人公達などの
供なるこそ、さやうにはあらね、唯人などさぞある。數多あらん中にも、心ばへ見てぞ
率てありくべき。

ありがたきもの

舅に褒めらるゝ婿。また姑に思はるゝ婦の君。物よく抜くる白銀の毛拔。主誇らぬ人の
従者。つゆの癖缺點なくて、かたち心ざまもすぐれて、世にあるほど、聊のきすなき人。

かへりいは
で思ふぞい
ふにまされ
る

身じろく
身動く、内
なる女の也

同じ處に住む人の、互に慚ぢかはし、いさよかの隙なく用意したりと思ふが、遂に見えぬこそかたけれ。物語、集など書きうつす本に墨つけぬ事。よき草紙などは、いみじく心して書けども、必こそきたなけになるめれ。男も女も法師も、ちぎり深くてかたらふ人の、未まで中よき事かたし。つかひよき従者。搔練うたせたるに、あなめでたと見えておこす。内裏の局は、廊いみじうをかし。かみの小部あけたれば、風いみじう吹き入りて夏もいとすどし。冬は雪霰などの風にたぐひて入りたるもいとをかし。せばくて童などのほり居たるもあしければ、屏風の後などにかくしすゑたれば、他所のやうに聲たかく笑ひなどもせでいとよし。晝などもたゆまず心づかひせらる。夜はたまして聊うちとくべくもなきが、いとをかしきなり。杳の音の夜ひと夜聞ゆるがとまりて、たゞ指一つしてたよくが、その人ななりと、ふと知るこそをかしけれ。いと久しくたよくに音もせねば、寐いりにけるとや思ふらん。ねたく少しうち身じろくおと、衣のけはひも、さななりと思ふらんかし。扇などつかふもしるし。冬は火桶にやをら立つる火箸の音も、

こへとし
も云々ーこ
こへ來らん
と志せるに
あらぬ人も
うけばりて
一憚る様干
なく、立て
らすにかゝ
る
いかじあら
ん一當らぬ

忍びたれど聞ゆるを、いとどたよきまさり、聲にてもいふに、陰ながらすべりよりて聞く折もあり。また數多の聲にて詩を誦し、歌などうたふには、たよかねどまづあけたれば、こへとしも思はぬ人も立ちとまりぬ。入るべきやうもなくて、立ちあかすもをかし。御簾のいと青くをかしけなるに、几帳の帷子いとあざやかに、裾のつま少しうちかさなりて見えたるに、直衣の後にほころび絶えず著たる公達、六位の藏人の青色など著て、うけばりて、遣戸のもとなどにそばよせてえ立てらず、堀の前などに、後押して袖うち合せて立ちたるこそをかしけれ。また指貫いと濃う直衣のあざやかにて、いろくの衣どもこほし出でたる人の、簾を押し入れて、なから入りたるやうなるも、外より見るはいとをかしからんを、いと清けなる硯ひきよせて文書き、もしは鏡こひて鬢などかき直したるもすべてをかし。三尺の几帳をたてたるに、帽額のしもは唯少しぞある。外に立てる人、内にゐる人と物いふ顔のもとに、いとにくく當りたるこそをかしけれ。長のいと高く、短からん人などやいかどあらん。なほ尋常のはさのみぞあらん。まして臨時の

かも知れざれど
さきは云々
—炬火のさきは前なる人にさし附ける程に

まめ人—生真面な人、忠誠の意より轉じたる嘲笑的口吻とありて—今少しかくありて後退出し給へ
おはします—中宮の也

祭の調樂などはいみじうをかし。殿主の官人などの長き松を高くともして、頭はひき入れて行けば、さきはさし附けつばかりなるに、をかしうあそび笛ふき出でて、心ことに思ひたるに、公達の日の装束して立ちとまり物いひなどするに、殿上人の隨身どもの、さきを忍びやかに短く、おのが公達のれうにおひたるも、あそびに交りて、常に似ずをかしう聞ゆ。夜更けぬれば猶あけて歸るを待つに、公達の聲にて、あらたに生ふるとみ草の花と歌ひたるも、このたびは今少しをかしきに、いかなるまめ人にかあらん、すぐすぐしうさし歩みて出でぬるもあれば、笑ふを、「暫しや、など、さ夜をすてて急ぎ給ふ、とありて」などいへど、心地などやあしからん、倒れぬばかり、もし人や追ひてとらふると見ゆるまで、まどひ出づるもあめり。

職の御曹司におはしますころ、木立など遙に物ふり、屋のさまち高うけどほけれど、すずろにをかしう覺ゆ。母屋は鬼ありとて皆へだて出して、南の廂に御几帳たてて、またひさしに女房は侍ふ。近衛の御門より左衛門の陣に入り給ふ上達部のさきども、殿上人の

おほさきこさき—上達部のは大警蹕、殿上人のは小警蹕

なにがし—聲の秋—何か一聲の秋とおぼるに書ける也
朗詠に、池冷水無三
伏夏、松高風有ニ一聲
秋—しづくに

はみじかければ、おほさきこさきと聞きつけて騒ぐ。數多たびになれば、その聲どもも皆聞きしられて、それぞかれぞといふに、又「あらず」などいへば、人して見せなどするに、いひあてたるは、「さればこそ」などいふもをかし。有明のいみじう霧わたりたる庭におりて歩くを聞き召して、御前にもおきさせ給へり。うへなる人は皆おりなどして遊ぶに、やうく明けもてゆく。左衛門の陣にまかりて見んとて行けば、われもくと追ひつきて行くに、殿上人あまた聲して、なにがし一聲の秋と誦じて入る音すれば、遣け入りて物などいふ。「月を見給ひける」などめでて、歌よむもあり。夜も晝も殿上人の絶ゆるをりなし。上達部まかんでまゐり給ふに、おほろけに急ぐことなきは、必まゐり給ふ。

あぢきなきもの

わざと思ひたちて宮仕に出で立ちたる人の、ものうがりてうるさけに思ひたる。人にもいはれ、むづかしき事もあれば、いかでかまかんでなんとといふ言草をして、出でて親をうらめしければ、また参りなんとといふよ。養子の顔にくさけなる。しづくに思ひたる人

一娘が也、
下なるなげ
く人はその
娘の親

を忍びて婿にとりて、思ふさまならずとなけく人。

いとほしけなきもの

人によみて取らせたる歌の褒めらるよ、されどそれはよし。遠きありきする人の、つぎ
つぎ縁尋ねて文えんといはずれば、知りたる人の許等閑にかきて遣りたるに、なまいた
はりなりと腹立ちて、返事もとらせで無徳にいひなしたる。

こよちよけなるもの

卯杖の祝言。神樂の人長。池の蓮の村雨にあひたる。御靈會の馬長。また御靈會の振幡

とりもてるもの

傀儡のこととり。除目に第一の國得たる人。

御佛名のあした、地獄繪の御屏風とりわたりて、宮に御覽せさせ奉りたまふ。いみじうゆ
ゆしき事がぎりなし。「これ見よかし」と仰せらるれど、「更に見侍らじ」とて、ゆよしさ
にうへやに隠れふしぬ。雨いたく降りて徒然なりとて、殿上人うへの御局に召して御あ

人長―神樂
の舞人の長
とりもてる
もの―一説
にこの語振
幡に接し、
得たる人ま
で前の一段
の中と云々
こととり―

事取にて長
官か、旁註
抄などは小
鳥に作る
琵琶の聲云
云―白樂天
が琵琶行の
一節
そらごと―
清少に關す
る譚言

そびあり。道方の少納言琵琶いとめでたし。濟政の君箏の琴、行成笛、經房の中將笙の
笛など、いとおもしろうひとわたり遊びて、琵琶ひきやみたるほどに、大納言殿の、「琵
琶の聲はやめて物語すること遅し」といふ事を誦じ給ひしに、隠れふしたりしも起き出
でて、「罪はおそろしけれど、なほ物のめでたきはえ止むまじ」とて笑はる。御聲などの
勝れたるにはあらねど、折のことさらに作りいでたるやうなりしなり。

頭中將そごろなるそらごとを聞き、いみじういひおとし、「何しに人と思ひけん」な

ど殿上にもいみじくなんの給ふと聞くに、はづかしけれど、「實ならばこそあらめ、お
のづから聞きなほし給ひてん」など笑ひてあるに、黒戸のかたへなど渡るにも、聲など
する折は、袖をふたぎて露見おこせず、いみじうにくみ給ふを、とかくもいはず、見もい
れで過ぐす。二月つごもりがた、雨いみじう降りてつれづれなるに、「御物忌にこもりて、
さすがにさうくしくこそあれ、物やいひにやらましとなんの給ふ」と人々かたれど、
「よにあらじ」など答へてあるに、一日しにも暮して参りたれば、夜のおとどに入らせ

よに―よも
や、決して

篇をぞつく
一篇突にて
つくりを隠
し篇にて字
をあてる遊
戯、真頼の
説には、つ
ぐと濁りて
讀む、篇を
定めおきて
それにつく
りを附くる
遊戯

心ときめき
云々―何事
かと先に心
どきくし

給ひにけり。長押の下に火近く取りよせて、さし集ひて篇をぞつく。「あなうれしや、疾くおはせ」など見つけていへど、すさまじき心地して、何しにのほりつらんとおほえて、炭櫃のもとにゐれば、又そこにあつまりるて物などいふに、「なにがしさぶらふ」といと花やかにいふ。あやしく、「いつの間に何事のあるぞ」と問はすれば殿主司なり。「唯ここに人傳ならで申すべき事なん」といへば、さし出でて問ふに、「これ頭中將殿の奉らせ給ふ、御かへり疾く」といふに、いみじくにくみ給ふをいかなる御文ならんと思へど、「只今急ぎ見るべきにあらねば、いね、今きこえん」とて懐にひき入れて入りぬ。なほ人の物いふきよなどするに、すなはち立ちかへりて、「さらばその有りつる文を賜りて來となん仰せられつる。疾くく」といふに、「あやしく伊勢の物語なるや」とて見れば、青き薄様にいと清けに書き給へるを、心ときめきしつるさまにもあらざりけり。「蘭省の花の時錦帳の下」と書いて、「末はいかにく」とあるを、如何はすべからん。御前のおはしまさば御覽せさすべきを、これがする知り顔に、たどくしき眞字は書きたらんも見ぐる

たるが其程
の事にては
なかりき
草の庵―白
氏文集十七
蘭省の句下
に廬山雨夜
草庵中

このもの―
清少納言を
いふ、頭中
將の詞

こひとりて
―返事を
ありつる文

しなど、思ひまはす程もなく、責めまどはせば、唯その奥に、すびつの消えたる炭のあ
るして、「草の庵を誰かたづねん」と書きつけて取らせつれど、返事もいはで、みな寐て、
翌朝いと疾く局におりたれば、源中將の聲して、「草の庵やあるく」とおどろくしう
問へば、「などてか、さ人けなきものはあらん。玉の臺もとめ給はましかば、いで聞え
てまし」といふ。「あなうれし、下にありけるよ。上まで尋ねんとしつるものを」とて、
昨夜ありしやう、「頭中將の宿直所にて、少し人々しきかぎり、六位まで集りて、萬の
人のうへ、昔今と語りていひし序に、猶このもの無下に絶えはてて後こそ、さすがにえ
あらね。もしいひ出づる事もやと待てど、いさよか何とも思ひたらず。つれなきがいと
ねたきを、今宵悪しとも善しとも定めきりて止みなんかして、皆いひ合せたりしこと
を、只今は見るまじきとて入りたまひぬとて、主殿司來りしを、また追ひ歸して、たど
袖をとらへて、東西をさせず、こひとり持てこずば、文をかへしとれと誠めて、さばかり
降る雨の盛に遣りたるに、いと疾く歸りきたり、これとてさし出でたるが、ありつる文

—前に此方より遣したる文

ぬす人—ひどい奴、其老巧を譽むる言葉

心もとなく—夜の明るるが待遠しく

兄—目らいふ

なれば、かへしてけるかとうち見るにあはせてをめけば、あやし、いかなる事ぞとてみな寄りて見るに、いみじきぬす人かな。なほえこそすつまじけれと見さわぎて、これをもとつけてやらん、源中將つけよなどいふ。夜更くるまでつけ煩ひてなん止みにし。この事かならず語り傳ふべき事なりとなん定めし」と、いみじくかたはらいたきまでいひきかせて、「御名は今草の庵となんつけたる」とて急ぎたちたまひぬれば、「いとわろき名の末まであらんこそ口惜しかるべけれ」といふほどに、修理亮則光「いみじきよろこび申しに、うへにやとて参りたりつる」といへば、「なぞ司召ありとも聞えぬに、何になり給へるぞ」といへば、「いで實にうれしき事の昨夜侍りしを、心もとなく思ひ明してなん。かばかり面目ある事なかりき」とて、はじめありける事ども、中將の語りつる同じ事どもをいひて、「この返事に随ひてさる物ありとだに思はじと、頭中將の給ひしに、ただに來りしはなかなかよかりき。持て來りしたびは、如何ならんと胸つぶれて、まことにわろからんは、兄のためもわろかるべしと思ひしに、なのためだにあらず。そこらの人の

言加へ—上の句を附加へよと説くは如何、批評し又意味を了解せよと云々の意なるべし

人—あなた

せうと—則光の渾名となしたる也語り聞え—帝が中宮になり

褒め感じて、兄こそ聞けとのたまひしかば、下心にはいとうれしけれど、さやうのかたには更にえ侍ふまじき身になんはべると申しよかば、言加へ聞き知れとはあらず、ただ人に語れとてきかするぞとの給ひしなん、少し口をしき兄のおほえに侍りしかど、これをもとつけ試るにいふべきやうなし。殊に又これが返しをやすべきなどいひ合せ、わろき事いひてはなかくねたかるべしとて、夜中までなんおはせし。これは身のためにも人のためにも、さていみじきよろこびには侍らずや。司召に少將のつかさ得て侍らんは、何とも思ふまじくなん」といへば、實に數多して、さる事あらんとも知らで、ねたくもありけるかな。これになん胸つぶれて覺ゆる。この妹兄といふことをば、うへまで皆しろしめし、殿上にも官名をばいはで、「せうと」とぞつけたる。物語などして居たる程に、「まづ」と召したれば参りたるに、この事仰せられんとてなりけり。うへの渡らせ給ひて、語り聞えさせ給ひて、「男ども皆扇に書きて持たる」と仰せらるゝにこそ、あさましよう何のいはせける事にかと覺えしか。さて後に袖几帳など取りのけて、思ひなほり

袖几帳など
云々一頭中
將との隔も
なくなれり

御匣殿一
關白道隆公
の四君

うへへ清少
をいふ、侍
女の用ふる
敬稱

けうら一清
ら

給ふめりし。

かへる年の二月二十五日に、宮、職の御曹司に出でさせ給ひし。御供にまゐらで梅壺に
残り居たりし又の日、頭中將の消息とて、「きのふの夜鞍馬へ詣でたりしに、こよひ方
の塞がれば、違になん行く、まだ明けざらんに歸りぬべし。必いふべき事あり、いたく
たよかせで待て」との給へりしかど、「局に一人はなどてあるぞ、こよに寐よ」とて御匣
殿めしたれば参りぬ。久しく寐おきておりたれば、「夜いみじう人のたよかせ給ひし。辛
うじて起きて侍りしかば、うへにかたれば斯くなんと給ひしかども、よもきかせ給は
じとて臥し侍りにき」と語る。心もとなの事やとて聞くほどに、主殿司きて、「頭の殿の
聞えさせ給ふなり。只今まかり出づるを、聞ゆべき事なんある」といへば、「見るべきこ
とありて、うへになんのほり侍る。そこに」といひて、局はひきもやあけ給はんと、心
ときめきして、わづらはしければ、梅壺の東おもての半蔀あけて、「こよに」といへば、
めでたくぞ歩み出で給へる。櫻の直衣いみじく花々と、うらの色つやなどえもいはすけ

擣目一衣な
どの擣ちた
る處、こま
は直衣の下
の御衣の色
をいふ

片つかた一
片足

ありて一原
本での字な
し

さだ過ぎ一
壯年を過ぎ
て、以下清
少自身の様
大かた色こ
となる一當

うらなるに、葡萄染のいと濃き指貫に、藤のをり枝ことくしく織りみだりて、紅の色
擣目など、輝くばかりぞ見ゆる。次第に白きうす色など、あまた重りたる、狭きまよに、片
つかたはしもながら、少し簾のもと近く寄り居給へるぞ、まことに繪に書き、物語のめで
たきことにいひたる、これにこそはと見えたる。御前の梅は、西は白く東は紅梅にて、少
しおちかたになりたれど、猶をかしきに、うらくと日の氣色のどかにて、人に見せまほ
し。簾の内に、まして若やかなる女房などの、髪うるはしく長くこほれかよりなど、そひ
居たゝめる、今少し見所ありて、をかしかりぬべきに、いとさだ過ぎ、ふるくしき人の、
髪なども我にはあらねばや、處々わなよきちりほひて、大かた色ことなるころなれば、
あるかなきかなる薄にびども、あはひも見えぬ衣などもなれば、露のはえも見えぬに、
おはしまさねば裳も著ず、袷すがたにて居たるこそ、物ぞこなひに口をしけれ。「職へな
んまるる、ことづけやある、いつかまるる」などのたまふ。さても昨夜あかしもはてで、
されどもかねてさ言ひてしかば待つらんとて、月のいみじう明きに、西の京よりくるまよ

時中宮の女
官共御縁邊
の裏服なり
しならん

仲忠一宇津
保物語中の
人物、幼に
して孝、種
種の奇持あ
り、琴をよ
くし帝の一
の内親王降
嫁の宣旨下
りし事あり

に、局をたときしほど、辛うじて寐おびれて起き出でたりしけしき、答のはしたなさな
ど語りてわらひ給ふ。「無下にこそ思ひうんじにしか。などさるものをばおきたる」など
實にさぞありけん、いとほしくもをかしくもあり。暫しありて出で給ひぬ。外より見
ん人はをかしう、内にいかなる人のあらんと思ひぬべし。奥のかたより見いだされたら
んうしろこそ、外にさる人やともえ思ふまじけれ。暮れぬればまるりぬ。御前に人々多
くつどひるて、物語のよきあしき、にくき所などをぞ、定めいひしろひ誦じ、仲忠がこ
となど、御前にも、おとりまさりたる事など仰せられける。「まづこれは如何にとことわ
れ。仲忠が童生のあやしさを、せちに仰せらるよぞ」などいへば、「何かは、琴なども天人
おるばかり弾きて、いとわろき人なり。みかどの御むすめやはえたる」といへば、仲忠
が方人と心を得て「さればよ」などいふに、「この事どもよりは、ひる齊信が参りたりつ
るを見ましかば、いかにめで惑はましとこそ覺ゆれ」と仰せらるよに、人々「さてまこ
とに常よりもあらまほしう」などいふ。「まづそのことこそ啓せめと思ひて参り侍りつる

かはらの松
一白氏文集
四、樂府に、
牆有衣兮
瓦有松云
云、西去都
門幾多地
云々

なしなども
不在など
いひても
かぐやき
氣恥しく

に 物語の事にまぎれて」とて、ありつる事を語り聞えさすれば、「誰もく見つれど、
いとかく縫ひたる糸針目までやは見とほしつる」とて笑ふ。西の京といふ所の荒れたり
つる事、諸共に見る人あらましかばとなん覺えつる、垣なども皆破れて、苔生ひてなど
語りつれば、宰相の君の、「かはらの松はありつや」と答へたりつるを、いみじうめでて、
「西のかた都門を去れることいくばくの地ぞ」と口ずさびにしつる事など、かしがましき
までいひしこそをかしかりしか。
里にまかでたるに、殿上人などの來るも、安からずぞ人々いひなすなる。いとあまり心
に引きいらたる覺はたなければ、さいはん人もにくからず。また夜も晝もくる人をば、
何かはなしなどもかぐやきかへさん。誠に睦じくなどあらぬも、さこそは來めれ。あまり
うるさくも實にあれば、このたび出でたる所をば、いづくともなべてには知らせず。經
房、濟政の君などばかりぞ知り給へる。左衛門尉則光が來て、物語などするついでに、昨
日も宰相中將殿の、妹のあり處さりととも知らぬやうあらじと、いみじう問ひ給ひし

中間に一時
ならぬに、
中途半端の
時に

すぢなし
隠すべきす
べなし、遁
辭なし

に、更に知らぬよし申しよに、あやにくに強ひたまひし事などいひて、「ある事あらがふは、いと佗しうこそありけれ。ほとく笑みぬべかりしに、左中將のいとつれなく知らず顔にて居給へりしを、かの君に見だにあはせば笑みぬべかりしに佗びて、臺盤のうへに怪しき和布のありしを、唯とりに取りて食ひまぎらはしよかば、中間にあやし食物やと人も見けんかし。されど、かしこうそれにてなん申さずなりにし。笑ひなましかば不用ぞかし。まことに知らぬなめりと思したりしも、をかしうこそ」など語れば、「更に聞え給ひそ」などいといひて、日ごろ久しくなりぬ。夜いたく更けて、門おどろくしく叩けば、何のかく心もとなく遠からぬ程を叩くらんと聞きて、問はすれば、瀧口なりけり。左衛門の文とて、文をもてきたり。皆ねたるに、火近く取りよせて見れば、「明日御讀經の結願にて、宰相中將の御物忌に籠り給へるに、妹の在處申せと責めらるよに、すぢなし、更にえ隠し申すまじき。そことや聞かせ奉るべき。いかに 仰に隨はん」とぞいひたる。返事も書かで、和布を一すばかり紙に包みてやりつ。さて後にきて、「一夜責

すぢなる
所い加
減の所

硯のある
硯の傍に
ある

便なき事
怨めしく思
ふ事、面白
くない事
よそにても
云々餘所
ながらもあ
あ彼の男ぞ
など思出し

めて問はれて、すぢなる所に率てありき奉りて、まめやかにさいなむに、いとからし。さてとかくも御かへりのなくて、そぢなる和布の端をつよみて取へりしかば、取りたがへたるにや」といふに、怪しの違物や。人のもとにさる物包みて贈る人やはある。いさよかも心得ざりけると見るがにくければ、物もいはで、硯のある紙のはしに、かづきする蠶の住家はそなりとゆめいふなとやめをくはせけんとかきて出したれば、「歌よませ給ひつるか、更に見侍らじ」とてあふぎかへして遁けていぬ。かう互に後見かたらひなどする中に、何事ともなくて、少し中あしくなりたるころ、文おこせたり。「便なき事侍るとも、ちぎり聞えし事は捨て給はで、よそにてもさぞなどは見給へ」といひたり。常にいふ事は、「おのれをおほさん人は、歌などよみてえさすまじき。すべて仇敵となん思ふべき。今はかぎりありて絶えなんと思はん時、さる事はいへ」といひしかば、この返しに、くづれよる妹脊の山のなかなればさらによし野のかはとだに見じ

給へ
—中直りも
にくくして
せずして

まゆぬくも
—原本も文
字なし、年
頃の女は眉
を抜き墨に
て描きし也
中なるをと
め—宇津保
物語吹上の
巻、朝ぼら
けほのかに
見ればあか
ぬかな中な
る少女暫し

といひ遣りたりしも、誠に見ずやなりけん、返事もせず。さてかうぶり得て遠江介な
どいひしかば、にくくしてこそやみにしか。

物のあはれ知らせがほなるもの

鼻たるまもなく、かみてもものいふ聲。まゆぬくも。

さてその左衛門の陣にいきて後、里に出でて暫しあるに、「疾く参れ」など仰事のはしに、
「左衛門の陣へいきし朝ぼらけなん、常におほし出でらるよ。いかでさつれなくうちふり
てありしならん。いみじくめでたからんとこそ思ひたりしか」など仰せられたる御返事
に、かしこまりのよし申して、「私にはいかでかめでたしと思ひ侍らざらん。御前にも、さ
りとも、中なるをとめとはおほしめし御覽じけんとなん思ひ給へし」と聞えさせられたれば、
たち歸り「いみじく思ふべか」めるなり。誰がおもてぶせなる事をば、いかでか啓した
るぞ。たゞ今宵のうちに萬の事をすてて参られよ。さらすばいみじくにくませ給はんと
なん仰事ある」とあれば、よろしからんにてだにゆとし。ましていみじくとある文字に

止めん
よろし、い
みじ—よろ
しは竝一通
いみじは非
常

うたても—
餘りひどく
取り申し—
御願申す、
春註機嫌を
取ると解く

は、命もさながら捨ててなんとて参りにき。

職の御曹司におはしますころ、西の廂に不斷の御讀經あるに、佛などかけ奉り、法師の
るたるこそ更なる事なれ。二日ばかりありて、縁のもとにあやしき者の聲にて、「なほそ
の佛供のおろし侍りなん」といへば、「いかでまだきには」と答ふるを、何のいふにかあ
らんと立ち出でて見れば、老いたる女の法師の、いみじく煤けたる狩袴の、筒とかやの
やうに細く短きを、帯より下五寸ばかりなる、衣とかやいふべからん、同じやうに煤けた
るを著て、猿のさまにていふなりけり。「あれは何事いふぞ」といへば、聲ひきつくるひ
て、「佛の御弟子にさぶらへば、佛のおろし賜べと申すを、この御坊達の惜みたまふ」と
いふ、はなやかにみやびかなり。「かゝるものは、うちくんじたるこそ哀なれ、うたても
花やかなるかな」とて「他物は食はで、佛の御おろしをのみ食ふが、いとたふとき事かな」
といふけしきを見て、「なか他物もたべざらん。それがさふらはねばこそ取り申し侍れ」
といへば、菓子、ひろきもちひなどを、物に取り入れて取らせたるに、無下に中よくなり

よるは云々
男山の云々
―共に尼の
歌ふ謠

白くて著よ
―新しく著
かへよ
舞ふものか
―かは詠歎
辭、あきれ
たる口吻也

て、萬の事をかたる。若き人々いできて、「男やある、いづこにか住む」など口々に問ふに、
をかしきこと、そへごとなどすれば、「歌はうたふや、舞などするか」と問ひもはてぬに、
「よゝるはたわと寐ん、常陸介と寐ん、ねたる膚もよし。」これが末いと多かり。また「男山の
峯のもみぢ葉、さぞ名はたつく」と頭をまろがしふる。いみじくにくければ笑ひにく
みて「いねく」といふもいとをかし。「これに何取らせん」といふを聞かせ給ひて、「い
みじう、などかくかたはらいたき事はさせせつる。えこそ聞かで、耳をふたぎてありつれ
その衣一つとらせて、疾くやりてよ」と仰事あれば、とりて「それ賜はらするぞ、きぬ
すよけたり、白くて著よ」とて投げとらせたれば、伏し拜みて、肩にぞうちかけて舞ふも
のか。誠ににくくて皆入りにし。後にはならひたるにや、常に見えしらがひてありく。
やがて常陸介とつけたり。衣もしろめず、同じすよけにてあれば、いづち遣りにけんな
どにくむに、右近の内侍の参りたるに、「かよるものなんかたらひつけて置きたるめ。
かうして常にくること」と、ありしやうなど、小兵衛といふ人してまねばせて聞かせ給へ

いかで見侍
らん―何卒
見たし

見えねど―
常陸介が也

仰事にてい
へば―中宮
の仰事なり
とて侍に命
ずれば

こと加へ―
言加へ、命
令しての意
一説、異加
へにて他所

ば、「あれいかで見侍らん、かならず見せさせ給へ、御得意なり。更によもかたらひ
とらじ」など笑ふ。その後また、尼なるかたはのいとあてやかなるがでてきたるを、又呼
びいじて物など問ふに、これははづかしけに思ひてあはれなれば、衣ひとつたまはせた
るを、伏し拜むはされどよし。さてうち泣き悦びて出でぬるを、はやこの常陸介いきあ
ひて見てけり。その後いと久しく見えねど、誰かは思ひ出でん。さて十二月の十餘日の
ほどに、雪いと高うふりたるを、女房どもなどして、物の蓋に入れつよいと多くおくを、
おなじくば庭にまことの山をつくらせ侍らんとて、侍召して仰事にていへば、集りてつ
くるに、主殿司の人にて御きよめに参りたるなども皆よりて、いと高くつくりなす。宮づ
かさなど参り集りて、こと加へことにつくれば、所の衆三四人まゐりたる。主殿司の人
も二十人ばかりになりけり。里なる侍召しに遣しなどす。「今日この山つくる人には
祿賜はすべし。雪山に参らざらん人には、同じからずとどめん」などいへば、聞きつけ
たるは惑ひまるるもあり。里遠きはえ告げやらず。作りはてつれば、宮づかさ召して、衣

なる雪を取り加へてかたへさらで雪山の傍去らず狩衣姿にて在るにや

さまでなくとよしやそれ迄なくとも

二ゆひとらせて、縁に投げ出づるを、一つづつとりに寄りて、をがみつゝ腰にさして皆まかんでぬ。袍など著たるは、かたへさらで狩衣にてぞある。「これいつまでありなん」と人々のたまはするに、「十餘日はありなん」たゞこの頃のほどをあるかぎり申せば、「いかに」と問はせ給へば、「正月の十五日まで候ひなん」と申すを、御前にも、えさはあらじと思すめり。女房などは、すべて年の内、晦日までもあらじとのみ申すに、あまり遠くも申してけるかな。實にえしもさはあらざらん。朔日などぞ申すべかりけると下にはおもへど、さばれさまでなくと、言ひそめてんことはとて、かたうあらがひつ。二十日のほどに雨など降れど、消ゆべくもなし。長ぞ少しおとりもてゆく。白山の観音、これ消させ給ふなと祈るも物狂ほし。さてその山つくりたる日、式部丞忠隆御使にてまゐりたれば、褥さし出し物などいふに、「今日の雪山つくりせ給はぬ所なんなき。御前のつほにも作らせ給へり。春宮弘徽殿にもつくらせ給へり。京極殿にもつくらせ給へり」などいへば、

ふり降りに古りを掛く

あざれたり―あまり感じて我風流心も腐れたり、一本あざれたる御簾に作る、然らば風流なる女房などの居る前にての意

目も見いれれば―見向きもしないのではしたなく

こよにのみめづらしと見る雪の山とところぐにふりにけるかなと傍なる人していはすれば、たびぐ傾きて、「返しはえ仕うまつりけがさじ、あざれたり。御簾の前に人をかたり侍らん」とてたちいき。歌はいみじく好むと聞きしに、あやし。御前にきこしめして、「いみじくよくとぞ思ひつらん」とぞ給はする。晦日がたに、少しちひさくなるやうなれど、なほいと高くてあるに、晝つかた縁に人々出居などしたるに、常陸介いできたり。「なほいと久しく見えざりつる」といへば、「なにか、いと心憂き事の侍りしかば」といふに、「いかに、何事ぞ」と問ふに、「なほかく思ひ侍りしなり」とてながやかによみ出づ。
うらやまし足もひかれずわたつ海のいかなるあまに物たまふらんとなん思ひ侍りしといふをにくみ笑ひて、人の目もみいれねば、雪の山にのほり、かよづらひありきていぬる後に、右近の内侍にかくなんといひやりたれば、「なにか人そへてこよには給はせざりし。かれがはしたなくて、雪の山までかよつたひけんこそ、いと悲

て不都合を働いて
さて雪山は
—原本さて
の字なし

おこなはん
など上げ
んなど思ひ
て
片つかたな
れば云々
格子を一人
にて上ぐる
故片方が上
り片方が下
りてがたつ
くなり

しけれいとあるを又わらふ。さて雪山はつれなくて年もかへりぬ。ついたちの日また雪多くふりたるを、うれしくも降り積みたるかなと思ふに、「これはあいなし。初のをばおきて、今のをばかき棄てよ」と仰せらる。うへにて局へいと疾うおるれば、侍の長なるもの、袖葉の如くなる宿直衣の袖の上に、青き紙の松につけたるをおきて、わなよき出でたり。「そはいづこのぞ」と問へば、「齋院より」といふに、ふとめでたく覺えて、取りて参りぬ。まだ大殿ごもりたれば、母屋にあたりたる御格子おこなはんなど、かきよせて、一人ねんじてあぐる、いと重し。片つ方なればひしめくに、おどろかせ給ひて、「などさはする」との給はすれば、「齋院より御文の候はんには、いかでか急ぎあけ侍らざらん」と申すに、「實にいと疾かりけり」とて起きさせ給へり。御文あけさせ給へれば、五寸ばかりなる卯槌二つを、卯杖のさまに頭つよみなどして、山たちばな、ひかけ、やますけなど美しけに飾りて、御文はなし。たどなるやう有らんやはとて御覽すれば、卯槌の頭つよみたるちひさき紙に、

これより
これを音信
の始めにし
て、一説、此
方より改め
使を立てて
蘇枋なるは
云々—蘇枋
色に見えた
るは梅の五
衣なるべし
使者への祿
ゆかしかり
つる—此先
の結果が知
りたかりし
あはせて—
其間に

山とよむ斧のひびきをたづねればいはひの杖の音にぞありける
御返しかよせ給ふほどもいとめでたし。齋院にはこれより聞えさせ給ふ。御返しも猶心
ことにかきけがし、多く御用意見えたる。御使に、白き織物の單衣、蘇枋なるは梅なめり
かし。雪の降りしきたるに、かづきて参るもをかしう見ゆ。このたびの御返事を知らずな
りにしこそ口惜しかりしか。雪の山は、誠に越のにやあらんと見えて、消えけもなし。く
ろくなりて、見るかひもなきさまぞしたる。勝ちぬる心地して、いかで十五日まちつけさ
せんと念ずれど、「七日をだにえ過ぎじ」と猶いへば、いかでこれ見はてんと皆人おもふほ
どに、俄に三日内裏へ入らせ給ふべし。いみじうくちをしく、この山のはてを知らずな
りなん事と、まめやかに思ふほどに、人も「實にゆかしかりつるものを」などいふ。御前に
も仰せらる。同じくはいひあてて御覽せさせんと思へるかひなければ、御物の具はこび、
いみじうさわがしきにあはせて、木守といふ者の、築地のほどに廂さしてゐたるを、縁
のもと近く呼びよせて、「この雪の山いみじく守りて、童などに踏みちらさせ毀たせで、

わたくしにも—自分より

其程も—七日間禁中もありし程も

すまし、をさめ—共に賤しき女役

圓座—藁に

十五日までさふらはせ。よくよく守りて、その日にあたれば、めでたき祿たまはせんとす。わたくしにも、いみじき悦いはん」など語らひて、常に臺盤所の人、下司などに乞ひて、くると菓子や何やと、いと多くとらせたれば、うち笑みて、「いと易きこと、たしかに守り侍らん。童などそのほり侍らん」といへば、「それを制して聞かざらん者は、事のよしを申せ」などいひ聞かせて、入らせ給ひぬれば、七日まで侍ひて出でぬ。其程も、これが後めたきまよに、おほやけ人、すまし、をさめなどして、絶えずいましめにやり、七日の御節供のおろしなどをやりたれば、拜みつる事など、かへりては笑ひあへり。里にても、明るるすなはちこれを大事にして見せにやる。十日のほどには五六尺ばかりありといへば、うれしく思ふに、十三日の夜雨いみじく降れば、これにぞ消えぬらんと、いみじく口惜し。今日日もまちつけでと、夜も起き居て歎けば、聞く人も物狂ほしと笑ふ。人の起きて行くにやがて起きいで、下司おこさするに、更に起きねば、にくみ腹だたれて、起きいでたるを遣りて見すれば、「圓座ばかりになりて侍る。木守いとかしこ童も寄せで守りて、明日明

て作れる敷物

折櫃—廣蓋の類

いひ屈す—心の鬱したる意か、春註には理屈にいひつめし心といへり

後日までもさふらひぬべし。祿たまらんと申す」といへば、いみじくうれしく、いつしか明日になれば、いと疾う歌よみて、物に入れてまゐらせんと思ふも、いと心もとなうわびしう、まだくらきに、大なる折櫃などもたせて、「これにしろからん所、ひたもの入れてもてこ。きたなげならんはかき捨てて」などいひくよめて遣りたれば、いと疾くもたせてやりつる物ひきさけて、「はやう失せ侍りにけり」といふに、いとあさまし。をかしようよみ出でて、人にもかたり傳へさせんとうめき誦じつる歌も、いとあさましくかひなく、「いかにしつるならん。昨日さばかりありけんものを、夜のほどに消えぬらんこと」といひ屈すれば、「木守が申しつるは、昨日いと暗うなるまで侍りき。祿をたまはらんと思ひつるものを、たまはらずなりぬる事と、手をうちて申し侍りつる」といひさわぐに、内裏より仰事ありて、「さて雪は今日までありつや」との給はせられたれば、いとねたくちをしけれど、「年のうち朔日までにあらじと人々啓し給ひし。昨日の夕暮まで侍りしを、いとかしこしとなん思ひ給ふる。今日まではあまりの事になん。夜の程に、人のにくが

蓋のかぎり
—蓋だけ

その翁—木
守
かのより來
らん人—彼
の清少の方
より來らん
者、一説雪
山に寄り來
らん人にて
やがて清少
をいふ

りて取りすて侍るにやとなん推しはかり侍ると啓せさせ給へ」と聞えさせつ。さて二十日に参りたるにも、まづこの事を御前にてもいふ。「みな消えつ」とて蓋のかぎりひきさけて持てきたりつる。帽子のやうにて、すなはちまうで來りつるが、あさましかりし事、物のふたに小山うつくしうつくりて、白き紙に歌いみじく書きて参らせんとせし事など啓すれば、いみじく笑はせ給ふ。御前なる人々も笑ふに、「かう心に入れて思ひける事を違へたれば罪得らん。まことに、四日の夕さり、侍どもやりて取りすてさせしぞ。かへりごとに、いひあてたりしこそをかしかりしか。その翁出でて、いみじう手をすりていひけれど、おほせごとぞ、かのより來らん人にかうきかすな。さらば屋うち毀たせんといひて、左近のつかさ、南の築地の外にみな取りすてし。いと高くて多くなんありつといふなりしかば、實に二十日まで待ちつけて、ようせずば今年の初雪にも降りそひなまし。うへにも聞し召して、いと思ひよりがたくあらがひたりと、殿上人などにも仰せられけり。さてもかの歌をかたれ、今はかくいひ顯しつれば、同じこと勝ちたり。か

多くの人—
普通一般の
人

はべりしか
—かは詠歎
の辭なるべ
し

もく—木理

甘栗使—大

たれ」など御前にも給はせ、人々もの給へど、「なにせんにか、さばかりの事を承りながら啓し侍らん」などまめやかに憂く心うがれば、うへも渡らせ給ひて、「まことに年ごろは多くの人なめりで見つるを、これにぞ怪しく思ひし」など仰せらるゝに、いとどつらく、うちも泣きぬべき心地ぞする。「いであはれ、いみじき世の中ぞかし。後に降り積みたりし雪をうれしと思ひしを、それはあいなしとて、かき捨てよと仰事はべりしか」と申せば、「實にかたせじとおほしけるらん」とうへも笑はせおはします。

めでたきもの

唐錦。鏘太刀。作佛のもく。色あひよく花房長くさきたる藤の、松にかよりたる。六位の藏人こそなほめでたけれ。いみじき公達なれども、えしも著給はぬ綾織物を、心にまかせて著たる青色すがたなど、いとめでたきなり。所衆雑色、たどの人の子どもなどにて、殿原の四位五位六位も、官位あるが下にうち居て、何と見えざりしも、藏人になりぬれば、えもいはずぞあさましくめでたきや。宣旨などもてまゐり、大饗の甘栗使など

臣大饗の時
朝廷より蘇
(牛乳)甘栗
(平栗)を持
ち行く使者
みづから一
一本御てづ
からに作る
覺ゆらん一
一本いかゞ
覺ゆらんに
作る

おりんこと
一六位藏人
退職の事
はしりくら
べ一競争

に参りたるを、もてなし饗應し給ふさまは、いづこなりし天降人ならんところ覺ゆれ。御
むすめの女御后におはします、まだ姫君など聞ゆるも、御使にてまゐりたるに、御文とり
入るよよりうちはじめ、しとねさし出づる袖口など、明暮見しものともおほえず。下襲
の裾ひきちらして、衛府なるは今すこしをかしう見ゆ。みづから盃さしなどしたまふを、
わが心にも覺ゆらん。いみじうかしこまり、べちに居し家の公達をも、けしきばかりこ
そかしこまりたれ、同じやうにうちつれありく。うへの近くつかはせ給ふ様など見るは、
ねたくさへこそ覺ゆれ。御文かよせ給へば、御硯の墨すり、御團扇などまゐり給へば、わ
れつかふまつるに、三年四年ばかりのほどを、なりあしく物の色よろしうてまじろはん
は、いふかひなきものなり。かうぶり得て、おりんこと近くならんだに、命よりはまさり
て惜しかるべき事を、その御たまはりなど申して惑ひけるこそ、いと口をしけれ。昔の藏
人は、今年の春よりこそ泣きたちけれ。今の世には、はしりくらべをなんする。博士のさ
えあるは、いとめでたしといふも愚なり。顔もいとにくけに、下臈なれども、世にやん

などぞ猶い
とめでたき
や一原本な
どに猶いと
めでたきな
りに作る
みやはじめ
一立后
葡萄染一紫
の黒みを帯
びたる色

ごとなき者に思はれ、かしこき御前に近づきまゐり、さるべき事など問はせ給ふ御文の
師にて侍ふは、めでたくこそおほゆれ。願文も、さるべきものの序作り出して饗めらる
る、いとめでたし。法師のさえある、すべていふべきにあらす。持經者の一人して讀む
よりも、數多が中にて、時など定りたる御讀經などぞ、なほいとめでたきや。くらうなり
て「いづら御讀經あぶらおそし」などいひて、讀みやみたる程、忍びやかにつゞけ居た
るよ。后の晝の行啓。御うぶや。みやはじめの作法。獅子、狛犬、大床子などもてまる
りて、御帳の前にしつらひする、内膳、御籠わたしたてまつりなどしたる。姫君など聞
えしたど人とこそつゆ見えさせ給はね。一の人の御ありき。春日まうで。葡萄染の織物。
すべて紫なるは、なにもくめでたくこそあれ、花も、糸も、紙も。紫の花の中には杜若
ぞ少しにくき。色はめでたし。六位の宿直すがたのをかしきにも、紫のゆるなめり。ひ
ろき庭に雪のふりしきたる。今上一の宮、まだ童にておはしますが、御叔父の上達部な
どの、わかやかに清けなるに抱かれさせ給ひて、殿上人など召しつかひ、御馬引かせて

御覽じ遊ばせ給へる、思ふ事おはせじとおほゆる。

なまめかしきもの

几帳のした云々一几帳の裾を几帳の手の所に掛けて
鬚籠一編み捨てたる端を長く残せる竹籠
朽木形の云云一本几帳のくち木がた、朽木

ほそやかに清けなる公達の直衣すがた。をかしけなる童女の、うへの袴など、わざとにはあらで、ほころびがちなる汗衫ばかり著て、薬玉など長くつけて、高欄のもとに、扇さしかくして居たる。若き人のをかしけなる、夏の几帳のしたうち懸けて、しろき綾、二藍ひき重ねて、手ならひしたる。薄様の草紙、村濃の糸してをかしくとぢたる。柳の萌えたるに青き薄様に書きだる文つけたる。鬚籠のをかしう染めたる、五葉の枝につけたる。三重がさねの扇。五重はあまり厚くなりて、もとなどにくけなり。能くしたる檜破子。白き組のほそき。新しくもなく、いたく舊りてもなき檜皮屋に、菖蒲うるはしく葺きわたしたる。青やかなる御簾の下より、朽木形のあざやかに、紐いとつやよかにて、かよりたる紐の吹きなびかされたるもをかし。夏の帽額にあざやかなる、簾の外の高欄のわたりに、いとをかしけなる猫の、赤き首綱に白き札つきて、碇の緒くひつきて引きありくもな

形は蟲喰ひ形にて人の如き模様なりとぞ

他所には云云一御息所の人を他所に出すは云云、この御息所は中宮の妹淑景舎やうし一登しの音、磨き立てたる立ちいでぬ

まめいたり。五月の節のあやめの藏人、菖蒲のかづらの、赤紐の色にはあらぬを、領巾裙帯などして、薬玉を皇子たち上達部などの立ち並び給へるに奉るも、いみじうなまめかし。取りて腰にひきつけて、舞踏し拜し給ふもいとをかし。火取の童、小忌の公達もいとなまめかし。六位の青色のとのるすがた。臨時の祭の舞人。五節の童なまめかし。宮の五節出させ給ふに、かしづき十二人、他所には御息所の人出すをばわろき事にぞすと聞くに、いかにおほすか、宮の女房を十人出させ給ふ。今二人は女院、淑景舎の人、やがて姉妹なりけり。辰の日の青摺の唐衣、汗衫を著せ給へり。女房にだにかねてさしも知らせず、殿上人にはましていみじう隠して、みな装束したちて、暗うなりたるほどに持て来て著す。赤紐いみじう結び下けて、いみじくやうしたる白き衣に、櫛木のかた繪にかきたる、織物の唐衣のうへに著たるは、誠にめづらしき中に、童は今少しなまめきたり。下づかへまでつゞき立ちいでぬるに、上達部、殿上人驚き興じて、小忌の女房とついたり。小忌の公達は、外に居て物いひなどす。五節の局を皆こほちすかして、いと怪し

るに—原本
立ちすゑた
るに作る
局を—一本
此語の下に
日もくれぬ
程にとあり
山井—小忌
衣は山藍摺
なれば掛け
ていへる也
ねたうこそ
—この上に
返しせぬは
と補ふべし

くてあらする、いと異様なり。「その夜までは猶うるはしくこそあらめ」との給はせて、さも惑はさず、几帳どものほころびゆひつよ、こほれ出でたり。小兵衛といふが赤紐の解けたるを、「これを結ばばや」といへば、實方の中將、よりつくろふに、たどならず。
あしびきの山井の水はこほれるをいかなる紐のとくるならん
といひかく。年わかき人の、さる顯證の程なれば、いひにくきにやあらん、返しもせず。そのかたはらなるおとな人達も、打ち捨てつよ、ともかくもいはぬを、宮司などは耳とどめて聴きけるに、久しくなりにけるかたはらいたさに、ことかたより入りて、女房の許によりて、「などかうはおはする」などぞさよめくなるに、四人ばかりを隔てて居たれば、よく思ひ得たらんにもいひにくし。まして歌よむと知りたらん人の、おほろけならざらんは、いかでかと、つよましきこそはわろけれ。「よむ人はさやはある。いとめでたからねど、ねたうこそはいへ」と爪はじきをしてありくも、いとをかしかければ、
うす氷あはにむすべる紐なればかざす日かけにゆるぶばかりぞ

きえいり—
いたく恥ぢ
て
の給はせし
かば—中宮
の是非上り
來れとのた
まひしによ
りて
物忌のやう
にて—物忌

と辨のおもといふに傳へさすれば、きえいりつよえもいひやらす。「などかく」と耳を傾けて問ふに、少しことどもりする人の、いみじうつくろひ、めでたしと聞かせんと思ひければ、えも言ひつづけずなりぬるこそ、なか／＼恥かくす心地してよかりしか。おりのほるおくりなどに、なやましといひ入れぬる人をも、の給はせしかば、あるかぎり群れ立ちて、ことにも似ず、あまりこそうるさけなめれ。舞姫は、すけまさの馬頭の女、染殿の式部卿の宮の御弟の四の君の御はら、十二にていとをかしかけなり。はての夜も、おひかづきいくもさわがず。やがて仁壽殿よりとほりて、清涼殿の前の東のすのこより、舞姫をさきにて、うへの御局へ参りしほど、をかしかりき。
細太刀の平緒つけて、清けなる男のもてわたるも、いとなまめかし。紫の紙を包みて封じて、房長き藤につけたるも、いとをかかし。
内裏は五節のほどこそすどろにたどならで、見る人もをかしう覺ゆれ。主殿司などの、いろ／＼の細工を、物忌のやうにて、彩色つけたるなども、めづらしく見ゆ。清涼殿の

の札附けた
る様にて
色ふし一色
節、晴の場
合
つかさまさ
れと云々
昇官の令類
りに來るの
義ならん、
當時の童謠
などにや、
まされどと
濁るは如何
うらやみあ
り一怨みあ
ひ生ず
すぢなき一
譯の分らぬ

そり橋に、もじゆひ 畚の村濃いとけざやかにて出でたるも、さまざまにつけてをかしうのみ、上
雑仕童ども、ざふしわらはべ いみじき色ふしと思ひたる、いとことわりなり。山藍日蔭など柳筥にいれ
て、かうより 冠したる男もてありく、いとをかしう見ゆ。殿上人の直衣ぬぎたれて、扇やなに
やと拍子にして、「つかさまされとしきなみぞたつ」といふ歌をうたひて、局どもの前わ
たるほどはいみじく、添ひたちたらん人の心さわぎぬべしかし。まして颯と一度に笑ひ
などしたる、いとおそろし、ぎやうじ 行事の藏人の搔練重、物よりことにきよらに見ゆ。褥など
敷きたれど、なかくえものほりるす。女房の出でたるさま譽めそしり、このごろは他
事ことはなかめり。帳臺の夜、ちやうたい 行事の藏人いと厳しうもてなして、かいつくろひ二人、童
より外は入るまじとおさへて、おも 面にくきまでいへば、殿上人など「猶これ一人ばかりは」
などのたまふ。「うらやみあり。いかでか」などかたくいふに、宮の御かたの女房二十人
ばかりおし凝りて、ことごとくしういひたる藏人何ともせず、戸をおしあけてさどめき入
れば、あきれて「いとこはすぢなき世かな」とて立てるもをかし。それにつきてぞ、か

理の立たぬ
けしき一藏
人の様子

しづきども皆入る。けしきいとねたけなり。うへもおはしまして、いとをかしと御覽じ
おはしますらんかし。わらはまひよ 童舞の夜はいとをかし。燈臺に向ひたる顔ども、いとらうたけに
をかしかりき。

名もなし一
無名といふ
琴なれば也

無名といふ琵琶の御琴を、うへの持てわたらせ給へるを、見などして、搔き鳴しなどす
と言へば、ひくにはあらず、緒などを手まさぐりにして、「これが名よ、いかにとかや」な
ど聞えさするに、「たゞいとはかなく名もなし」との給はせたるは、なほいとめでたくこ
を覺えしか。

宮の御前一
中宮
おほい一原

淑景舎などわたり給ひて、たんのものがたり 御物語のついでに、「まろがもとにいとをかしけなる笙の笛こ
そあれ。故殿の得させ給へり」との給ふを、そうづ 僧都の君の「それは隆圓にたうべ。おのれ
が許にめでたき琴侍り、それにかへさせ給へ」と申し給ふを、きよも入れ給はで、猶他
事ことをのたまふに、いらへ 答させ奉らんと數多たび聞え給ふに、なほ物のたまはねば、宮の御前
の「否かへじとおほいたるものを」との給はせけるが、いみじうをかしき事ぞ限なき。こ

本おほえに作る、おぼしの音便

聞ゆる一原本聞ゆに作る

宜陽殿の云云一西宮抄に、納殿累代御物在三宜陽殿云云、珍器とて響むる詞なるべし

半かくし云云一琵琶行

の御笛の名を僧都の君もえ知り給はざりければ、たどうらめしとぞおほしたる。これは職の御曹司におはしましよ時の事なり。うへの御前に、いなかへじといふ御笛のさふらふなり。御前に侍ふ者どもは、琴も笛も皆めづらしき名つきてこそあれ。琵琶は立象、牧馬、井上、渭橋、無名など、また和琴なども、朽目、鹽竈、二貫などぞ聞ゆる。水龍、小水龍、宇多法師、釘打、葉二、なにくれと多く聞えしかど忘れにけり。宜陽殿の一の棚にといふことぐさは、頭中將こそしたまひしか。うへの御局の御簾の前にて、殿上人日ひと日、琴、笛吹き遊びくらして、まかで別るよほど、まだ格子をまるらぬに、おほとなぶらをさし出でたれば、戸の開きたるがあらはなれば、琵琶の御琴をたどぎまにもたせ給へり。紅の御衣のいふも世の常なる、袷又はりたるも数多たてまつりて、いと黒くつややかなる御琵琶に、御衣の袖をうちかけて、挿へさせ給へるめでたきに、そばより御額のほど白くけざやかにて、僅に見えさせ給へるは、警ふべき方なくめでたし。近く居給へる人にさし寄りて、「半かくしたりけんも、え

の詞

心地もなきを一琵琶行など知りもしない癖に

井手の中將一物語中の人物などにや、未詳

ことばに一詞書の様に

はやう云々一元より糸

かうはあらざりけんかし。それはたど人にこそありけめ」といふを聞きて、心地もなきを、わりなく分け入りて啓すれば、笑はせ給ひて、「われは知りたりや」となん仰せらるよと傳ふるもをかし。

御乳母の大輔の、けふ日向へくだるに、賜はする扇どもの中に、片つかたには、日いと花やかにさし出でて旅人のある所、井手の中將の館などいふさまいとをかしう書きて、今片つかたには、京のかた雨いみじう降りたるに、ながめたる人などかきたるに、

あかねさす日にむかひても思ひいでよ都は晴れぬながめすらんと

ことばに御手づから書かせ給ひし、あはれなりき。さる君をおき奉りて、遠くこそえいくまじけれ。

ねたきもの

これよりやるも、人のいひたる返しも、書きて遣りつる後、文字一つ二つなど思ひなほしたる。頼の物ぬふに、縫ひはてつと思ひて針を抜きたれば、はやうしりを結ばざりけ

の尻結ばで
ありき

ふれあそび
—戯れ遊び
なり、一説
鬼事の類

弓長—左の
身頃

裏を見ざら
ん云々—裏
を見ずして
縫違へし人
の云々

り。又かへさまに縫ひたるもいとねたし。

南の院みなみゐんにおはします頃、西の對たいに殿のおはします方に宮もおはしますせば、寢殿しんでんに集りて、さうぐしければ、ふれあそびをし、渡殿わたどのに集り居などしてあるに、「これ只今とみのものなり、誰もく集りて、時かはさず縫ひて参らせよ」とて平縦ひらなみの御衣たんのを給はせられたば、南面みなまたもとに集り居て、御衣たんの片身かたみづつ、誰か疾さく縫ひ出づると挑みつゝ、近くも向はず縫ふさまもいと物狂ものぐるほし。命婦みやうぶの乳母めのごいと疾さく縫ひはててうち置きつる。弓長ゆだげのかたの御身を縫ひつるが、そむきさまなるを見つせず、とぢめもしあへず、惑まどひ置きて立ちぬるに、御背たんせ合せんとすれば、早う違たがひにけり。笑ひのよしりて、「これ縫ひ直せ」といふを、「誰があしう縫ひたりと知りてか直さん、綾あやなどならばこそ、裏を見ざらん縫ひたがへ人のけになほさめ。無紋むもんの御衣たんのなり。何をしるしにてか直す人誰かあらん。たゞまだ縫ひ給はざらん人に直させよ」とて聞きも入れねば、「さいひてあらんや」とて、源少納言げんせうなごん、新中納言しんちゆうなごんなど、いひ直し給ひし顔見やりて居たりしこそをかしかりしか。これはよさりの

知らん—知
れ

よろしき人
—相當な人
せめて之を
制止すべき
男

身じくり出
づ—身じろ
き出づ、女
のすれたる
さまなり

ほらせ給はんとて、「疾さく縫ひたらん人を思ふと知らん」と仰せられしか。

見すまじき人に、外へ遣りたる文取ふみり違たがへて持て行きたる、ねたし。「けに過ちてけり」とはいはで、口かたうあらがひたる、人目をだに思はずば、走りもうちつべし。おもしろき萩薄はぎすくなどを植ゑて見るほどに、長櫃ながびつもたるもの、鋤ひきなど提ひきけて、たゞほりに掘りていぬるこそ、佗わびしうねたかりけれ。よろしき人などのある折は、さもせぬものを、いみじう制せいすれど「唯すこし」などいひていぬる、いふがひなくなたし。受領うりやうなどの來て無禮なれいに物いひ、さりとて我をばいかどと思ひたるけはひに、いひ出でたる、いとねたけなり。見すまじき人の、文を引き取りて、庭におりて見たてる、いとわびしうねたく、追ひて行けど、簾すの許もとにとまりて見るこそ、飛びも出でぬべき心地すれ。すゞろなる事腹だちて、同じ所にも寢ず、身じくり出づるを、忍びて引きよすれど、わりなく心ことなれば、あまりになりて、人も「さはよかんなり」と怨うらじて、かいくどみて臥しぬる後、いと寒き折などに、唯ひとへ衣ぎよばかりにて、あやにくがりて、大かた皆人も寢たるに、さすがに起き居

起き居たら
ん怪しくて
—起きて居
らんも變に
て

おなじ事し
たる—繰言
いひたる
かなし—い
とし、可愛
し

心一つをや
りて—自慢
して、大得

たらん怪しくて、夜の更くるまよに、ねたく起きてぞいぬべかりけるなど思ひ臥したるに、奥にも外にも物うちなりなどして恐しければ、やをらまろび寄りて衣ひきあぐるに、虚寐したるこそいとねたけれ。「猶こそこはがり給はめ」などうちいひたるよ。

かたはらいたきもの

客人などにあひて物いふに、奥の方にうち解けごと人のいふを、制せで聞く心地。思ふ人のいたく酔ひておなじ事したる。聞きたるをも知らで人のうへいひたる。それは何ばかりならぬつかひ人なれど、かたはらいたし。旅だちたる所ちかき所などにて、下衆どものざれかはしたる。にくけなる兒を、おのれが心地にかなしと思ふまよに、うつくしみあそばし、これが聲の眞似にていひける事など語りたる。才ある人の前にて、才なき人の物おほえがほに人の名などいひたる。殊によしとも覺えぬわが歌を人に語りきかせて、人の譽めし事などいふもかたはらいたし。人の起きて物語などする傍に、あさましう打ちとけて寐たる人。まだ音も弾きとよのへぬ琴を、心一つをやりて、さやうのかた

意にて

いとどしう
—一本いと
とうに作る
疾うに也
あさましき
—驚きあき
る

どう—才を
入るる筒

賭弓—正月
十八日天子
弓場殿に出
御ありて弓
を御覽する
式

知りつる人の前にて弾く。いとどしう住まぬ聲の、さるべき所にて鼻にあひたる。

あさましきもの

指櫛みがくほどに、物にさへて折れたる。車のうちかへされたる。さるおほのかなる物は、ところせく久しくなどやあらんとこそ思ひしか。たゞ夢の心地してあさましうあやなし。人のために恥しき事、つよみもなく、兒も大人もいひたる。かならず來なんと思ふ人を待ち明して、曉がたに、唯いさよか忘れて寐入りたるに、鳥のいと近くかうと鳴くに、うち見あげたれば、晝になりたるいとあさまし。てうばみにどう取られたる。無下に知らず、見ず、きかぬ事を、人のさし向ひて、あらがはずべくもなくいひたる。物うちこぼしたるもあさまし。賭弓にわなよくわなよく久しうありてはづしたる矢の、もて離れてことかたへ行きたる。

くちをしきもの

節會、佛名に雪ふらで、雨のかき暮し降りたる。節會、さるべきをりの、御物忌に當りた

いとなみー
經營して

このもしう
こぼれ出で
てー衣裳な
ど好ましく
車よりこぼ
れ出でて

塗籠ー周圍
を壁にして
妻戸より出
入するやう
に造れる所

る。いとなみいつしかと思ひたる事の、さはる事出で来て俄にとまりたる。いみじうす
る人の、子うまで年ごろ具したる。あそびをもし、見すべき事もあるに、かならず來なん
と思ひて呼びに遣りつる人の、さはる事ありてなどいひて來ぬ、くちをし。男も女も宮
仕所などに、同じやうなる人、諸共に寺へまうで、物へも行くに、このもしうこぼれ出
でて、用意はけしからず、あまり見苦しとも見つべくはあらぬに、さるべき人の、馬に
ても車にても行きあひ見ずなりぬる、いとくちをし。わびては、すきくしからん下衆
などにて、人に語りつべからんにてもがなと思ふも、けしからぬなめりかし。
五月の御精進のほど職におはしますに、塗籠の前、二間なる所を、殊にしつらひしたれ
ば、例ざまならぬもをかし。朔日より雨がちにて曇りくらす。「つれづれなるを、杜鵑の
聲たづねありかばや」といふを聞きて、われもくくと出でたつ。「賀茂の奥になにがしと
かや、七夕の渡る橋にはあらで、にくき名ぞ聞えし。そのわたりになん日ごとに鳴く」と
人の言へば、「それは鯛なり」と答ふる人もあり。そこへとて、五日のあした、宮づかさ

五月雨はー
五月雨の時
には

いへばいな
ー一本いへ
どいまとあ
り、いへど
は聞きも入
れずに接す
いまは今し
ばし侍と
中宮の仰な
り

手結ー乗馬
の射手二人
づつ組合ひ
て射る事

車の事いひて、北の陣より、「五月雨はとがめなきものぞ」とて、さしよせて四人ばかり
ぞ乗りて行く。うらやましがりて、「今一つして同じくば」などいへば、「いな」と仰せら
るれば、聞きも入れず、なさけなきさまにて行くに、馬場といふ所にて人多くさわ
ぐ。「何事するぞ」と問へば、「手結にて真弓射るなり。しばし御覽じておはしませ」とて
車止めたり。「右近の中將みな著き給へる」といへど、さる人も見えす。六位などの立ち
さまよへば、「ゆかしからぬことぞ、はやく過ぎよ」とて行きもて行けば、道も祭のころ
思ひ出でられてをかし。かういふ所には、明順朝臣の家あり。そこもやがて見んといひ
て車よせておりぬ。田舎だち事そぎて、馬の繪書きたる障子、網代屏風、三稜草簾な
ど、殊更に昔の事を寫し出でたり。屋のさまもはかなだちて、端近くあさはかなれど、を
かしきに、けにぞかしがましと思ふばかりに鳴きあひたる杜鵑の聲を、くちをしう御前
に聞しめさず、さばかり慕ひつる人々にもなど思ふ。所につけては、かよる事をなん見
るべきとて、稻といふもの多く取り出でて、わかき女どものきたなけならぬ、そのわたり

くるべきもの一くるべきといふもの、和名抄の、和名抄蠶糸具に、反轉久流閉枳、糸繰器なるべしあるもなど云々ある物何にても出せと責めて云々

の家のむすめ、女などひきりて来て、五六人してこかせ、見も知らぬくるべきもの二人してひかせて、歌うたはせなどするを、珍しくて笑ふに、杜鵑の歌よまんなどしつる、忘れぬべし。唐繪にあるやうなる懸盤などして物くはせたるを、見いるよ人なければ、家あるじ「いとわろくひなびたり。かゝる所に来ぬる人は、ようせずばあるもなど責め出してこそ参るべけれ。無下にかくてはその人ならず」などいひてとりはやし、「この下蔵は手づから摘みつる」などいへば、「いかで女官などのやうに、つきなみてはあらん」などいへば、とりおろして、「例のはひぶしに習はせ給へる御前たちなれば」とて、とりおろしまかなひ騒ぐほどに、「雨ふりぬべし」といへば、急ぎて車に乗るに、「さてこの歌は、こゝにてこそ詠まめ」といへば、「さばれ道にても」などいひて、卯の花いみじく咲きたるを折りつと、車の簾傍などに長き枝を葺き指したれば、たゞ卯花重をこゝに懸けたるやうにぞ見えける。供なる男どもいみじう笑ひつと、網代をさへつきうがちつと、「こゝまだし、こゝまだし」とさし集むなり。人もあはなんと思ふに、更にあやしき

侍從殿一恒
徳公六男公
信なり

間擴げて一
著物の前な
どはだけた
る様にや、
一説室を取
片付けて
しげく一
一本しげし
しげしに作
る
うへもなく
一屋根もな

法師、あやしのいふがひなき者のみ、たまさかに見ゆる、いとくちをし。近う來ぬれば、「さりとともいとかうて止まんやは。この車のさまをだに人に語らせてこそ止まめ」とて、一條殿の許にとどめて、「侍從殿やおはす、杜鵑の聲聞きて、今なんかへり侍る」といはせたる。使「只今まるる。あが君くとなんの給へる。さぶらひに間擴げて、指貫たてまつりつ」といふに、待つべきにもあらずとて、はしらせて、土御門さまへやらするに、いつの間にか装束しつらん、帯は道のまゝにゆひて、しげくと追ひくる。供に、侍、雑色、ものはかで走るめる。とくやれどいと忙しくて、土御門にきつきぬるにぞ、喘ぎ惑ひておはして、まづこの車のさまをいみじく笑ひ給ふ。「うつと人の乗りたるとなん更に見えぬ。猶おりて見よ」など笑ひ給へば、「供なりつる人どもも興じ笑ふ。「歌はいかにか、それ聞かん」とのたまへば、「今御前に御覽せさせてこそは」などいふ程に、雨まことに降りぬ。「などか他御門のやうにあらで、この土御門しもうへもなく造りそめけんと、今日こそいとにくけれ」などいひて、「いかで歸らんずらん。こなたさまは唯後れじ

あう一本
あくに作る
味歎の語か
又は彼方様
の義ならん

儀式一本
儀式だち又
は儀式に
作る

と思ひつるに、人目も知らず走られつるを、あう往かんこそいとすさまじけれ」とのたまへば、「いざ給へかし、うちへ」などいふ。「それも烏帽子にてはいかでか」とりに遣り給へ」などいふに、まめやかにふれば、笠なき男ども、唯ひきにひき入れつ。一條より笠を持てきたるをさよせて、うち見かへりうち見かへり、このたびはゆるくと、物憂けにて、卯の花ばかりを取りおはするもをかし。さて参りたれば、ありさまなど問はせ給ふ。うらみつる人々、怨じ心うがりながら、藤侍従、一條の大路走りつるほど語るにぞ、皆笑ひぬる。「さていづら歌は」と問はせ給ふ。かうくと啓すれば、「くちをしの事や。うへ人などの聞かんに、いかでかをかしき事なくてあらん。その聞きつらん所にて、ふとこそよまましたか。あまり儀式ことざめつらんぞ怪しきや。こよにてもよめ。いふかひなし」などのたまはすれば、けにと思ふに、いとわびしきを、いひ合せなどする程に、藤侍従の、ありつる卯の花につけて、卯の花の薄様に、
ほとよぎすなく音たづねに君ゆくときかば心をそへもしてまし

おろしにお
ろす一格子
を也
くらくなり
ぬ一夕暮に
なりたり

どうじて
眷註動轉し
ての心とあ
れど如何、
同じてにて
一同申合せ
ての義か、
一説に、日
なりと、う

かへしまつらんなど、局へ硯とり遣れば、「たどこれして疾くいへ」とて、御硯の蓋に紙など入れて賜はせられたれば、「宰相の君かきたまへ」といふを、「なほそこに」などいふほどに、かきくらし雨降りて、雷もおどろおどろしう鳴りたれば、物も覺えず、唯おろしにおろす。職の御曹子は、薙をぞ御格子にまわり渡し感ひしほどに、歌のかへりごとも忘れぬ。いと久しく鳴りて、少し止むほどはくらくなりぬ。只今なほその御返事たてまつらんとて、取りかよるほどに、人々上達部など、雷の事申しにまわり給ひつれば、西面に出でて物など聞ゆるほどにまぎれぬ。人はた、「さしてえたらん人こそ知らめ」とてやみぬ。「大かたこの事に宿世なき日なり、どうじて、今はいかでさなん往きたりしとだに人に聞かせじ」などぞ笑ふを、「今もなどそれ往きたりし人どものいはざらん。されどもさせじと思ふにこそあらめ」と物しげに思しめしたるもいとをかし。「されど今はすさまじくなりにて侍るなり」と申す。「すさまじかるべき事かは」などのたまはせしかば、やみにき。二日ばかりありて、その日の事などいひ出づるに、宰相の君、「いかにぞ手づか

じて、今は云々とせずうじは慍じ又は倦じ也この説に従ふ時は括弧の附け方を改むべし

うけばりたる一憚る所なし、一本うけたまはりたりに作る、我意を迎へたる哉の義
歌よむと云云一清少は深養父の孫元輔の子

ら折りたるといひし下蔵は」とのたまふを聞かせ給うて、「思ひ出づることのさまよ」と笑はせ給ひて、紙のちりたるに、

したわらびこそこひしかりけれ

とかよせ給ひて、「もとといへ」と仰せらるゝもをかし。

ほととぎすたづねてきよし聲よりも

と書きて参らせたれば、「いみじううけばりたりや。かうまでだに、いかで杜鵑の事をかけつらん」と笑はせ給ふも恥しながら、「何か、この歌すべて詠み侍らじとなん思ひ侍るものを、物のをりなど人のよみ侍るにも、よめなど仰せらるれば、えさぶらふまじき心地なんし侍る。いかでかは、文字の數知らず、春は冬の歌をよみ、秋は春のをよみ、梅のをりは菊などをよむ事は侍らん。されど歌よむといはれ侍りしすゑぐは、少し人にもまさりて、そのをりの歌はこれこそありけれ、さはいへどそれが子なればなどいはれたらんこそ、かひある心地し侍らめ。露とり分きたるかたもなくて、さすがに歌がまし

内大臣一伊周公

けぎよう一きつぱりと

く、われはと思へるさまに最初に詠みいで侍らんなん、なき人のためいとほしく侍る」などまめやかに啓すれば、笑はせ給ひて、「さらばたゞ心にまかす。われは詠めともいはじ」とのたまはすれば、「いと心やすくなり侍りぬ。今は歌のこと思ひかけ侍らじ」などいひてあるころ、庚申させ給ひて、内大臣殿、いみじう心まうけさせ給へり。夜うち更くるほどに題出して、女房に歌よませ給へば、皆けしきだちゆるがし出すに、宮の御前に近くさぶらひて、物啓しなど他事をのみいふを、大臣御覽じて、「などか歌はよまで離れるたる、題とれ」とのたまふを、「さる事承りて、歌よむまじくなりて侍れば、思ひかけ侍らず」異様な事、まことにさる事やは侍る。などかは許させ給ふ。いとあるまじき事なり。よし異時は知らず、今宵はよめ」など責めさせ給へど、けぎよう聞きも入れて侍ふに、こと人ども詠み出して、よしあしなど定めらるゝほどに、いさよかなる御文を書きて賜はせたり。あけて見れば、

もとすけが後といはるゝ君しもやこよひの歌にはづれてはをる

とあるを見るに、をかしき事ぞ類なきや。いみじく笑へば、「何事ぞく」と大臣ものたまふ。

その人の後といはれぬ身なりせばこよひの歌はまづぞよままし。

「つよむ事さふらはずば、千歌なりとも、これよりぞ出でまうで來まし」と啓しつ。

御かたぐ公達上人など、御前に人多く侍へば、廂の柱によりかよりて、女房と物語して

るたるに、物をなけ賜はせたる。あけて見れば、「思ふべしやいなや、第一ならずばいか

が」と問はせ給へり。御前にて物語などする序にも、「すべて人には一に思はれずば、さ

らに何にかせん。唯いみじうにくまれ、悪しうせられてあらん。二三にては死ぬともあ

らじ、一にてをあらん」などいへば、一乗の法なりと人々わらふ事のすぢなめり。筆紙た

まはりたれば、「九品蓮臺の中には下品といふとも」と書いてまるらせたれば、「無下に思

ひ屈じにけり。いとわろし。いひそめつる事は、さてこそ有らめ」とのたまはすれ

これよりぞ
仰なくとも
こなたよ
り
一乗の法
法華經、清
少が第一の
人と思はれ
んと云ふよ
り附けし渾
名

そ思はめ」と仰せらるゝもいとをかし。

中納言殿ちゅうなごんごのまるらせ給ひて、御扇奉らせ給ふに、「隆家こそいみじき骨をえて侍れ。それを

はらせて参らせんとするを、おほろけの紙ははるまじければ、もとめ侍るなり」と申し

給ふ。「いかやうなるにかある」と問ひ聞えさせ給へば、「すべていみじく侍る。さらにま

だ見ぬ骨のさまなりとなん人々申す。まことにかばかりのは侍らざりつ」とことたかく

申し給へば、「さて扇のにはあらで海月のなり」と聞ゆれば、「これは隆家がことにして

ん」とて笑ひ給ふ。かやうの事こそ、かたはらいたき物のうちに入れつべけれど、人ご

と「な落しそ」と侍ればいかどはせん。

雨のうちには降るころ、今日も降るに、御使にて式部丞信經しきぶのじやうのぶねまるりたり。例の茵しきねさし出

したるを、常よりも遠く押し遣りてゐたれば、「あれは誰が料ぞ」といへば、笑ひて「か

かる雨にのほり侍らば足形あしがたつきて、いとふびんに汚きたなけになり侍りなん」といへば、「な

どせんぞくれうにこそはならめ」といふを、「これは御前ごまへにかしこう仰せらるゝにはあ

九品蓮臺云
云―皇后に
思はれんに
はたとひ下
品にても可
也、朗詠に、
九品蓮臺之
間雖下品
應足
ことたかく
―得意に

せんぞくれ
う―既得料

の音センジ
ヨクレウを
洗足料に云
ひかけたる
洒落
ばやう云々
一説、直
に前行に接
し時柄の
條も信經と
清少との物
語と解す、
後文立ちぬ
とあるは信
經也
手もいみじ
う云々一女
房達の評定
なり

らず、信經が足形の事を申さざらましかば、その給はざらまし」とて、かへすくひひしこそをかしかりしか。あまりなる御身ほめかなと傍いたく。「はやう皇太后宮に、ゑぬたきといひて名高き下仕なんありける。美濃守にてうせにける藤原時柄、藏人なりける時、下仕どもある所に立ち寄りて、これやこの高名のゑぬたき、などさも見えぬといひける返事に、それは時柄もさも見ゆる名なりといひたりけるな、敵に選りてもいかでかさる事はあらん。殿上人上達部までも、興ある事にの給ひける。又さりけるなめりと、今までかくいひ傳ふるは」と聞えたり。「それ又時柄がいはせたるなり。すべて題出しがらん、詩も歌もかしこき」といへば、「實にさる事あることなり。さらば題出さん、歌よみ給へ」といふに、「いとよき事、ひとつはなにせん、同じうは數多つかう奉らん」などいふほどに、御題は出でぬれば、「あなおそろし、まかりいでぬ」とて立ちぬ。「手もいみじう眞字も假字もあしう書くを、人も笑ひなどすれば、かくしてなんある」といふもをかし。

作物所云々
一説、こ
れも信經に
關する話

淑景舎一
中宮定子の妹
東宮妃

まありわた
して一残ら
ず上げて

作物所の別當するころ、誰が許にやりけるにかあらん、物の繪やうやるとて、「これがやうにつかうまつるべし」と書きたる眞字のやう、文字の世に知らずあやしきを見つけて、それが傍に、「これがまよにつかうまつらば、異様にこそあるべけれ」とて、殿上にやりたれば、人々取りて見ていみじう笑ひけるに、大腹だちてこそうらみしか。淑景舎春宮にまより給ふほどの事など、いかどはめでたからぬ事なし。正月十日にまより給ひて、宮の御方に御文などは繁う通へど、御對面などはなきを、二月十日、宮の御方に渡り給ふべき御消息あれば、常よりも御しつらひ心ことにみがきつくろひ、女房なども皆用意したり。夜半ばかりに渡らせ給ひしかば、いくばくもなく明けぬ。登華殿の東の二間に御しつらひはしたり。翌朝いと疾く御格子まよりわたして、あかつきに、殿、うへ、ひとつ御車にて参り給ひにけり。宮は御曹司の南に、四尺の屏風西東に隔てて、北向に立てて、御疊褥うち置きて、御火桶ばかりまよりたり。御屏風の南御帳の前に、女房いと多くさぶらふ。こなたにて御髪などまるるほど、「淑景舎は見奉りしや」と

紅梅の固紋
云々—中宮
の御装束也

ことよき人
—他の美し
き人、淑景
舎をいふ
うへ—道隆
の室、中宮
淑景舎の御
母貴子

問はせ給へば、「まだいかでか。積善寺供養の日、御うしろをわづかに」と聞ゆれば、「その柱と屏風とのもとによりて、わがうしろより見よ。いとつくしき君ぞ」との給はずれば、うれしくゆかしさまさりて、いつしかと思ふ。紅梅の固紋、浮紋の御衣どもに、紅のうちたる御衣、三重がうへに唯引き重ねて奉りたるに、「紅梅には濃き衣こそをかしけれ。今は紅梅は著でもありぬべし。されど萌黄などのにくければ、紅にはあはぬなり」との給はずれど、唯いとめでたく見えさせ給ふ。奉りたる御衣に、やがて御容のほひ合せ給ふぞ、なほことよき人も、かくやおはしますらんとぞゆかしき。さてるざり出でさせ給ひぬれば、やがて御屏風に添ひつきてのぞくを、「あしかめり、うしろめたきわざ」と聞えごつ人々もいとをかし。御障子の廣うあきたれば、いとよく見ゆ。うへは白き御衣ども、紅のはりたる二つばかり、女房の裳なめり、引きかけておくによりて、東面におはすれば、たゞ御衣などぞ見ゆる。淑景舎は北にすこしよりて南向におはす。紅梅どもあまた濃く薄くて、濃きあやの御衣、少しあかき蘇枋の織物の袷、萌黄

かの御かた
—淑景舎の
御方
唐廂—屋根
をそらせて
作れる廂
かたへ—半
數

の固紋のわかやかなる御衣奉りて、扇をつとさし隠し給へり。いとみじく、けにめでたく美しく見え給ふ。殿は薄色の直衣、萌黄の織物の御指貫、紅の御衣ども、御紐さして、廂の柱に後をあてて、こなたさまに向きておはします。めでたき御有様どもを、うちゑみて、例の戲言をせさせ給ふ。淑景舎の、繪に書きたるやうに、美しけにてるさせ給へるに、宮いとやすらかに、今すこしおとなびさせ給へる御けしきの、紅の御衣にほひ合せ給ひて、なほ類はいかでかと思えさせ給ふ。御手水まるる。かの御かたは宣耀殿、貞觀殿を通りて、童一人、下仕四人して持てまるる。唐廂のこなたの廊にぞ、女房六人ばかりさぶらふ。狭しとて、かたへは御おくりして皆歸りにけり。櫻の汗衫、萌黄紅梅などいみじく、汗衫長く裾引きて、取り次ぎまるらす、いとなまめかし。織物の唐衣どもこほれ出でて、すけまさの馬頭のむすめ、少將の君、北野の三位の女、宰相の君などぞ近くはある。あなをかしと見るほどに、この御かたの御手水番の采女、青末濃の唐衣、裙帶、領巾などして、おもてなどいと白くて、下仕など取り次ぎてまるるほど、これはた

まかなひの
—自分の役
目の
垣間見の人
—清少也
霞の間より
—古今に、
山櫻霞の間
よりほのか
にも見てし
人こそ戀し
かりけれ
猿樂こと—
戯れ、滑稽
所せき—窮
屈な、事々
しき

おほやけしう唐めきてをかし。御膳のをりになりて、御髪あけまるりて、藏人どもまかなひの髪あけてまるらする程に、隔てたりつる屏風も押しあけつれば、垣間見の人、かくれ蓑とられたる心地して、あかずわびしければ、御簾と几帳との中にて、柱のもとよりぞ見奉る。衣の裾裳など、唐衣は皆御簾のそとに押し出されたれば、殿の端のかたより御覽じ出して「誰そや、霞の間よりみゆるは」と咎めさせ給ふに、「少納言が、物ゆかしがりて侍るならん」と申させ給へば、「あなはづかし。かれはふるき得意を、いとにくけなる女ども持ちたりともこそ見侍れ」などのたまふ御けしき、いとしたり顔なり。あなたにも御膳まるる。「羨しく、かたぐのは皆まるりぬめり。疾くきこしめして、翁女におろしをだに給へ」など、たゞ日ひと日、猿樂ことをし給ふ程に、大納言殿、三位中將、松君も將てまるり給へり。殿いつしかと抱き取り給ひて、膝にする給へる。いとうつくし。狭き縁に、所せき日の御装束の下襲など引きちらされたり。大納言殿はものくしう漬けに、中將殿はらうくじう、いづれもめでたきを見奉るに、殿をばさるものにて、う

殿をばさる
ものにて—
殿の幸福は
云ふ迄もな
く

某が云々—
父關白の詞
なり、間も
なくば隙な
く、たえず
の義

への御宿世こそめでたけれ。御圓座など聞え給へど、「陣につき侍らん」とて急ぎ立ち給ひぬ。しばしありて、式部の丞ながしとかや、御使にまるりたれば、御膳やどりの北によりたる間に、褥さし出でて居ゑたり。御かへりは今日は疾く出させ給ひつ。まだ褥も取り入れぬほどに、東宮の御使に、ちかよりの少將まるりたり。御文とり入れて、渡殿は細き縁なれば、こなたの縁に褥さし出でたり。御文とり入れて、殿、うへ、宮など御覽じわたす。「御返はや」などあれど、頓にも聞え給はぬを、「某が見侍れば出で給はぬな」めり。さらぬをりは間もなくこれよりぞ聞え給ふなる」など申し給へば、御面はすこし赤みながら、少しうち微笑み給へる。いとめでたし。「疾く」などうへも聞え給へば、奥さまに向きて書かせ給ふ。うへ近く寄り給ひて、もろともに書かせ奉り給へば、いとどつゝましけなり。宮の御かたより、萌黄の織物の小袷袴おし出されたれば、三位中將がつけ給ふ。くるしけに思ひて立ちぬ。松君のをかすう物のたまふを、誰もくうつくしがり聞え給ふ。「宮の御子たちとて引出でたらんに、わろくは侍らじかし」などの給はする。け

さる事―皇
子御誕生、
事のの次に
なきと補ふ
べし

かしこけれ
ば―陛下の
御装束を申
立てんば畏
多ければ
いりたくぬ
―別腹の
この大納言
―伊周公

になどが、今までさる事のとぞ心もとなき。未の時ばかりに、筵道まるるといふ程もな
く、うちそよめき入らせ給へば、宮もこなたに寄せ給ひぬ。やがて御帳に入らせ給ひ
ぬれば、女房南おもてにそよめき出でぬめり。廊に殿上人いと多かり。殿の御前に宮司
召して菓子肴めさす。「人々酔はせ」などおほせらる。誠に皆ゑひて、女房と物いひかは
すほど、かたみにをかしと思ひたり。日の入るほどに起きさせ給ひて、山井の大納言召
し入れて、御うちぎまるらせ給ひて、かへらせ給ふ。櫻の御直衣に、紅の御衣のゆふば
えなども、かしこければとどめつ。山井の大納言は、いりたくぬ御兄にても、いとよく
おはすかし。にほひやかなる方は、この大納言にもまさり給へるものを、世の人は、せ
ちにいひおとし聞ゆるこそいとほしけれ。殿、大納言、山井の大納言、三位中將、藏人
頭など皆さぶらひ給ふ。宮のほらせ給ふべき御使にて、馬の内侍のすけ参り給へり。「今
宵はえ」などしぶらせ給ふを、殿聞かせ給ひて、「いとあるまじき事、はやのほらせ給へ」
と申させ給ふに、また春宮の御使しきりにある程いとさわがし。御むかへに、女房、春

まづさば云
云―中宮の
御詞

うちばし―
打橋、移橋
の約にて臨
時にいづこ
にも打渡す
橋なり

かうして云
云―かく用
事ありて参
れり

宮のなども参りて、「疾く」とそよのかし聞ゆ。「まづさば、かの君わたし聞え給ひて」と
の給はすれば、「さりともいかでか」とあるを、「なほ見おくり聞えん」などの給はするほ
ど、いとをかしうめでたし。「さらば遠きをさきに」とて、まづ淑景舎わたり給ひて、殿
などかへらせ給ひてぞ、のほらせ給ふ。道のほども、殿の御猿樂ことにいみじく笑ひて、
ほとほとうちばしよりも落ちぬべし。
殿上より梅の花の皆散りたる枝を、「これはいかじ」といひたるに、「唯はやく落ちにけ
り」と答へたれば、その詩を誦じて、黒戸に殿上人いと多く居たるを、うへの御前さか
せおはしまして、「よろしき歌など詠みたらんよりも、かゝる事はまさりたりかし。よう
いらへたり」と仰せらる。
二月つごもり、風いたく吹きて、空いみじく黒きに、雪すこしうち降りたるほど、黒戸に
主殿司きて、「かうしてさぶらふ」といへば、よりたるに、公任の君、宰相中將殿のと
あるを見れば、ふところ紙に、たど、

ことなしび
—事なしぶ
り、何でも
ない事の様
に

遅くさへ—
拙き上にも

内侍に云々
—歌に感激
してやはり
非凡の才女
なれば奏進
して内侍に
なさんと評

すこし春あることちこそすれ

とあるは、實に今日のけしきにいとよくあひたるを、これがもとは、いかがつくべからんと思ひ煩ひぬ。「誰々か」と問へば、それくといふに、皆恥しき中に、宰相中將の御答をば、いかどことなしびにいひ出でんと、心ひとつに苦しきを、御前に御覽せせん

とすれども、うへのおはしまして、おほとのごもりたり。主殿司はとくくといふ。實に遅くさへあらんはとりどころなければ、さばれとて、

そらさむみ花にまがへてちるゆきに

と、わなよくく書きてとらせて、いかど見たまふらんと思ふもわびし。これが事を聞かばやと思ふに、そしられたらば聞かじと覺ゆるを、俊賢の中將など、なほ内侍に申してなさんと定めたまひしとばかりぞ、兵衛佐中將にておはせしが語りたまひし。

はるかなるもの

千日の精進はじむる日。半臂の緒ひねりはじむる日。陸奥國へゆく人の逢阪の關こゆる

定せりと也

人々しき—
氣の利いた

なでふ事—
何といふ事

竈に云々—
せはしき例
なるが云ひ
様田舎びた
り

ほど。うまれたる兒のおとなになるほど。大般若經御讀經一人して讀み始むる。十二年

の山ごもりの始めてのほる日。

方弘はいみじく人に笑はるよものかな。親などいかに聞くらん。供にありくものども、いと人々しきを呼びよせて、「何しにかよるものにはつかはるよぞ、いかど覺ゆる」など笑ふ。物いとよくするあたりにて、下襲の色、うへのきぬなども、人よりはよくて著たる

を、「これは他人に著せばや」などいふに、實にぞ詞遣などのあやしき。里に宿直物とり

にやるに、「男二人まかれ」といふに、「二人して取りにまかりなんものを」といふに、「あ

やしの男や、一人して二人の物をばいかで持つべきぞ。一升瓶に二升は入るや」といふを、なでふ事と知る人はなけれど、いみじう笑ふ。人の使のきて「御返事疾く」といふを、「あなにくの男や、竈に豆やくべたる。この殿上の墨筆は、何者の盗みかくしたるぞ。飯酒ならばこそ、ほしうして人の盗まめ」といふを、又わらふ。女院なやませ給ふとて、御使にまゐりて歸りたるに、「院の殿上人は誰々かありつる」と人の問へば、それかれな

ど四五人ばかりといふに、「又は」と問へば、「さてはいぬる人どもぞありつる」といふを、また笑ふも、又あやしき事にこそはあらめ。「人間に寄りきて、わが君こそまづ物きこえん。まづく人のたまへる事ぞといへば、何事にかとて几帳のもとによりたれば、籠により給へといふに、五體ごめにとなんいひつる」といひて、また笑ふ。除目の中の夜、指油さしあぶらするに、燈臺とうだいのうちしきを踏みて立てるに、新しき油單なれば、つようとらへられにけり。さし歩みて歸れば、やがて燈臺はたふれぬ。襪したうづはうちしきにつきてゆくに、まことに道こそ震動したりしか。頭つき給はぬほどは、殿上てんじやうの臺盤に人もつかず。それに方弘は豆一盛を取りて、小障子のうしろにてやをら食ひければ、ひきあらはして笑はるる事ぞかぎりなきや。

道こそ云々
一歩き方の
荒々しき様
子なり

たとしへな
く一其名の

關は

逢阪の關。須磨の關。鈴鹿の關。くさだの關。白川の關。衣の關。たごこえの關は、はばかりの關と、たとしへなくこそ覺ゆれ。よこばしりの關。清見が關。みるめの關。よし

正反對なる
を、たとへ
比し難しと
いへる也

思ひ返し云
云一よしな
を由無し即
ちつまらぬ
の義に取り
なしたる洒
落

高瀬の淀に
古今六帖
に、こも枕
高瀬の淀に
刈るこもの

なよしなの關こそ、いかに思ひ返したるならんと、いと知らまほしけれ。それを勿來の關とはいふにやあらん。逢阪などをまで思ひ返したらば、佗しからんかし。足柄の關。

森は

大荒木の森。忍の森。こどひの森。木枯の森。信太の森。生田の森。うつきの森。きくだの森。いはせの森。立聞の森。常磐の森。くるべきの森。神南備の森。假寐の森。浮田の森。うへ木の森。石田の森。かうたての森といふが耳とゞまるこそあやしけれ。森などいふべくもあらず、たゞ一木あるを、何につけたるぞ。こひの森。木幡の森。卯月の晦日に、長谷寺にまうづとて、淀の渡といふものをせしかば、船に車をかき居るてゆくに、菖蒲菰などの末みじかく見えしを、取らせたれば、いと長かりける。菰つみたる船のありきしこそ、いみじうをかりしかりか。高瀬の淀には、これをよみけるな。めりと見えし。三日といふに歸るに、雨のいみじう降りしかば、菖蒲かるとて、笠のいとちひさきを著て、脛いとたかき男童などのあるも、屏風の繪にいとよく似たり。

かるとも我
は知らで頼
まむ、類歌
多し

物の音一や
はり曉の也

湯は

七久里の湯。有馬の湯。玉造の湯。

常よりもことにきこゆるもの

元三の車の音。鳥のこゑ。曉のしはぶき。物の音はさらなり。

繪にかきておとるもの

瞿麥。さくら。山吹。物語にめでたしといひたる男女のかたち。

かきまさりするもの

松の木。秋の野。山里。山路。鶴。鹿。冬はいみじくさむき。夏は世にしらすあつき。

あはれなるもの

孝ある人の子。鹿の音。よき男のわかきが御嶽精進したる。へだて居てうちおこなひたる曉のぬかなど、いみじうあはれなり。むつまじき人などの目さまして聞くらん思ひやり、まうづる程のありさま、いかならんとつよしみたるに、平にまうでつきたるこそい

へだて居て
一家の者と
は隔り居り
て

人わろき一
體裁懸し
やつれて一
姿をやつし
て
しろき一白
き直衣、又
は新しき意
にて下につ
づくべきに
や

とめでたけれ。烏帽子のさまなどぞ少し人わろき。なほいみじき人と聞ゆれど、こよなくやつれてまうづとこそは知りたるに、右衛門佐信賢は「あぢきなきことなり。たゞ清き衣を著てまうでんに、なでふ事かあらん。必よもあしくてよと、御嶽のたまはじ」とて、三月晦日に、紫のいと濃き指貫、しろき、青山吹のいみじくおどろくしきなどにて、隆光が主殿亮なるは、青色の紅の衣、摺りもどろかしたる水干袴にて、うちつゞき詣でたりけるに、歸る人もまうづる人も、珍しく怪しき事に、「すべてこの山道に、かよる姿の人見えざりつ」とあさましがりしを、四月晦日に歸りて、六月十餘日の程に、筑前の守うせにしかはりになりにしこそ、實にいひけんには違はずもと聞えしか。これはあはれなる事にはあらねども、御嶽のついでなり。九月三十日、十月一日の程に、唯あるかなきかに聞きつけたる蟋蟀の聲。鶏の子いだきて伏したる。秋深き庭の浅茅に、露のいろいろ玉のやうにて光りたる。川竹の風に吹かれたる夕ぐれ。曉に目覺したる夜なども、すべて思ひかはしたる若き人の中に、せくかたありて心にしも任せぬ。山里の雪。男も女

せくかた一
障害

黒き衣一襲
服、一説古
き衣

も清けなるが黒き衣著たる。二十六七日ばかりの曉に、物語して居明して見れば、あるかなきかに心細けなる月の、山の端近く見えたるこそいとあはれなれ。秋の野。年うち過したる僧たちの行したる。荒れたる家に葎はひかより、蓬など高く生ひたる庭に、月の隈なく明き。いと荒うはあらぬ風の吹きたる。

樽階一荒木
のまゝ皮も
はがすして
作れる階

正月に寺に籠りたるはいみじく寒く、雪がちにこほりたるこそをかしけれ。雨などの降りぬべき景色なるはいとわろし。初瀬などに詣でて、局などするほどは、樽階のもとに車引きよせて立てるに、帯ばかりしたる若き法師ばらの、履といふものをはきて、聊つつみもなく下り上るとて、何ともなき經のはしうち読み、俱舎の頌を少しいひつゞけありくこそ、所につけてをかしけれ。わが上るはいとあやふく、傍によりて高欄おさへてゆくものを、たゞ板敷などのやうに思ひたるもをかし。「局したり」などいひて、沓ども持てきておろす。衣かへさまに引きかへしなどしたるもあり。裳唐衣などこはくしくさうぞきたるもあり。深沓半靴などはきて、廊のほどなど沓すり入るは、内裏わたりめき

局したり一
小僧など來
りて局の用
意なりぬと
告ぐるなる

しばし云々
—しばし待
ち給へ貴人
の云々

べし
心一信仰心
るぎ一春注
論議となす
旁注ひろぎ
に作り、て
ひろぎと續
け讀みて印
を結ぶ義と
いへり

て又をかし。内外など許されたる若き男ども、家の子など、又立ちつゞきて、「そこもとはおちたる所に侍るめり。あがりたる」など教へゆく。何者にかあらん。いと近くさし歩み、さいだつものなどを、「しばし、人のおはしますに、かくはまじらぬわざなり」などいふを、實にとて少し立ち後るゝもあり。又聞きも入れず、われまづ疾く佛の御前にとゆくもあり。局にゆくほど、人の居並みたる前を通り行けば、いとうたてあるに、犬ふせぎの中を見入れたる心地、いみじく尊く、などで月頃もまうです過しつらんとて、まづ心もおこさる。御燈常燈にはあらで、うちに又人の奉りたる、おそろしきまで燃えたるに、佛のきらくと見え給へる、いみじくたふとけに、手ごとに文を捧けて、禮盤に向ひてろぎ誓ふも、さばかりゆすりみちて、これはと取り放ちて聞きわくべくもあらぬに、せめてしほり出したるこゑの、さすがに又紛れず。「千燈の御志は、なにがしの御ため」と僅に聞ゆ。帶うちかけて拜み奉るに、「こよにかうさぶらふ」といひて、櫓の枝を折りて持てきたるなどの尊きなども猶をかし。犬ふせぎのかたより法師よりきて、「い

いぬるすな
はち―立去
るとすぐ又
引返し來て

鼻など云々
―忍びて泣
く様也、鼻
はかみたる
に係る客語

とよく申し侍りぬ。幾日ばかり籠らせ給ふべき」など問ふ。「しかくの人こもらせ給へり」などいひ聞かせていぬるすなはち、火桶菓子など持てきつゝ貸す。半挿に手水など入れて、盥の手もなきなどあり。「御供の人はかの坊に」などいひて呼びもて行けば、かはりがはりぞ行く。誦經の鐘の音、わがななりと聞けば、たのもしく聞ゆ。傍によろしき男の、いと忍びやかに額などつく。立居のほども心あらんと聞えたるが、いたく思ひ入りたる氣色にて、いも寝ず行ふこそいとあはれなれ。うちやすむ程は、經高くは聞えぬほどに讀みたるも尊けなり。高くうち出させまほしきに、まして鼻などを、けざやかに聞きにくくはあらで、少し忍びてかみたるは、何事を思ふらん、かれをかなへばやとこそ覺ゆれ。日ごろこもりたるに、晝は少しのどかにぞ、早うはありし。法師の坊に、男ども童などのゆきてつれづれなるに、たゞ傍に貝をいと高く、俄に吹き出したるこそおどろかるれ。清けなるたて文など持てたる男の、誦經の物うち置きて、堂童子など呼ぶ聲は、山響きあひてきらしくしう聞ゆ。鐘の聲ひどきまさりて、いづこならんと聞く程に、

たゞなる折
―平素

ほうと―立
つる音、卷
きて立つる
なり

これならん
―一本たれ
ならん

やんごとなき所の名うちいひて、「御産たひらかに」など教化などしたる、すどろにいかならんと覺束なく念ぜらるゝ。これはたゞなる折の事なり。正月などには、唯いと物さわがしく、物のぞみなどする人の隙なく詣づる見るほどに、行もしやられず。日のうち暮るゝにまうづるは、籠る人なり。小法師ばらの、もたぐべくもあらぬ屏風などの高さ、いとよく進退し、疊などほうとたておくと見れば、たゞ局に出でて、犬ふせぎに簾垂をさらりとかくるさまなどぞいみじく、しつけたるは安けなり。そよくとあまたおりて、大人だちたる人の、いやしからず、忍びやかなる御けはひにて、かへる人にやあらん。「そのうちあやふし。火の事制せよ」などいふもあり。七つ八つばかりなる男子の、愛敬つきおごりたる聲にて、さぶらひ人呼びつけ、物などいひたるけはひもいとをかし。また三つばかりなるちこのねおびれて、うちしはぶきたるけはひもうつくし。乳母の名、母などうち出でたらんも、これならんといと知らまほし。夜ひと夜、いみじうのよしりおこなひあかす。寐も入らざりつるを、後夜などはてて、少しうちやす

み寐ぬる耳に、その寺の佛經を、いとあらくしう、高くうち出でて讀みたるに、わざとたふとしともあらず。修行者だちたる法師のよむなめりと、ふとうち驚かれて、あはれに聞ゆ。また夜などは、顔知らで、人々しき人の行ひたるが、青鈍の指貫のはたばりたる、白き衣どもあまた著て、子どもなめりと見ゆる若き男の、をかしううちさうぞきたる、童などして、さぶらひの者ども、あまたかしまり圍遶したるもをかし。かりそめに屏風たてて、額などすこしつくめり。顔知らぬは誰ならんといとゆかし。知りたるは、さなめりと見るもをかし。若き人どもは、とかく局どもなどの邊にさまよひて、佛の御かたに目見やり奉らず、別當など呼びて、打ちさよめき物語して出でぬる、えせものとは見えすかし。二月晦日、三月朔日ごろ、花盛に籠りたるもをかし。清けなる男どもの、忍ぶと見ゆる二三人、櫻青柳などをかしうて、くよりあけたる指貫の裾も、あてやかに見なさるよ、つきづきしき男に、装束をかしうしたる餌袋いだかせて、小舎人童ども、紅梅萌黃の狩衣に、いろくのきぬ、摺りもどろかしたる袴など著せたり。花

餌袋—もと鷹狩などの用なれど此

頃は菓子など入れたるにや
さぞかし—其人ぞかし

こころづきなき—氣にくはぬ、此條は前後の條と重複せり
衍文にや

など折らせて、侍めきて、細やかなるものなど具して、金鼓うつこそをかしけれ。さぞかしの見ゆる人あれど、いかでかは知らん。打ち過ぎていぬるこそ、さすがにさうくしけれ。「氣色を見せましものを」などいふもをかし。かやうにて寺ごもり、すべて例ならぬ所に、つかふ人のかぎりしてあるは、かひなくこそ覺ゆれ。猶おなじほどにて、一つ心にをかしき事も、さまざまいひ合せつべき人、かならず一人二人、あまたも誘はまほし。そのある人の中にも、口をしからぬもあれども、目馴れたるなるべし。男などもさ思ふにこそあめれ。わざと尋ね呼びもてありくめるはいみじ。

こころづきなきもの

祭、御禊など、すべて男の見る物見車に、たゞ一人乗りて見る人こそあれ。いかなる人にかあらん。やんごとながらずとも、わかき男どもの物ゆかしと思ひたるなど、引きのせて見よかし。すきかけに唯一人かどよひて、心ひとつにまもり居たらんよ、いかばかり心せばく、けにくきならんとぞ覺ゆる。物へもいき、寺へもまうづる日の雨。つかふ

はりむしろ
— 雨覆の筵

人などの、「我をばおぼさず、某こそ只今時の人」などいふをほのきよたる。人よりは少しにくしと思ふ人の、おしはかりごとうちし、すどろなる物怨し、われさかしがる。
わびしけに見ゆるもの

六七月の午未の時ばかりに、穢けなる車にえせ牛かけて、ゆるがし行くもの。雨ふらぬ日はりむしろしたる車。降る日はりむしろせぬも。年老いたる乞兒。いと寒きをりも、暑きにも、下種女のなりあしきが子を負ひたる。ちひさき板屋の黒うきたなけなるが、雨にぬれたる。雨のいたく降る日、ちひさき馬に乗りて前駆したる人の、かうぶりもひしけ、袍も下襲もひとつになりたる。いかにわびしからんと見えたり。夏はされどよし。

あつけなるもの

出居の少將
— 恒例の儀式に弓箭を執り主上出御に警蹕する役

隨身の長の狩衣。衲の袈裟。出居の少將。いみじく肥えたる人の髪おほかる。琴の袋。六七月の修法の阿闍梨。日中の時など行ふ。又おなじころの銅の鍛冶。
はづかしきもの

いさとき
— 目ざとき

男の心のうち。いさとき夜居の僧。密盗人のさるべき隈に隠れ居て、いかに見るらんを、誰かはしらん、暗きまざれに、懐に物引き入るゝ人もあらんかし。それは同じ心にをかしとや思ふらん。夜居の僧は、いとはずかしきものなり。若き人の集りては、人のうへをいひ笑ひ、誇り憎みもするを、つくぐと聞き集むる心のうちもはづかし。「あなうたて、かしがまし」など、御前近き人々の物けしきばみいふを聞き入れず、いひくつてのはては、うち解けてねぬる後もはづかし。男はうたて思ふさまならず、もどかしう心づきなき事ありと見れど、さし向ひたる人をすかし、たのむるこそ恥しけれ。まして情あり、このましき人に知られたるなどは、愚なりと思ふべくもてなさずかし。心のうちののみもあらず。又皆これが事はかれに語り、かれが事はこれに言ひきかすべか、めるを、我が事をば知らで、かく語るをば、こよなきなめりこ思ひやすらんと思ふこそ恥しけれ。いであはれ、又あはじと思ふ人に逢へば、心もなきものなめりと見えて、恥しくもあらぬものぞかし。いみじくあはれに、心苦しけに見すてがたき事などを、いさよか何事と

たのむる—
頼ましむ、
契る

もどき—非
難し
たゞにもあ
らず—懷妊

も思はぬも、いかなる心ぞとこそあさましけれ。さすがに人のうへをばもどき、物をいとよくいふよ。ことにたのもしき人もなき宮仕の人などをかたらひて、たゞにもあらずなりたる有様などをも、知らずやみぬるよ。

むごくなるもの

うしろ手—
うしろ姿

潮干の瀾なる大なる船。髪みじかき人の、かづらとりおろして髪けづるほど。大なる木の風に吹きたふされて、根をさよけてよこたはれふせる。相撲のまけているうしろ手。えせものの従者かんがふる。翁の髻はなちたる。人の妻なッどの、すごろなる物怨じして隠れたるを、かならず尋ねさわがんものと思ひたるに、さしも思ひたらず、ねたけにもてなしたるに、さてもえ旅だち居たらねば、心こ出できたる。狛犬しく舞ふもの、おもしろがりはやり出でて踊る足音。

心と—己が
心から
狛犬しく—
狛犬めき
て、狛犬は
今の獅子舞

修法は、佛眼眞言など讀みたてまつりたる、なまめかしうたふこし。

はしたなきもの

はしたなき
—きまりの
悪い

他人を呼ぶに、我もこてさし出でたるもの。まして物とらするをりはいこど。おのづから人のうへなどうち言ひ誇りなどもしたるを、幼き人の聞き取りて、その人のあるまへにいひ出でたる。あはれなる事など人のいひてうち泣くに、實にいとあはれとは聞きながら、涙のふつと出でこぬ、いとはしたなし。泣顔つくり、けしきことになせど、いとかひなし。めでたき事を聞くには、又すごろに唯いできにこそ出でくれ。八幡の行幸のかへらせ給ふに、女院御棧敷のあなたに御輿を留めて、御消息申させ給ひしなど、いみじくめでたく、さばかりの御有様にて、かしこまり申させ給ふが、世に知らずいみじきに、誠にこぼるれば、化粧したる顔も皆あらはれて、いかに見苦しかるらん。宣旨の御使にて、齊信の宰相中將の御棧敷に参り給ひしこそ、いとをかしう見えしか。たゞ隨身四人、いみじうさうぞきたる、馬ぞひのほそうしたてたるばかりして、二條の大踏、廣うきよらにめでたきに、馬をうちはやして急ぎ参りて、少し遠くよりおりて、そばの御簾の前に侍ひ給ひし、院の別當ぞ申し給ひし。御返し承りて、又はしらせ歸り参り給ひ

こぼるれば
—涙が也

申し—取次
ぎて啓し

て、御輿のもとにて奏し給ひし程、いふも愚なりや。さてうち渡らせ給ふを見奉らせ給ふらん女院の御心、思ひやりまらするは、飛び立ちぬべくこそ覺えしか。それには長泣をして笑はるゝぞかし。よろしききはの人だに、なほこの世にはめでたきものを、かうだに思ひまらするもかしこしや。

そのつぎつぎさらぬ人一人其弟、及び兄弟ならぬ人々
宮の大夫殿

關白殿の黒戸より出でさせ給ふとて、女房の廊に隙なくさぶらふを、「あないみじの御許だちや 翁をばいかにをこなりと笑ひ給ふらん」と分け出でさせ給へば、戸口に人々の、色々の袖口して御簾を引き上げたるに、權大納言殿、御沓取りてはかせ奉らせ給ふ。いとものくしうきよけに、よそほしけに、下襲の裾ながく、所狭くさぶらひ給ふ。まづあなめでた、大納言ばかりの人に沓をとらせ給ふよと見ゆ。山井の大納言、そのつぎつぎさらぬ人々、くろきものをひきちらしたるやうに、藤壺のへいのもとより、登華殿の前まで居並みたるに、いとほそやかにいみじうなまめかしうて、御太刀など引きつくるひやすらはせ給ふに、宮の大夫殿の、清涼殿の前にたよせ給へれば、それは居させ給

一 道長
居させ一 下座し
くすしがり
一 奇特に

ふまじきなめりと見る程に、少し歩み出でさせ給へば、ふと居させ給ひしこそ、猶いかばかりの昔の御行のほどならんと見奉りしこそいみじかりしか。中納言の君の忌の日とて、くすしがり行ひ給ひしを、「たべ、その珠數しばし。行ひてめでたき身にならんとか」とて集りて笑へど、なほいとこそめでたけれ。御前に聞しめして、「佛になりたらんこそ、これよりは勝らめ」とて打ち笑ませ給へるに、又めでたくなりてぞ見まらする。大夫殿の居させ給へるを、かへすく聞ゆれば、「例の思ふ人」と笑はせ給ふ。ましてこの後の御ありさま、見奉らせ給はましかば、理とおほしめされなまし。
九月ばかり、夜一夜降りあかしたる雨の、今朝はやみて、朝日の花やかにさしたるに、前栽の菊の露、こほるばかりぬれかよりたるも、いとをかし。透垣、羅文、薄などの上に、かいたる蜘蛛の巢の、こほれ残りて、所々に糸も絶えさまに雨のかよりたるが、白き玉を貫きたるやうなるこそ、いみじうあはれにをかしけれ。すこし日たけぬれば、萩などのいとおもけなりつるに、露の落つるに枝のうち動きて、人も手ふれぬに、ふと上様へあ

羅文一立葩
板垣などの
上にの如
く細き木を
菱形に組み
たるもの

がりたる、いみじういとをかしといひたる。こと人の心地には、つゆをかしからじと思ふこそ又をかしけれ。

七日の若菜を、人の六日にもてさわぎとりちらしなどするに、見も知らぬ草を、子供の持てきたるを、「何とか是をばいふ」といへど、頼にもいはず。「いざ」など此彼見合せて、「みよな草となんいふ」といふ者のあれば、「うべなりけり、聞かぬ顔なるは」など笑ふに、又をかしけなる菊の生ひたるを持てきたれば、

つめどなほみよな草こそつれなけれあまたしあれば菊もまじれり

といはまほしけれど、聞き入るべくもあらず。

二月官廳に、定考といふ事するは何事にあらん。釋奠もいかならん。孔子などは掛け奉りてする事なるべし。聰明とて、上にも宮にも、怪しき物など土器に盛りてまゐらす。頭辨の御許より」とて、主殿司、繪などやうなる物を、白き色紙につよみて、梅の花のいみじく咲きたるにつけてもてきたり。繪にやあらんと急ぎ取り入れて見れば、餅餠と

つめど―摘むに抓れるを掛く、又みよなに耳無し、菊に聞くを掛けし洒落
定考―六位以下の考課選叙也、反

讀を例とす
解文―舊説
花文といへるは不可、願書目錄などの如く態と事々しく書ける也

うるはし―中宮のお召と思ひ威儀を整へ来るなり

れいたう―

いふものを、二つ竝べてつよみたるなりけり。添へたるたて文に、解文のやうに書き「進上餅餠」つよみ、例によりて進上如件、少納言殿に」とて、月日かきて、「任那成行」とて、奥に、「この男はみづから参らんとするを、晝はかたちわろしとてまゐらぬなり」と、いみじくをかしけに書き給ひたり。御前に参りて御覽せさせれば、「めでたくもかよれたるかな。をかしうしたり」など譽めさせ給ひて、御文はとらせ給ひつ。「返事はいかがすべからん。この餅餠もてくるには、物などやとらすらん。知りたる人もがな」といふを聞しめして、「惟仲が聲しつる、呼びて問へ」との給はすれば、はしに出でて、「左大辨にも聞えん」と、侍していはすれば、いとよくうるはしうてきたり。「あらず私事なり。もしこの辨少納言などのもとに、かよる物もてきたる下部などには、することやある」と問へば、「さる事も侍らず、唯とどめてくひ侍る。何しに問はせ給ふ。もし上官のうちにて、えさせ給へるか」といへば、「いかどは」と答ふ。唯返しをいみじう赤き薄様に、「みづから持てまうでこぬ下部は、いとれいたうなりとなん見ゆる」とて、めでたき紅梅

房道、一説
冷淡の音便

につけて奉るを、すなはちおはしまして、「下部さぶらふ」との給へば、出でたるに、「さやうのものぞ、歌よみして遣せ給へると思ひつるに、美々しくもいひたりつるかな。女少しわれはと思ひたるは、歌よみがましくぞある。さらぬこそ語ひよけれ。まろなどにさる事は人人は、かへりて無心ならんかし」との給ふ。「則光、成康など、笑ひて止みにし事を、殿の前に人々と多かりけるに、語りまをしたまひければ、いとよく言ひたるとなんの給はせし」と人の語りし。これこそ見苦しき我ほめどもなりかし。「などてつかさえはじめたる六位笏に、職の御曹司のたつみの隅の築地の板をせしぞ、更に西東をもせよかし、又五位もせよかし」などいふことを言ひ出でて、「あぢきなき事どもを。衣などにすぐろなる名どもをつけけん、いとあやし。衣の名に、ほそながをばさもいひつべし。なぞ汗衫は、しりながといへかし。男の童の著るやうに。なぞからぎぬは、みじかきぎぬとこそいはめ。されどそれは、唐土の人の著るものなれば。うへのきぬの袴、さいふべし。下襲もよし。また大口、長さよりは口ひろければ。袴いとあぢきなし。指貫

事どもを
事どもよ

夜居の僧の
—此下に寐
たらんはと
補ふ

もなぞ、あしぎぬ、もしはさやうのものは、足ぶくろなどもいへかし」など、萬の事をいひのよしるを、「いであなかしがまし、今はいはじ、寐給ひね」といふ答に、「夜居の僧のいとわろからん、夜ひと夜こそ猶のたまはめ」と、にくしと思ひたる聲さまにていひ出でたりしこそ、をかしかりしにそへて驚かれにしか。

故殿の御ために、月ごとの十日、御經佛供養させ給ひしを、九月十日、職の御曹司にてせさせ給ふ。上達部、殿上人いとおほかり。清範講師にて、説く事どもいとかなしければ、殊に物のあはれふかよるまじき若き人も、皆泣くめり。終てて酒のみ詩誦じなどするに、頭中將齊信の君、月と秋と期して身いづくにかといふ事をうち出し給へりしかば、いみじうめでたし。いかでかは思ひいで給ひけん。おはします所に分け参るほどに、立ち出でさせ給ひて、「めでたしな。いみじうけうの事にいひたる事にこそあれ」とのたまはすれば、「それを啓しにとて、物も見さして参り侍りつるなり。猶いとめでたくこそ思ひはべれ」と聞えさすれば、「ましてさ覺ゆらん」と仰せらるゝ。わざと呼びもいで、

月と秋と—
和漢朗詠集
管三品の句
けうのこと
—希有の事
又は興の事

さらなり—
勿論也
いかでか—
契ある身と
なりては如
何で響むる
を得んと也

おのづからあふ所にては、「などかまろを、まほに近くは語り給はぬ。『さすがにくしな
ど思ひたるさまにはあらずと知りたるを、いと怪しくなん。さばかり年ごろになりぬる
得意の、疎くてやむはなし。殿上などに明暮なきをりもあらば、何事をおもひでにせ
ん』との給へば、「さらなり。かたかるべき事にもあらぬを、さもあらん後には、え響め奉
らざらんが口惜しきなり。うへの御前などにて、役とあつまりて響め聞ゆるに、いかで
か。たどおほせかし。かたはらいたく、心の鬼いで来て、言ひにくく侍りなんものを」
といへば、笑ひて、「などさる人しも、他目より外に、響むるたぐひ多かり」との給ふ「そ
れがにくからずばこそあらめ。男も女も、けちかき人をかたひき、思ふ人のいさよかあ
しき事をいへば、腹だちなどするが、わびしう覺ゆるなり」といへば、「たのもしけなの
事や」との給ふもをかし。

頭辨の職にまゐり給ひて、物語などし給ふに、夜いと更けぬ。「明日御物忌なるにこもる
べければ、丑になりなば悪しかりなん」とてまゐり給ひぬ。つとめて、藏人所の紙屋紙ひ

孟嘗君—史
記列傳に出
でたり

きかさねて、「後のあしたは残り多かる心地なんする。夜を通して昔物語も聞え明さんと
せしを、鶏の聲に催されて」と、いといみじう清けに、裏表に事多く書き給へる。いと
めでたし。御返に、「いと夜深く侍りける鶏のこゑは、孟嘗君のにや」ときこえたれば、た
ちかへり、「孟嘗君の鶏は、函谷關を開きて、三千の客僅にされりといふは、逢阪の關の
事なり」とあれば、

夜をこめて鳥のそらねははかるとも世にあふ阪の關はゆるさじ
心かしこき關守待るめりと聞ゆ。立ちかへり、

逢阪は人こえやすき關なればとりも鳴かねどあけてまつとか

とありし文どもを、はじめのは、僧都の君の額をさへつきて取り給ひてき。後々の御
前にて、「さて逢阪の歌はよみへされて、返しもせずなりにたる、いとわろし」と笑はせ
給ふ。「さてその文は、殿上人皆見てしは」との給へば、實に覺しけりとは、これにてこ
そ知りぬれ。「めでたき事など人のいひ傳へぬは、かひなき業ぞかし。また見苦しければ、

さてその文
—行成の詞
めでたき事

—清少の詞
思へど—
本思へに作
る

思ふ人の中
に—私があ
なたの思ふ
人の數の中
に

御文はいみじく隠して、人につゆ見せ侍らぬ志のほどをくらぶるに、ひとしうこそは」といへば、「かう物思ひしりていふこそ、なほ人々には似ず思へど、思ひ隈なくあしうしたりなど、例の女のやうにいほんところ思ひつるに」とて、いみじう笑ひ給ふ。「こはなご、よろこびをこそ聞えめ」などいふ。「まろが文をかくし給ひける、又猶うれしきことなりいかに心憂くつらからまし、今よりもなほ頼み聞えん」などの給ひて、後に經房の中將「頭辨はいみじう譽め給ふとは知りたりや。一日の文のついでに、ありし事など語り給ふ。思ふ人々の譽めらるゝは、いみじく嬉しく」など、まめやかにの給ふもをかし。「うれしきことも二つにてこそ。かの譽めたまふなるに、また思ふ人の中に侍りけるを」などいへば、「それはめづらしう、今の事のやうにもよろこび給ふかな」との給ふ。五月ばかりに、月もなくいとくらき夜、「女房やさぶらひ給ふ」と、こゑぐしていへば、「出でて見よ。例ならすいふは誰そ」と仰せらるれば、出でて、「こは誰そ。おどろくしうきはやかなるは」といふに、物もいはで、御簾をもたけて、そよろとさし入るゝは、

このきみ—
竹の異名、
晉の王子猷
の故事

この君と稱
す—朗詠に
出でたる藤
篤茂の詩序
の詞

をかしがれ
ば—一説を
かしかれば

吳竹の枝なりけり。「おい、このきみにこそ」といひたるを聞きて、「いざや、これ殿上に行きて語らん」とて、中將、新中將、六位どもなどありけるはいぬ。頭辨はとまり給ひて、「怪しくいぬるものどもかな。御前の竹ををりて歌よまんとしつるを、職にまゐりて、同じくば、女房など呼び出でてをと言ひてきつるを、吳竹の名をいと疾くいはれて、いぬるこそをかしけれ。誰が教をしりて、人のなべて知るべくもあらぬ事をばいふぞ」などのたまへば、「竹の名とも知らぬものを、なまねたしと思しつらん」といへば、「實ぞえ知らじ」などの給ふ。まめごとなど言ひ合せて居給へるに、この君と稱すといふ詩を誦して、又集り來れば、「殿上にていひ期しつる本意もなくては、なかへり給ひぬるぞ。いと怪しくこそありつれ」との給へば、「さる事には何の答をかせん。いとなか／＼ならん。殿上にても言ひのよしりつれば、うへも聞しめして、興せさせ給ひつる」とかたる。辨もろともに、かへす／＼同じ事を誦じて、いとをかしがれば、人々出でて見る。とりどりに物ども言ひかはして歸るとて、なほ同じ事を諸聲に誦じて、左衛門の陣に入るま

で聞ゆ。翌朝、いと疾く、少納言の命婦といふが御文まらせたるに、この事を啓したれば、しもなるを召して、「さる事やありし」と問はせ給へば、「知らず、何とも思はでいひ出で侍りしを、行成の朝臣のとりなしたるにや侍らん」と申せば、「とりなすとも」と打ち笑ませ給へり。誰が事をも、殿上人譽めけりと聞かせ給ふをば、さ言はるゝ人をよろこばせ給ふもをかし。

圓融院の御はての年、皆人御服ぬぎなどして、あはれなる事を、おほやけより始めて、院の人も、花の衣になどいひけん世の御事など思ひ出づるに、雨いたう降る日、藤三位の局に、蓑蟲のやうなる童の、大なる木のしろきにたて文をつけて、「これ奉らん」といひければ、「いづこよりぞ、今日明日御物忌なれば、御蔭もまらぬぞ」とて、しもは立てたる蔭のかみより取り入れて、さなんとはきかせ奉らず、「物忌なれば見えす」とて、上についさして置きたるを、つとめて手洗ひて、「その巻數」とこひて、伏し拜みてあけたれば、胡桃色といふ色紙の厚肥えたるを、あやしと見てあけてゆけば、老法師のいみ

花の衣に—
遍昭、皆人
は花の衣に
なりぬなり
苔の袂、乾
きだにせよ
巻數—寺に
て經供養す
るに讀みた

じけなるが手にて、

これをだにかたみと思ふに都には葉がへやしつるしひしばの袖

とかきたり。あさましくねたかりけるわざかな。誰がしたるにかあらん。仁和寺の僧正のにやと思へど、よもかゝる事のたまはじ。なほ誰ならん。藤大納言ぞかの院の別當におはせしかば、そのし給へる事なめり。これをうへの御前、宮などに、疾うきこしめさせばやと思ふに、いと心もとなけれど、なほ恐しう言ひたる物忌をしはてんと念じくらしして、まだつとめて、藤大納言の御許に、この御返しをしてさしおかせたれば、すなはち又返事しておかせ給へりけり。それを二つながら取りて、急ぎ参りて、「かゝる事なん侍りし」と、うへもおはします御前にて語り申し給ふを、宮はいとつれなく御覽じて「藤大納言の手のさまにはあらで、法師にこそあめれ」との給はすれば、「さはこそ誰がしわざにか。すきくしき上達部、僧綱などは誰かはある。それにやかれにや」など、おほめきゆかしがり給ふに、うへ「このわたりに見えしにこそは、いとよく似ためれ」と打ち

る經の巻數
を記し附け
たる紙
しひしばの
袖—四位の
異名、歌は
藤三位の四
位より三位
に加階せる
をいへる也

見えしにこ

そは―見え
し料紙にこ
そは

ほよゑませ給ひて、今一すぢ御厨子のもとなりけるを、取り出でさせ給へれば、「いであ
な心う、これおほされよ、あな頭いたや、いかで聞き侍らん」と、たどせめに責め申し
て、恨み聞えて笑ひ給ふに、やうく仰せられ出でて、「御使にいきたりける鬼童は、臺
盤所の刀自といふものの供なりけるを、小兵衛が語ひ出したるにやありけん」など仰せ
らるれば、宮も笑はせ給ふを、引きゆるがし奉りて、「などかく謀らせおはします。なほ
うたがひもなく、手を打ち洗ひて伏し拜み侍りしことよ」と笑ひねたがり居給へるさま
も、いとほこりに愛敬づきてをかし。さてうへの臺盤所にも笑ひのよしりて、局におり
て、この童尋ね出でて、文取り入れし人に見すれば、「それにこそ侍るめれ」といふ。「誰
が文を、誰がとらせしぞ」といへば、しれぐとうち笑みて、ともかくもいはで走り
けり。藤大納言後に聞きて、笑ひ興じ給ひけり。

つれづれなるもの

所さりたる物忌。馬おりぬ雙六。除目に官得ぬ人の家。雨うち降りたるはまして徒然なり。

つれづれなくさむるもの

物語。碁。雙六。三四ばかりなる兒の物をかしういふ。又いとちひさき兒の物語したる
が、笑みなどしたる。菓子。男のうちさるがひ、物よくいふがきたるは、物忌なれどい
れつかし。

とりどころなきもの

かたちにくけに心あしき人。みそひめの濡れたる。これいみじうわろき事いひたると、萬
の人にむなることとて、今とどむべきにもあらず。又あとびの火箸といふ事、などて
か、世になき事ならねば、皆人知りたらん。實に書きいで人の見るべき事にはあらねど、
この草紙を見るべきものと思はざりしかば、怪しき事をも、にくき事をも、唯思はん事
のかぎりを書かんとてありしなり。

なほ世にめでたきもの

臨時の祭の御前ばかりの事は、何事にかあらん。試樂もいとをかし。春は空のけしきの

―常に居る
所を去りて
他に行きた
る
さるかひ―
滑稽にて、
道戯て

みそひめ―
御衣ひめの
り
あとび―跡
火、葬禮の
送り火

所一藏人所
陪從一舞人
に從へる地
下のもの
やくがひ一
青螺の盃、
屋久島の産
かしこき云
云一火焼屋
を納殿にし
て也、納殿
は重器所藏
の所なれば
かしこきと
いふ

どかにて、うらくとあるに、清涼殿の御前の庭に、掃部司のたよみどもを敷きて、使は北おもてに、舞人は御前のかたに、これらは僻事にもあらん。所の衆ども、衝重どもとりて前ごとに居ゑわたし、陪從もその日は御前に出で入るぞかし。公卿殿上人は、かはるく盃とりて、はてにはやくがひといふ物、男などのせんだにうたてあるを、御前に女ぞ出でて取りける。思ひかけず人やあらんとも知らぬに、火焼屋よりさし出でて、多く取らんと騒ぐものは、なかくうちこほしてあつかふ程に、かかるかにふと取り出でぬるものには遅れて、かしこき納殿に、火焼屋をして、取り入るよこそをかしけれ。掃部司のものども、たよみとるやおそきと、主殿司の官人ども、手ごとに箒とり、すなごならず。承香殿の前のほどに、笛を吹きたて、拍子うちて遊ぶを、疾く出でこなんと待つに、有度濱うたひて、竹のませのもとに歩み出でて、御琴うちたる程など、いかにせんとぞ覺ゆるや。一の舞のいとうるはしく袖をあはせて、二人はしり出でて、西に向ひて立ちぬ。つぎく出づるに、足踏を拍子に合せては、半臂の緒つく

竹一吳竹臺

うちたるき
ぬ一打衣と
て、糊附の
布を打ち光
澤を出した

ろひ、冠袍の領などつくろひて、あやもなきこま山などうたひて舞ひ立ちたるは、すべていみじくめでたし。大比禮など舞ふは、日一日見るとも飽くまじきを、終てぬるこそいと口惜しけれど、又あるべしと思ふはたのもしきに、御琴かきかへして、このたびやがて竹の後から舞ひ出でて、ぬぎ垂れつるさまどものなまめかしさは、いみじくこそあれ。搔練の下襲など亂れあひて、こなたかなたにわたりなどしたる、いで更にいへば世の常なり。このたびは又もあるまじければにや、いみじくこそ終てなん事は口惜しけれ。上達部なども、つどきて出で給ひぬれば、いとさうくしう口をしきに、賀茂の臨時の祭は、還立の御神樂などにこそなぐさめらるれ。庭燎の烟の細うのほりたるに、神樂の笛のおもしろうわなよき、ほそう吹きすましたるに、歌の聲もいとあはれに、いみじくおもしろく、寒くさえ氷りて、うちたるきぬもいとつめたう、扇もたる手のひゆるもおほえず。才の男どもも召して飛びきたるも、人長の心よけさなどこそいみじけれ。里なる時は、唯

るものによ
才の男御
神樂の歌人
也(和訓栞)

あんなる一
その靈を祀
りてある

渡るを見るに、飽かねば、御社まで行きて見るをりもあり。大なる木のもとに車たてたれば、松の烟たなびきて、火のかけに半臂の緒、きぬのつやも、晝よりはこよなく勝りて見ゆる。橋の板を踏みならしつゝ、聲合せて舞ふ程もいとをかしきに、水の流るゝ音、笛の聲などの合ひたるは、實に神も嬉しとおほしめすらんかし。少將といひける人の、年ごとに舞人にて、めでたきものに思ひしみけるに、なくなりて、上の御社の一の橋のもとにあんなるを聞けば、ゆゑしう、せちに物おもひいれじと思へど、猶このめでたき事をこそ、更にえ思ひすつまじけれ。「八幡の臨時の祭の名残、こそいとつれなくなれ。などでかへりて又舞ふわざをせざりけん、さらばをかしまし。祿を得て後よりまかづるこそ口惜しけれ」などいふを、うへの御前に聞き召して、「明日かへりたらん、めして舞はせん」など仰せらるゝ。「實にやさふらふらん、さらばいかにめでたからん」など申す。うれしがりて、宮の御前にも、「猶それまはせさせ給へ」と集りて申しまどひしかば、そのたびかへりて舞ひしは、嬉しか

たゆみつる
に油断し
て居たるに

故殿一關白
道隆

りしものかな。さしもや有らざらんと打ちたゆみつるに、舞人前に召すを聞きつけたる心地、物にあたるばかり騒ぐもいと物ぐるほしく、下にある人々まどひのほるさまこそ、人の從者、殿上人などの見るらんも知らず、裳を頭にうちかづきてのほるを、笑ふもことわりなり。故殿などおはしまさで、世の中に事出で、物さわがしくなりて、宮又うちにもいらせ給はず、小二條といふ所におはしますに、何ともなくうたてありしかば、久しう里に居たり。御前わたりおほつかなさにぞ、猶えかくてはあるまじかりける。左中將おはして物語し給ふ。「今日は宮にまゐりたれば、いみじく物こそあはれなりつれ。女房の装束、裳唐衣などの折にあひ、たゆまずをかしても侍ふかな。御簾のそばのあきたるより見入れば、八九人ばかり居て、黄朽葉の唐衣、薄色の裳、紫苑、萩などをかきしう居なみたるかな。御前の草のいと高きを、などかこれは茂りて侍る。はらはせてこそといひつれば、露おかせて御覽せんとて殊更にと、宰相の君の聲にて答へつるなり。をかしくも

いさ一否、
いやなに
おいらかに
も一この語
の下にあれ
かしと補
ふ、心を廣
く持て
左大臣の云
云一清少が
道長方に心
を通ずる由
に傍輩の私
語き合ふ也
しるは縁あ

覺えつるかな。御里居いと心憂し。かゝる所に住居せさせ給はんほどは、いみじき事ありとも、必侍ふべき物に思し召されたるかひもなくなど、あまた言ひつる。語りきかせ奉れとなめりかし。参りて見給へ。あはれけなる所のさまかな。露臺の前に植ゑられたりける牡丹の、唐めきをかしき事」などの給ふ。「いさ人のにくしと思ひたりしかば、又にくく侍りしかば」と答へ聞ゆ。「おいらかにも」とて笑ひ給ふ。實にいかならんと思ひまゐらす御氣色にはあらで、さぶらふ人たちの、「左大殿のかたの人しるすぢにてあり」などさよめき、さし集ひて物などいふに、下より参るを見ては言ひ止み、はなち立てたるさまに見ならはずにくければ、「まるれ」などあるたびの仰をも過して、實に久しうなりにけるを、宮の邊には、唯彼方がたになして、虚言なども出で來べし。例ならず仰事などもなくて、日頃になれば、心細くて打ちながむる程に、長女文をもてきたり。「御前より左京の君して、忍びて賜はせたりつる」といひて、こよにてさへひき忍ぶもあまりなり。人傳の仰事にてあらぬなめりと、胸つぶれてあけたれば、かみには物もかよせ

り、關係あり等の義
いはで思ふぞ一古今六帖、心には下ゆく水のわき返りいはで思ふぞいふにまされる
まづ知るさま一まづ涙ぐむ様子、古今集、まづしる物は涙なりけり

給はず、山吹の花びらを唯一つ包ませたまへり。それに「いはで思ふぞ」と書かせ給へるを見るもいみじう、日ごろの絶間思ひ歎かれつる心も慰みて嬉しきに、まづ知るさまを長女も打ちまもりて、「御前にはいかに、物のをりごとに思し出で聞えさせ給ふなるものを」とて、「誰も怪しき御ながるとのみこそ侍るめれ。などか参らせ給はぬ」などいひて、「こよなる所に、あからさまにまかりて参らん」といひていぬる後に、御返事書きてまゐらせんとするに、この歌のもと更に忘れたり。「いとあやし。同じふる事といひながら、知らぬ人やはある。こよもとに覺えながら、言ひ出でられぬはいかにぞや」などいふを聞きて、ちひさき童の前に居たるが、「下ゆく水のところぞ申せ」といひたる。などてかく忘れつるならん。これに教へらるよもをかし。御かへりまゐらせて、少しほど經て参りたり。いかごと、例よりはつよましようて、御凡帳にはたかくれたるを、「あれは今参か」など笑はせ給ひて、「にくき歌なれど、このをりは、さも言ひつべかりけりとなん思ふを、見つけでは暫時えこそ慰まじけれ」などの給はせて、かはりたる御氣色もな

人のなぞなぞ云々以下罪さりける事まで中宮の御物語を間接に敘したるなりたのむる一他をして己を頼みに思はしむる

天にはり弓一弦月即ち三日月、極

し。童に教へられしことばなど啓すれば、いみじく笑はせ給ひて、「さる事ぞ、あまりあなづるふる事は、さもありぬべし」など仰せられて、ついでに、人のなぞくあはせしける所に、かたくなにはあらで、さやうの事にらうくじかりけるが、「左の一番はおのれいはん、さ思ひ給へ」などたのむるに、さりともしわろき事は言ひ出でじと選り定むるに、「その詞を聞かん、いかに」など問ふ。「唯まかせてものし給へ、さ申していと口惜しうはあらじ」といふを、實にと推しはかる。日いと近うなりぬれば、「なほこの事のたまへ、非常にをかしき事もこそあれ」といふを、「いさ知らず。さらばあなたのまれそ」などむつかれば、覺束なしと思ひながら、その日になりて、みな方人の男女居分けて、殿上人など、よき人々多く居竝みてあはするに、左の一番にいみじう用意もてなしたるさまの、いかなる事をか言ひ出でんと見えたれば、あなたの人も、こなたの人も、心もとなしく打ちまもりて、「なぞく」といふほど、いと心もとなし。「天にはり弓」といひ出でたり。右の方の人は、いと興ありと思ひたるに、こなたの方の人は、物もおほえずあさま

めて卑近の謎なりをこに馬鹿氣て

しうなりて、いとにくく愛敬なくて、「あなたによりて、殊更にまけさせんとしけるを」など、片時のほどに思ふに、右の人をこにおもひて、うち笑ひて、「やよさらしに知らず」と、口ひきたれて猿樂しかくるに、「數させく」とてさよせつ。「いと怪しき事、これ知らぬもの誰かあらん。更に數さすまじ」と論ずれど、「知らずといひ出でんは、などてかまくるにならざらん」とて、つぎくのも、この人に論じかたせける。いみじう人の知りたる事なれど、覺えぬ事はさこそはあれ。「何しかはえ知らずといひし」と、後に恨みられて、罪さりける事を語り出でさせ給へば、御前なるかぎりは、さは思ふべし。「口をしく思ひけん、こなたの人の心地聞し召したりけん、いかににくかりけん」など笑ふ。これは忘れたることかは、皆人知りたることにや。正月十日、空いとくらう、雲も厚く見えながら、さすがに日はいとけざやかに照りたるに、えせものの家の後、荒島などいふものの、土もうるはしうあをからぬに、桃の木わかだちて、いとしもとがちにさし出でたる、片つ方は青く、いま片枝は濃くつややかに

に―若枝多
くさして
はこえたる
―上に引上
げて袋の如
くくさりた
る也

ほこりか―
ほこり顔、
得意満面

て、蘇枋やうに見えたるに、細やかなる童の、狩衣はかけやりなどして、髪は麗しきが
のほりたれば、又紅梅の衣白きなど、ひきはこえたる男子、半靴はきたる、木のもとに
立ちて、「我によき木切りて、いで」など乞ふに、又髪をかしけなる童女の、袖ども綻びが
ちにて、袴は萎えたれど、色などよきうち著たる、三四人、「卯槌の木のよからん切りて
おろせ、こよに召すぞ」などいひて、おろしたれば、はしりがひ、とりわき、「我に多く」
などいふこそをかしけれ。黒き袴著たる男走り來て乞ふに、「まで」などいへば、木のも
とによりて引きゆるがすに、危ふがりて、猿のやうにかいつきて居るもをかし。梅など
のなりたるをりも、さやうにぞあるかし。

清けなるをのこの、雙六を日ひと日うちて、なほ飽かぬにや、みじかき燈臺に火を明く
かよけて、敵の采をこひせめて、とみにも入れねば、筒を盤のうへにたてて待つ。狩衣
の領の顔にかよれば、片手しておし入れて、いとこはからぬ烏帽子をふりやりて、「さは
いみじう呪ふとも、うちはづしてんや」と、心もとなけにうちまもりたるこそ、ほこり

拾ひおく―
石を拾ひお
く
およびて―
および腰に
なりて

椽のかさ―
どんぐりの
實の笠

つきばな―
吐鼻汁

かに見ゆれ。

碁をやんごとなき人のうつとて、紐うち解き、ないがしろなるけしきに拾ひおくに、お
とりたる人の、るすまひもかしこまりたる氣色に、碁盤よりは少し遠くて、およびつ
つ、袖の下いま片手にて引きやりつようちたるもをかし。

おそろしきもの

椽のかさ。焼けたる所。みづぶき。菱。髪おぼかる男の頭洗ひてほすほど。栗のい
が。

きよしと見ゆるもの

土器。新しき鏡。疊にさす薦。水を物に入ると透影。新しき細櫃。

きたなけなるもの

鼠の住處。翌朝手おそく洗ふ人。白きつきはな。すよばなしありく兒。油入るゝ物。雀
の子。暑きほどに久しくゆあみぬ。衣の萎えたるは、いづれもくきたなけなる中に、練

色の衣こそきたなけなれ。

いやしけなるもの

式部丞の爵。黒き髪かみのすぢふとき。布屏風ぬのびやまがの新しき。舊ふるり黒みたるは、さるいふかひなき物にて、なか／＼何とも見えす。新しくしたてて、櫻の花多くさかせて、胡粉ここな、朱砂すさなど色どりたる繪書きたる。遣戸やりき、厨子づし、何も田舎物あなかもものはいやしきなり。筵張ひしやはりの車のおそひ。檢非違使けつびゐしの袴。伊豫簾いよすの筋ふとき。人の子ひとこに法師子ほうしこのふとりたる。まことの出雲筵いづもひしらの疊。

むねつぶるよもの

人の子に
人の子及び
法師子ほうし法
弟、小僧
むねつぶる
胸がどき
つく
いちじるか
らぬ誰と

競馬くらべば見る。元結もとむすよる。親などの心地あしうして、例ならぬけしきなる。まして世の中などさわがしきころ、萬よろづの事おほえず。又物いはぬ兒ちごの泣き入りて乳ちちをも飲まず、いみじく乳母めのとの抱くにも止まで、久しう泣きたる。例の所などにて、殊に又いちじるからぬ人の聲聞きつけたるはことわり、人などのそのうへなどいふに、まづこそつぶるね。いみ

も明かに知
れぬ

じくにくき人の來るも いみじくこそあれ。昨夜きたる人の、今朝の文のおそき、聞く人さへつぶる。思ふ人の文ふみとりてさし出でたるも、またつぶる。

うつくしきもの

ふり瓜也
瓜の形即ち
瓜うりは顔の
意にや、一
本、うり
紅粉べに一説
清音にて綴
(へニ)即ち
いとぐるみ
あまにそぎ
たる垂髪
かぶく

ふりに書きたる兒ちごの顔。雀の子のねすなきするにをどりくる。又紅粉べになどつけて居ゑたれば、親雀の蟲など持て来てくゝむるも、いとらうたし。三つばかりなる兒ちごの、急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵ちりなどのありけるを、目敏めとに見つけて、いとをかしけなる指にとらへて、おとななどに見せたる、いとうつくし。あまにそぎたる兒ちごの目に、髪かみのおほひたるを搔かきは遣らで、うち傾かたきて物など見る、いとうつくし。たすきがけにゆひたる腰のかみの、白しろうをかしけなるも、見るにうつくし。おほきにはあらぬ殿上てんじやうわらはの、さうぞきたてられて歩くもうつくし。をかしけなる兒ちごの、あからさまに抱かきてうつくしむ程に、かいつきて寝入りたるもらうたし。籬ひなの調度ていど。蓮はすのうき葉はのいとちひさきを、池よりとりあけて見る。葵あひひのちひさきもいとうつくし。何もくちひさき物はいとうつく

かりの子
家鴨の卵

し。いみじう肥えたる兒の二つばかりなるが、白うつくしきが、二藍のうすものなど、衣ながくてたすきあけたるが、這ひ出でくるもいとつくし。八つ九つ十ばかりなるをのこの、聲をさなけにて文よみたる、いとつくし。鶏の雛の、足だかに、白うをかしけに、衣みじかなるさまして、ひよくとかしがましく鳴きて、人の後に立ちてありくも、また親のもとにつれだちありく、見るもうつくし。かりの子。舍利の壺。瞿麥の花。

ひとばえするもの

かなしく
いとほしく
あなたこな
たに住む
父子別居す
る

ことなることなき人の子の、かなしくしならはされたる。しはぶき。恥しき人に物いはんとするにも、まづさきにたつ。あなたこなたに住む人の子どもの、四つ五つなるは、あやにくだちて、物など取りちらして損ふを、常は引きはられなど制せられて、心のまよにもえあらぬが、親のきたる所えて、ゆかしかりける物を、「あれ見せよや母」などひきゆるがすに、おとななど物いふとて、ふとも聞き入れねば、手づから引き捜し出でて見るこ

そいにくけれ。それを「まさな」とばかり打ち言ひて、取り隠さで、「さなせそ、そこなふな」とばかり笑みていふ親もにくし。われえはしたなくもいはで見ることそ心もとなけれ。

名おそろしきもの

ほこぼし
一本ほこぼ
しに作る、
牽牛星

青淵。谷の洞。鰭板。鐵。土塊。雷は名のみならず、いみじうおそろし。暴風。ふさう雲。ほこぼし。おほかみ。牛はさめ。らう。ろうの長。いにすし。それも名のみならず、みるもおそろし。繩筵。強盜。又よろづにおそろし。ひぢかさ雨。地楊梅。生靈。鬼藤。鬼蕨。荆棘。枳殼。いりずみ。牡丹。うしおに。

見るにことなることなき物の文字にかきてことぐしきもの

覆盆子。鴨頭草。みづぶき。胡桃。文章博士。皇后宮の權大夫。楊梅。いたどりはまし
て虎の杖と書きたるとか。杖なくともありぬべき顔つきを。

むつかしけなるもの

むつかし
鴨頭草
本つゆくさ
に作る

むさくろし
あつかひ一
困る、一説
養ふ

繡物のうら。猫の耳のうち。鼠のいまだ毛も生ひぬを、巢の中より數多まろばし出したる。裏まだつかぬかはぎぬの縫目。殊に清けならぬ所のくらき。ことなる事なき人の、ちひさき子どもなど數多持ちてあつかひたる。いと深うしも志なき女の、心地あしうして久しく悩みたるも、男の心の中にはむつかしけなるべし。

えせものの所うるをりの事

子一屠蘇
をまつ嘗め
試みしむる
童女

正月の大根。行幸のをりの姫大夫。六月十二月の三十日の節折の藏人。季の御讀經の威儀師。赤袈裟著て僧の文ども讀みあけたる。いとらうくじ。御讀經佛名などの、御裝束の所の衆。春日祭の舍人ども。大饗の所のおゆみ。正月の藥子。卯杖の法師。五節の試の御髮上。節會御陪膳の采女。大饗の日の史生。七月の相撲。雨降る日の市女笠。渡するをりの櫂取。

くるしけなるもの

夜泣といふ物する兒の乳母。思ふ人二人もちて、こなたかなたに恨みふすべられたる

一の所一攝
政關白
ころろいら
れしたる一
氣の短き、
いらいらし
たる

男。こはき物怪あつかりたる驗者。驗だに早くばよかるべきを、さしもなきを、さすがに人わらはれにあらじと念ずる。いとくるしけなり。理なく物うたがひする男に、いみじう思はれたる女。一の所にときめく人も、え安くはあらねど、それはよかめり。こころいられたる人。

うらやましきもの

經など習ひて、いみじくたどくしくて、忘れがちにて、かへすぐおなじ所を讀むに、法師は理、男も女も、くるくくとやすらかに讀みたるこそ、あれがやうに、いつの折とこそ、ふと覺ゆれ。心地など煩ひて臥したるに、うち笑ひ物いひ、思ふ事なけにて歩みありく人こそ、いみじくうらやましけれ。稻荷に思ひおこして参りたるに、中の御社のほど、わりなく苦しきを念じてのほる程に、いさよか苦しけもなく、後れて來と見えたる者どもの、唯ゆきにさきだちて詣づる。いとうらやまし。二月午の日の曉に、いそぎしかど、坂のなからばかり歩みしかば、巳の時ばかりになりにつけり。やうく暑く

四たびは云
云一残る四
回はいとた
やすし

さがりば
髪の下げぎ
は

鳥の跡云々
一字の拙劣
なる形容、
挿入句なり

なにはわた
り云々一ま

さへなりて、まことにわびしう。かよらぬ人も世にあらんものを、何しに詣でつらんと
まで涙落ちてやすむに、三十餘ばかりなる女の、つほ装束などにはあらで、たゞ引きはこ
えたるが、「まろは七たびまうでし侍るぞ。三たびはまうでぬ、四たびはことにもあら
ず、未には下向しぬべし」と道に逢ひたる人にうち言ひて、くだりゆきしこそ、たゞな
る所にては目もとまるまじきことの、かれが身に只今ならばやとおほえしか。男も、女
も、法師も、よき子もちたる人、いみじううらやまし。髪長く麗しう、さがりばなどめ
でたき人。やんごとなき人の、人にかしづかれ給ふも、いとうらやまし。手よく書き、歌
よく詠みて、物のをりにもまづとり出でらるゝ人。よき人の御前に、女房いと数多さぶ
らふに、心にくき所へ遣すべき仰書などを、誰も鳥の跡などのやうにはなどかはあら
ん、されど下などにあるをわざと召して、御硯おろしてかよせ給ふ、うらやまし。さや
うの事は、所のおとななどになりぬれば、實になにはわたりの遠からぬも、事に随ひて
書くを、これはさはあらで、上達部のもと、又始めてまるらんなど申さする人の女など

だ習ひ出に
て拙書なる
をいふ、難
波津の言の
葉は手習ふ
人の初(古
今集序)、旁
註には、和
泉式部の筆
もつゝゆが
みてものの
書かるゝは
難波わたり
のあしてな
るらんと云
ふ歌を引證
して手の善
悪も分れざ
る程といへ
り

には、心ことに、うへより始めてつくるはせ給へるを、集りて、戯にねたがりいふめ
り。琴笛ならふに、さこそはまだしき程は、かれがやうにいつしかと覺ゆめれ。うち東
宮の御乳母、うへの女房の御かたぐゆるされたる。三昧堂たてて、よひあかつきにい
のられたる人。雙六うつに、かたきの賽きよたる。まことに世を思ひすてたるひじり。
とくゆかしきもの

巻染、村濃、括物など染めたる。人の子産みたる、男女疾く聞かまほし。よき人はさ
らなり、えせもの、下種の分際だにきかまほし。除目のまだつとめて、かならずしる人
のなるべきをりも聞かまほし。思ふ人のおこせたる文。

こころもとなきもの

人の許に、頼の物ぬひにやりて待つほど、物見に急ぎ出でて、今やくとくるしう居入
りつよ、あなたをまもらへたる心地。子産むべき人の、ほど過ぐるまでさるけしきのな
き。遠き所より思ふ人の文を得て、かたく封じたる續飯など放ちあくる、心もとなし。物

事なりにけり
りとして
はや通り過
ぎぬとて、
原本とての
二字なし
我はさるも
のにて—自
分がすける
場合は兎に
角として

たてるが—
一本たてる
に

見に急ぎ出でて、事なりにけりとして、白き答など見つけたるに、近くやりよする程、佗しう
おりてもいぬべき心地こそすれ。知られじと思ふ人のあるに、前なる人に教へて物いは
せたる。いつしかと待ち出でたる兒の、五十日百日などのほどになりたる、行末いと心
もとなし。頼のもの縫ふに、くらきを針に糸つくる。されど我はさるものにて、あり
ぬべき所をとらへて人につけさするに、それも急げばにやあらん、頼にもえさし入れぬ
を、「いで唯なすけそ」といへど、さすがになどてかはと思ひがほにえさらぬは、にくさ
さへそひぬ。何事にもあれ、急ぎて物へ行くをり、まづわがさるべき所へ行くとして、「只
今おこせん」と出てぬる車待つ程こそ心もとなけれ。大路往きけるを、さなりけると
喜びたれば、外ざまに往ぬるいとくちをし。まして物見に出でんとてあるに、「事はなり
ぬらん」などいふを聞くこそわびしけれ。子うみける人の、後のこと久しき。物見に
や、又御寺まうでなどに、諸共にあるべき人を乗せに往きたるを、車さし寄せたてるが、頼
にも乗らで待たするもいと心もとなく、うちすてよも往ぬべき心地する。とみに煎炭お

心もとなし
—原本ひき
しに作る

はぐるめ—
齒黒、原本
まつはぐる
めに作る、
衍ならん

むべし
—歴々の
厳格なる

こす、いと心もとなし。人の歌の返し疾くすべきを、え詠み得ぬほど、いと心もとな
し。懸想人などはさしも急ぐまじけれど、おのづから又さるべきをりもあり。又まして
女も男も、たどに言ひかはすほどは、疾きのみこそはと思ふほどに、あいなく僻事も出
でくるぞかし。又心地あしく、物おそろしきほど、夜の明るるまつこそ、いみじう心も
となけれ。はぐるめのひる程も心もとなし。
故殿の御服の頃、六月三十日の御祓といふ事に出でさせ給ふべきを、職の御曹司は方あ
しとて、官のつかさのあいたる所に渡らせ給へり。その夜は、さばかり暑くわりなき闇
にて、何事もせばう瓦葺にてさまことなり。例のやうに格子などもなく、唯めぐりて御
簾ばかりをぞかけたる、なか／＼珍しうをかし。女房庭におりなどして遊ぶ。前裁には
萱草といふ草を、架垣のひていと多く植ゑたりける。花きはやかに重りて咲きたる、む
べししき所の前裁にはよし。時づかさなどは唯かたはらにて、鐘の音も例には似ず聞
ゆるを、ゆかしがりて、若き人々二十餘人ばかり、そなたに行きてはしり寄り、たかき

おしあげられたる—上
藤高位の
過したる—
年たけたる

秋ばかり云
云—詩句な
らん、やか
うは野郊又
は野干にや

屋やにのほりたるを、これより見あぐれば、薄鈍うすつとの裳も、唐衣からぎぬ、同じ色の單衣ひとへがさね襲くねなる、紅くねなるの袴はかまどもを著てのほりたるは、いと天人などこそえいふまじけれど、空よりおりたるにやとぞ見ゆる。おなじわかさなれど、おしあけられたる人はえまじらで、うらやましけに見あけたるもをかし。日暮れてくらまぎれにぞ、過すしたる人々皆立ちまじりて、右近うじんの陣じんへ物見に出できて、たはぶれ騒さわぎ笑ふもあめりしを、「かうはせぬ事なり、上達部かんだちめのつき給ひしなどに、女房にようどものほり、上官じやうくわんなどの居る障子を皆打ち通しそこなひたり」など苦しがるものもあれど、きよも入れず。屋やのいと古くて、瓦葺かはらぶきなればにやあらん、暑あつさの世に知らねば、御簾みすの外ごに夜も臥したるに、ふるき所なれば、蜈蚣むかといふもの、日ひと日おちかより、蜂はちまの巢すのおほきにて、つき集りたるなど、いとおそろしき。殿上人てんじやうじん日ごとに参り、夜も居明し、物言ふを聞きて、「秋ばかりにや、太政官たじやうくわんの地ちの、今やかうのにはとならん事を」と誦よみし出でたりし人こそをかしかりしか。秋になりたれど、かたへ涼しからぬ風の、所がらななめり。さすがに蟲の聲などは聞えたり。八日やつかにかへらせ

人間の四月
—白氏文集
大林寺桃花
人間四月芳
菲盡云々

露は別の涙
—菅家文章
七月七日
代二牛女に惜し
ノ曉、露應こ

たまへば、七夕たなはにまつりなどにて、例より近う見ゆるは、ほどのせばければななめり。宰相さいしやう中將ちゆうじやう齊信さいのぶ、宣方のぶかたの中將ちゆうじやうと参り給へるに、人々出でて物などいふに、ついでもなく、「明日あすはいかなる詩をか」といふに、いさよか思ひめぐらし、とどこほりなく、「人間の四月をこそは」と答こたへ給へる。いみじうをかしくこそ。過ぎたることなれど、心えていふはをかしき中にも、女房にようばうなどこそさやうの物わすればせね、男はさもあらず、詠みたる歌をだになまおほえなるを、まことにをかし。内うちなる人も、外そとなる人も、心えずとおもひたるぞ理ことわりなるや。

この三月三十日ちやうびつ、廊ほろの一の口に、殿上人てんじやうじんあまた立てりしを、やうくすべりうせなどして、たど頭中將ちゆうじやう源中將げんちゆうじやう、六位ひとりのこりて、よろづのこといひ、經よみ、歌うたひなどするに、「明けはてぬなり、歸りなん」とて、露は別の涙わかなるべしといふことを、頭中將ちゆうじやううち出し給へれば、源中將げんちゆうじやうもろともに、いとをかしう誦よみじたるに、「いそぎたる七夕たなはたかな」といふを、いみじうねたがりて、曉あけの別のすぢの、ふと覺えつるまよにいひて、わ

別涙一珠空
落云々

いそぎたる
云々一三月
三十日に七
夕の詩を誦
すればなり

葛城の神云
云一拾遺、
岩橋の夜の
契もたえぬ
べし明くる
侘しき葛城
の神、醜醜
き神なり

男は張翥一
清少と齊信
との暗號な
らん意未詳

びしうもあるわざかな」と、「すべてこのわたりにては、かゝる事思ひまはさずいふは、口惜しきぞかし」などいひて、あまりあかくなりしかば、「葛城の神、今ぞすぢなき」とて、わけておはしにしを、七夕のをり、この事を言ひ出せばやと思ひしかど、宰相になり給ひにしかば、必しもいかでかは、その程に見つけなどもせん、文かきて、主殿司しでやらんなど思ひし程に、七日に参り給へりしかば、うれしくて、その夜の事などいひ出せば、心もぞえたまふ。すゞろにふといひたらば、怪しなどやうちかたぶき給はん。さらばそれには、ありし事はんとてあるに、つゆおほめかて答へ給へりしかば、實にいみじうをかしかりき。月ごろいつしかと思ひ侍りしだに、わが心ながらすきくしと覺えしに、いかでさはた思ひまうけたるやうにの給ひけん。もろともにねたがり言ひし中將は、思ひもよらで居たるに、「ありし曉の詞いましめらるゝは、知らぬか」との給ふにぞ、「實にさしつ」などいひ、「男は張翥」などいふことを、人には知らせず、この君と心えていふを、「何事ぞく」と源中將はそひつきて問へど、いはねば、かの君に「猶これ

定め一貞操

詩を云々一
清少が帝の
前にて齊信
の朗詠をほ
め暫し宰相
にもならで
あれといふ
なり

蕭會稽云々
一朗詠の句
三十の期一
古詩の句な
らん本朝文

の給へ」と怨みられて、よき中なれば聞せてけり。いとあへなく言ふ程もなく、近うなりぬるをば、「押小路のほどぞ」などいふに、我も知りにけると、いつしか知られんとて、わざと呼び出でて、「碁盤侍りや、まろもうたんと思ふはいかど、手はゆるし給はんや。頭中將とひとし碁なり。なおほしわきそ」といふに、「さのみあらば定めなくや」と答へしを、かの君に語り聞えければ、「嬉しく言ひたる」とよろこび給ひし。なほ過ぎたること忘れぬ人はいとをかし。宰相になり給ひしを、うへの御前にて、「詩をいとをかしう誦じ侍りしものを、蕭會稽の古廟をも過ぎにしなども、誰か言ひはべらんとする。暫しならでもさぶらへかし。口惜しきに」など申しよかば、いみじう笑はせ給ひて、「さなんいふとて、なさじかし」など仰せられしもをかし。されどなり給ひにしかば、誠にさうくしかりしに、源中將おとらずと思ひて、ゆゑだちありくに、宰相中將の御うへをいひ出でて、「いまだ三十の期に逮ばずといふ詩を、こと人には似ず、をかしう誦じ給ふ」などいへば、「などかそれに劣らん、まさりてこそせめ」とて詠むに、「更にわろくもあらず」と